

狂犬を背負いし世界最強の大剣豪を目指す少年

ぺへ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

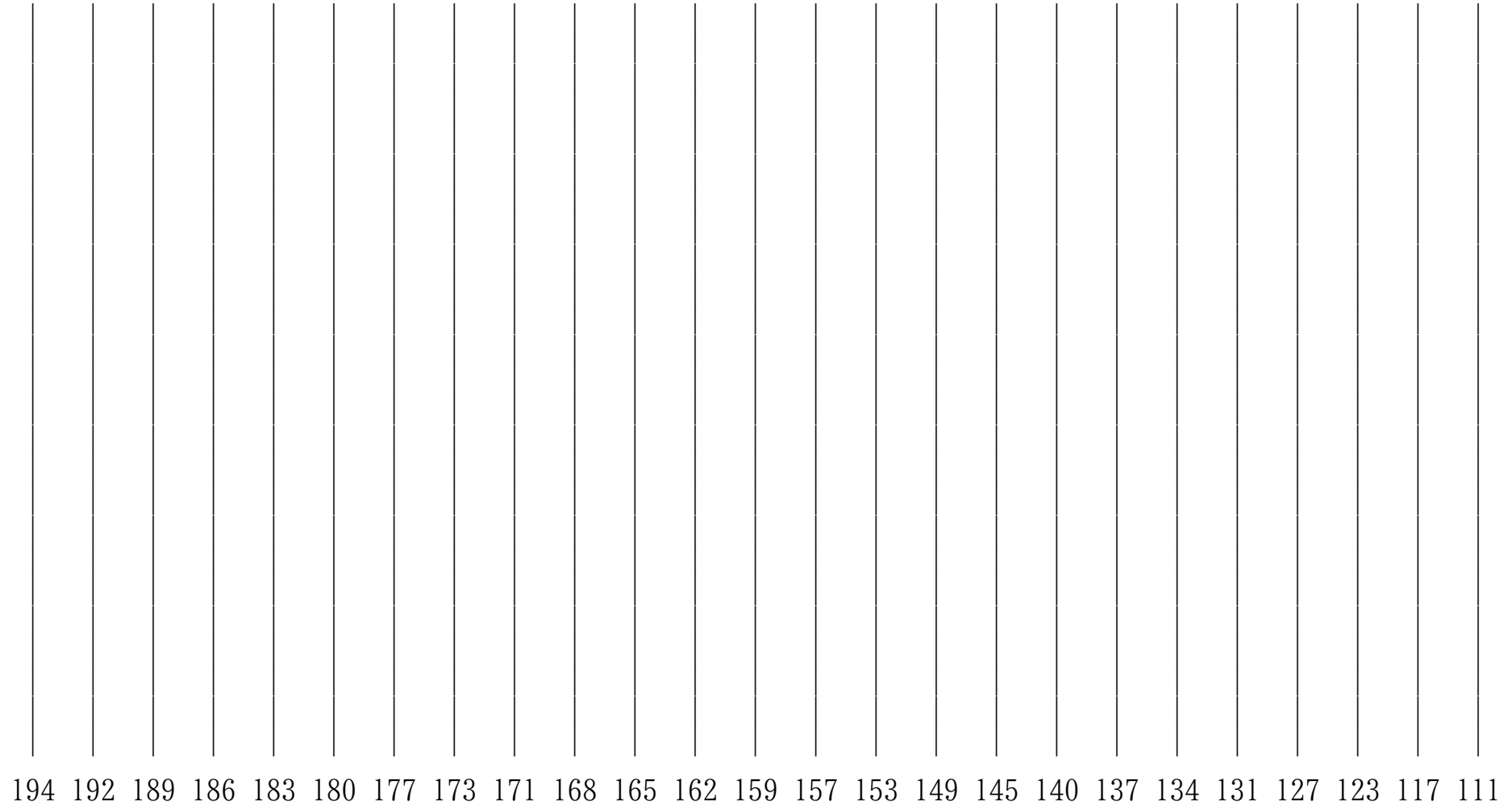
【あらすじ】

またあたらしいものです。

目次

24話	23話	22話	21話	20話	19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話 (殺し合い)	2話 (知識)	1話 (始まり)
108	104	100	97	92	88	84	79	73	70	64	60	54	51	44	41	38	34	31	23	18	13	8	1

4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 3 3 3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2
9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5
話 話



1話（始まり）

この世界に、本来居るはずのない少年が一人居た。名は『兵藤
麤路』。

『どんな人生であろうと道を外さずに生きて欲しい』という願いを込められて付けられた名だった。

そして、この少年には双子の兄がいた。名前を『兵藤一誠』。本来の次元なら主人公であり、ハーレムを作る少年。

しかし、ゾロはこの兄の事が嫌いだった。なんせ、兄のやらかした行動が自分にまで来るからだ。

小学2年生ながらもイツセーの変態行為は度を越し、ゾロも無実の罪を掛けられるようになったのだ。

やってもいない事で怒られ、虐められ。それを経験し、彼は他人と接するのを最小限に収めるようになった。しかし、そんな彼にも野望があった。

それは、世界最強の大剣豪になりたいと言う他人からしたら馬鹿にされるような夢。彼がその夢を抱くようになったのは、宮本武蔵と佐々木小次郎の巖流島の戦いを知ってからだ。

「自分もこうなりたい」「かつこよく敵を倒したい」

それからというもの、彼は剣道を習い始めた。そして、彼は才能に恵まれ僅か二年で大人と真っ向から勝負出来るほどの強さを得た。

しかし、ゾロはただ才能に胡座をかいていた訳ではない。己の目指す世界最強の大剣豪を毎日想い、ひたすらにトレーニングに打ち込んでいた。

剣道のある日は道場が閉まるギリギリまで竹刀を振り、家に帰れば腕立て等と言った基礎トレーニングを寝る寸前まで行う。

学校も剣道も休みの日は、裏山まで行き朝から晩まで木に竹刀を打ち込む。竹刀を振るごとに手の豆は潰れ、持ち手には血が滲むもそれを気にせずに打ち込む。

最初こそ両親はどうか止めさせようと色々画策したものの、全て上手く行かず次第に諦めた。

最後の策として門限を6時に決めて、これを破れば剣道の道具を全て捨て剣道を辞めさせるといふ脅しをかけてそこに納まった。

剣道バカであったが勉強も怠らない。自分は兄とは違うと周りに教えたかった。テストでは全ての教科で90点前後という高得点を取り続けた。しかし、それで周りの目が変わるはずもない。

それでもゾロは諦めなかった。毎日剣を想い、退屈な学校も頑張る。生徒の目は変わらないものの、教師からの目は大きく変わった。そんな小さな積み重ねをしていたある日、運命の歯車が動き出した。

剣道を始めて3年。遂に大人にも勝ち越し、しかしながらも決して鍛錬を怠らないゾロに変化が起きたのだ。

「・・・なんか、変だ」

休日、剣道も休みな為いつもの様に裏山に来て竹刀を握った時だ。自身の体にはほんの少し違和感を感じた。

主に背中だ。朝、来るまではいつもと同じだったのに、今は背中にザラザラとした感触を感じる。

竹刀を置き近くの川へ赴き上着を脱いで、後ろを振り向きながら川を見ると絶句してしまった。

6年生とは思えない引き締まり過ぎた体の一部に、入れた覚えのない刺青が入っていたからだ。

刺青は背中一面に描かれ、背中の中央には恐ろしい顔をした白い顔の般若、その周りには花が咲き誇り、胸上の方には蛇が蠢いているという、なんとも統一性のない五分袖の刺青。

しかし、不思議と力が湧き上がる。いつもより自然を感じられる。五感全てから自然が語り掛けて来るようにも感じる。

少年は消えろと念じると刺青が一瞬で消え、出ろと念じるとまた瞬時に現れる事を数時間掛けて知った。

時間を無駄にしたがそこまで悪くない。そんな風に思いながら帰路についていると、いつも通る公園が少し騒がしかった。複数のカラスのけたたましい声に猫の威嚇する声。

視線を移せば、黒猫がカラスに襲われていた。少年はすぐさまカラ

スを追い払い黒猫を助ける。しかし、黒猫は未だ警戒しており、掠れた声ではあるもののシャーシャーと声を出し、全身の毛を逆立てながらゾロを威嚇する。

「なんもしねえよ。ほら、喉乾いてるんだろ?」

ゾロは持参していた蓋付きの水筒にお茶を入れて、その場に置くと何もしないと言わんばかりに公園の入口の方まで離れ座り込む。

黒猫もそれを理解したのか、未だに警戒しながらもお茶を飲み始める。飲み終えて顔を上げると、ゾロはシツシツと手を動かし、黒猫もそれに従い後ろを振り向き林に入ろうとする。

「おい、どこ行くんた。まだあるぞ。」

黒猫は後ろを振り向くと、ゾロは更にお茶を注いでいた。黒猫は驚きながらもゾロが離れるまでそこを動かず、公園の入口まで離れてまた飲む。

「ニヤ〜」

「なんだ。もういいのか?なら、元気でな。もう襲われたりするんじゃないぞ。」

ゾロは蓋を閉めて入口の方に向かおうとすると不思議な紋様が公園の方に一瞬だけ見えた。

「ニヤツ!」

「あ?なんだ?見間違いか?」

『ふむ……。何か混ざっているがまあいい。』

声のした方に目をやると、貴族服を着た人が複数人空を飛んでいたのだ。

「な!?!ひ、人って空を飛べるのか!?!」

『人間か?見られるとは運のないヤツめ。死ね。』

男が魔法陣を展開しそこからゾロ目掛けて炎が放たれるが、黒猫がゾロの目の前を横切ると炎が霧散する。

「坊や。とつとと逃げるにや。私が守ってあげるから。」

「お、お前、喋れるのか!?!ね、猫って喋れるもんなのか!?!」

「君は何を言ってるにや!?!バカなこと言ってないでとつとと逃げる!!」

『させぬ!』

今度は黒猫に炎を幾つか放ち、黒猫が気付いた時にはもう遅く避け
るのは間に合わない程まで迫っていたのを、今度はゾロがギリギリで
抱え公園の入口の方まで離れる。

「な、何をしているのよ!」

「ああ!?お前が逃げろって言ったんだろ!」

「私を置いてに決まってるでしょ!このバカ!」

「誰がバカだ!誰が!」

ゾロは喋る黒猫を地面に置き、竹刀を握り構える。ゾロも分かつて
いる。これは試合の様な生ぬるいものではなく殺し合いなのだ。

しかし、不思議と怖くはなかった。それどころかワクワクしてい
た。

自分の野望を叶えるための最初の実践。ここで死ぬ気は無いが、こ
こで死ぬのなら自分はそれまで。

普通の小学生なら考えない事を考えていた。

「ああ、もう!このバカ!そんなんで勝てるわけないでしょ!」

「うるせえな。これしかないんだから仕方ねえだろ。おい、鬼!出て
こい!!」

ゾロが声に出した瞬間、先程の感覚が来る。自然を感じられる。そ
して、身体がいつもより軽く感じる。これなら行ける。そう確信し
た。

「んにや!?!な、なんで”仙術”を纏っているのよ!」

「あ?なんだそれ?まあいい。今はアイツらをぶっ飛ばすしか俺たち
の生き残る術は無いんだ」

「・・・分かったにや。でも、後からキチンと話を聞かせてもらおうよ」
「話すことなんざなんもねえよ」

そこまで話して1人と1匹は走る。黒猫はボンツと煙を立てると
黒髪で黒い着物を着た美少女に変化するが、ゾロは気にせず空の上に
いる者に対して竹刀を振るう。

無意識。しかし、竹刀に仙術を纏わせ、振るった竹刀から仙術が飛
び出し1人を真っ二つに斬る。

『な!?!』

それに驚いた者達は動きが止まってしまっても、それがいけなかった。黒髪の少女が魔法陣を展開し、鎖が飛ばして空を飛ぶ者達を捕え、地面に引きずり落とす。

ゾロは再び、無意識ながらも仙術を纏わせあつという間に残りの首を飛ばした。

結界が解除され、周りに振りまかれた殺意も一瞬で消える。

「ねえ、坊や。君、何者にやん?」

「俺は兵藤麤路。駒王小学校5年B組、剣道を習ってる」

「いや、そういう事じゃないんだけど・・・」

「つか、お前誰だ!?!さっきの喋る黒猫はどこ行った!?!」

「いや、そこじゃないにやん!絶対、疑問を持つ所はそこじゃない!それと、さっきの猫は私にやん!」

「なんだ、そうなのか。先に言えよ」

「・・・ねえ、君。変人って言われない?」

「いや?俺、友達居ないしな。つか、お前こそ誰だよ」

少女は頭を抱えた。とびつきり変なのと出会ってしまったと。人が空を飛ぶことに驚き、魔法を使い、変化を解いたにも関わらず、驚く論点がズレ過ぎているのだ。

「・・・まずは自己紹介からにや。私は黒歌。元妖怪で今はちよつと面倒な奴らに追われてるにや。それで、私が聞きたい事って言うのは、なんであんたが仙術を使っていたのかにや。師匠は誰?バツクほどの組織にやん?」

「仙術?バツク?なんの話してんだ、お前?頭、大丈夫か?」

ゾロの言葉にイラツと来て思わずゲンコツを放った。ゾロは頭を抑えてのたうち回るも黒歌は胸元を掴んで無理矢理立たせる。

「最後にもう一度だけ聞くにや。誰に仙術を習って、バツクの組織はどいつ?」

「だから、なんの話してんだ!そもそも、仙術ってなんだ!」

黒歌の頭は混乱してしまった。彼の言葉には一切信憑性はないのだが、嘘を言っているようにも見えない。

「ほ、本当に知らないの・・・？」

「だから知らねえって！本当になんの話してんだ！」

「・・・じ、じゃあ、なんで竹刀で悪魔が斬れてるにや？」

「あ？なんでって・・・な、なんで斬れてんだ!？」

「ここでようやくゾロも事の重大さに気付いた。竹刀は振るうものであつて他人を斬れるはずも無い。それなのに斬れた。

そして、黒歌は確信した。この子を放っておけば大変な事になる。それに、仙術はとても危険な力だ。

世界の気を取り込み己の力に変換する。しかし、気とは決して良いものだけでは無い。

邪気に触れば元には決して戻らなくなる。この少年ならやりかねない。

「なら、一つ質問にや。偶に自然を強く感じる事はない？」

「自然を？・・・そういや、さつき背中に変なもんが出てきたな」

「変なもの？」

「ああ。これだ」

ゾロは後ろを振り向き服を脱いで黒歌に刺青を見せた。当然、黒歌は絶句する。なんせ、まだ子供だというのに背中一面に刺青が入っているのだ。

「な、なによ、それ！」

「よく分からん。今日、いつも通りに過ごしていたら突然出てきた」

「突然・・・？もしかして・・・。まあ、いいにや。とりあえず、私はあんたの家に今日から住むにや」

「はあ!?!何言ってるんだよ、お前!！」

「だって、君みたいな不思議な子は見たこと無いし、私はまだ君を信用していない。ま、監視って言ふ事で君の家に住むにや」

「ふざけんな！そもそも、家に部屋なんかねえよ！」

「それは大丈夫。君の部屋に住むから。猫の姿なら別にいいでしょ？」

「チツ・・・分かったよ。だが、仙術とかいうものの説明はしろよ」

「当然よ。ちゃんと、隅々まで教えてあげるにや」

こうして、ゾロの運命は動き出した。これは兵藤一誠がハーレム王を目指す物語では無い。

兵藤麤路が世界最強の大剣豪となる物語だ。

2話（知識）

「まったく・・・とんだ大目玉だったぜ・・・」

「にやははく。まあ、門限を破った君が悪いにや」

「うっせ。んで？仙術つてのはなんだ？」

「その説明をするにはもつと先まで喋らなきゃいけないにや」

黒歌が語ったのはこの世界の真実。神や天使、悪魔が本当に居て、普段表には出てこないが裏で暗躍しているということ。悪魔の眷属化。はぐれ悪魔の存在。様々だった。

「まったく・・・、面倒な事に巻き込まれちゃったな」

「ま、それは諦めるにや。さて、さっきの背中 of 刺青なんだけど、あれは多分、セイクリッド・ギア神器ね」

「セイクリッド・ギア神器？なんだそれ」

「セイクリッド・ギア神器 って言うのは、聖書の神が作り出したものにや。人間もしくは人間と異種族のハーフのみが宿せる超常の力。ま、言ってしまうば人間にしか使えない代物つてわけ」

「そんなのまであのか。・・・だが、俺にとっては都合がいい。そのセイクリッド・ギア神器を使えば、俺はもつと強くなれるんだろ？」

「え、ええ。まあ、そうにや。そんなに力を求めてどうするつもり？」「どうもしねえよ、俺の夢は世界最強の大剣豪だ。ま、まだまだ遠いけどな」

「ふうん・・・。ねえ、本物の刀は欲しい？」

「あ？・・・まあ、欲しいとは思いますがそう簡単には手に入らねえだろ」「そこはお姉さんに任せなさい。さて、じゃあ本題の仙術だけど・・・」

黒歌はゾロに仙術の説明を始める。どういう力でどんな使い道があるのか。どんなメリットとデメリットが存在するのか。

「中々便利な技術だな。お前も使えるのか？」

「ええ。妖怪の殆どは使えると思うにや。それでどう？もし良かったら教えるけど・・・」

「ああ、頼む」

「即答って・・・、まあいいにや。君には恩もあるし。さ、今日はとつ

とと寝るにや」

「ああ。まあ、明日も学校があるしな」

ゾロは電気を消してベッドに入る。しかし、そこに猫になった黒歌も入ってくる。

「・・・おい。なんで入ってくるんだ?」

「だつてええ。久しぶりのベッドなのよ? 厄介な連中に追われてるからホテルにも泊まれないし」

「つたく・・・勝手にしろ」

「そうさせて貰うにゃん♪」

次の日、学校から帰ると黒歌から三本の刀を貰った。どこから持ってきたか聞くも「秘密にゃ」と言われ、それ以上は何も言わずに有難く受け取った。

そして、この日以降ゾロの鍛錬は大きく変わった。元々、竹刀1本でトレーニングしていたが左手に1本、口に1本を咥え、鍛錬に励む。

黒歌に「何故三本なのか?」と聞かれ「多い方が格好いいから」と返すとバカを見るような目で見られたが特に気にする事は無かった。

そして、日課の基礎トレーニングに加えて仙術と神セイクリッド・ギア器の鍛錬、徒手空拳までも追加すると言う超ハードスケジュールと化していた。

そんな生活を三年続け、現在は中学二年生。黒歌とも多少は信頼関係を築きつつあったある日の朝食、両親からこんな事を聞かれる。

「ねえ、ゾロ。学校は楽しい?」

「いや、どっかのバカのせいで同じように見られてはいるがまあまあだな」

「そ、そう・・・」

「そんなに心配そうにするなよ、俺は大丈夫だ。んじゃ、行ってきます」

「ええ、行ってらっしゃい・・・」

ゾロ自身、分かっているつもりだった。両親の苦労が。イツセーが何かをやらかす度に両親が頭を下げている事も知っていた。その分だけイツセーを叱っても全く響かない。それがとてつもなく腹立たしかった。

ゾロは家でも学校でもイツセーと口を聞く事はほとんどない。理由は単純で喋りたくないのだ。イツセーの事を恨んでいた事もあったが、相手にするだけ無駄だと思い話すことを辞めた。

特に学校生活での変化も無く1年はあっという間に過ぎ去り二年の修学旅行前。いつもの様に基礎トレーニングをしていると、ふと気になった事をベッドで寝つ転がっている黒歌に聞く。

「そーいや、黒歌。お前、なんで追われてんだ？」

「んー、教えられないかになー」

「そーか、分かった」

「・・・ねえ。前々から気になってたんだけど、引き下がるの早くないかになー？もつとこーう、知りたいっていう意欲を前に出していいと思うのだけれど・・・」

「あ？そりゃあ気になるが、これで相手が傷付く様な内容なら悪いだろ。それに誰にだって話したくないことはあるだろうしな」

「・・・ゾロって本当に変わってるにや。まあ、いづれ話すにや」

「おう。つか、お前はベッドの上で菓子を食べるな」

「じゃあソファー買ってよく。そしたら辞めるにや♪」

「中学生になってお願いしてんだ、おめえは！買えるわけねえだろー！」

「えー、ケチいー」

「つたく・・・カスを落とすなよ」

「はーい」

「ああ、そーうだ。修学旅行のお土産は何がいい？」

「んー、食べ物ならなんでもいいにや」

「分かった。適当になんか買ってくる」

そして、修学旅行当日。他の班は男女複数名だったが、ゾロはとうとう1人だった。本人は全く気にしていないのだが教師たちは違う。

校長にゾロの単独行動を認めてもらい、どこかの班に無理矢理入らなくてもいいということになった。一応、ゾロはお礼を言うも教師からは「いつも頑張っている君にプレゼント」だと笑いながら言ってくれた。

イツセーはと言うと、公共の場だと言うのに連れ松田と元浜と大

声で猥談をしている。しかし今更気にするゾロでも無い。とりあえず、窓の外を見るのにも飽きた為、目を閉じ仙術の鍛錬を行う。

仙術を取り込めばあらゆる情報が手に取るようにわかる。その場の人数、地形の把握、他者の血流。その全てを把握しながら気を取り込む。己の限界まで。

駅に着いたのか皆が立ち上がった為、ゾロも目を開き荷物を持って電車を降りる。駅でイツセーと連れが「京都のお姉様方、待っててくださいいね〜!!」とバカ丸出しの事を叫んでいたが、関わるのも面倒な為無視。

教師引率の元、宿泊先のホテルへ行き、荷物を置いて教師たちからの注意を聞き終えて、遂に観光が始まる。

ゾロも荷物を置いてホテルの外へ出ると、どこをどう見ても見た事のある人物がいた。

「な、なんでお前がいるんだ!?!」

「にやはははは!ゾロのそんな顔が見られるなんて、私はラッキーだにや〜!」

「お前、朝別れたばつかだろ!?!」

「ま、ず〜と家に居ても暇だから遊びに来たにやん♪」

「つたく……。なら、とつとと行くぞ」

ゾロは黒歌の手を優しく握り一刻も早くここから離れる。イツセーの事だ、絶対に面倒になる。

ホテルから離れたところで黒歌と共に観光を始める。

まず黒歌と共に向かったのは清水寺だ。

「やつぱ、テレビで見ると実際に見るのとじゃ、全然違うな」

「めっちゃ分かるにや。なんか、こう言い表せないものがあるわね」

「んじゃ、中に入るか」

ゾロと黒歌が中を観光しようとした瞬間、またしても結界に包まれる。

「こいつは……」

「結界!?にやんで!?!」

「懐かしい奴がいると思ったら、まさか男連れになつてるとはね。黒

歌

声のした方を見ると、七つの尾を持った老猫が浮いていた。

「ね、猫が空を飛んでる!？」

「だから、疑問に持つのはそこじゃないでしょ!？んで？なんのよう
にや？ミケ婆さん」

「全く、その呼び方は相変わらずだね。なに、忠告さ」

「忠告?？」

「ああ。牛鬼って妖怪を知ってるかい?？」

「牛鬼？なんだそりや」

「確か海岸に主に現れる獰猛な妖怪にや。それが何?？」

「その牛鬼が逃げ出しちまってね。しかも突然変異と来た。強者ばかり
狙っていて今のところ表はなんともないんだが、裏はかなりピリつ
いてんのさ」

「そんなんが居るのか・・・」

「んで、黒歌?？その子供は?？見たところ、人間のようだけど」

「兵藤麤路^ソ。ま、異常な人間にやん」

「誰が異常だ!誰が!」

「ゾロ、あの人は参曲様。私達猫又の長老みたいなもんにやん」

「なんだ、そうだったのか。兵藤麤路^ソだ」

「礼儀はなつてないがまあいい。気をつけるんだよ」

そうやって参曲が消えると同時に結界も消えた。

「ま、私達には関係ないだろうから気にせず行くにやん」

「だな」

こうして2人は、盛大なフラグを立てて観光を再開した。

3話（殺し合い）

黒歌との観光を終えて二人でホテルへ戻る。なんでも、黒歌も同じホテルにチェックインしているらしい。それも同じ部屋に。

ゾロはなにか言おうと思ったが無駄だと思ひ諦めた。それよりも、今は面倒な奴をどうにかしなければならぬ。当然、イツセー達だ。

そして、やはりと言うべきが見つかった瞬間、3人がゾロへ詰め寄ってきた。

「おい、イツセーの弟！その着物美女は一体誰だ!？」

「上から98・57・86!!こ、こんな脅威的な数値は見た事がないぞ!!」

「おい、ゾロ!どういう事だ!なんで俺たちはダメだったのにお前は捕まえられてるんだよ!だけど、まあいい!後は俺たちに任せてお前は行け!」

「アホらしい。行くぞ。」

ゾロと黒歌は3人に軽蔑の目を向けながら去ろうとする。しかし、イツセーはその視線にイラつきを隠さず、突然ゾロを殴り飛ばす。これには、黒歌どころか周りの教師や生徒も騒然とした。

「ふざけんな!お前は俺の弟なんだ!弟なら兄貴に譲れっつてんだよ!」

イツセーが更に殴り掛かろうとするのを他の教師やホテルの従業員が取り押さえ、黒歌はすぐさまゾロの方へ行く。

「ちよ、大丈夫!？」

「・・・ああ。問題ねえよ」

「君!だ、大丈夫かい!？」

「ええ、すみません。騒がしくして」

「い、いや、それはいいが・・・。とりあえず、傷を先生方に見てもらいなさい」

「この程度なら慣れてますから。行くぞ、黒歌」

ゾロは立ち上がり、従業員に一言謝罪を述べ黒歌と共に部屋へ行く。

ゾロはイツセーの事が嫌いだ。双子で自分が数分早く産まれたというだけで威張り散らし、気に入らない事があれば全てに突つかつてくる。そして、自分が世界の中心だと思っっているような態度も気に入らない。

「ちよつと、本当に大丈夫・・・？」

「ああ。いつもの事だろ」

黒歌も内心ブチ切れ寸前だった。伝えていないとは言えゾロの部屋に住み着いて数年、嫌でもイツセーの態度は見えてくる。それに、さつきの目も気に入らない。

そして不運とは重なるもの。部屋に向かっていている途中、またしても結界に包まれる。二人は驚きをなんとか振り払いすぐに構える。

ゾロは黒歌に一番最初に教えて貰った蔵タラウクの梵字を描き三本の刀を取りだして刀身を抜こうとした瞬間、黒歌の襟元を掴み後ろへ下からせ、左手で刀を抜いて攻撃を止める。

黒歌は驚きしか無かった。自身では仙術の扱いは上の方に入る部類だと思っていたが、今の攻撃は全く感知できずにいたのだ。

『ほう。まさか、人間のガキに止められるとはなあ!!』

『おいてめえ、不意打ちなんて味な真似をするじゃねえか!!』

ゾロはもう一本の刀を抜き放つも相手には余裕を持って回避される。敵の姿は鬼の様な顔に牛の体、剣の様に鋭い手足に尾を持った化け物だった。しかし、黒歌には見覚えがあった。

「ま、まさか、牛鬼!? な、なんで!」

『なんだ、俺の事を知ってんのか。なら、死ねやあ!!』

「チイっ!」

黒歌を狙おうとする牛鬼の攻撃を勘を頼りに防ぐ。しかし、その攻撃はとてつもなく重かった。

「黒歌!! こいつは俺がやる!! お前はさつきの猫ババアを呼んでこい!!」

「で、でも!」

「とつとと行かねえか!!」

「っ! もう、分かったわよ! 絶対に死ぬんじやないわよ!」

黒歌は結界の一部を破壊して黒歌は外へと出る。ゾロはそれを見届けてから牛鬼を力づくで弾き返し、三本目の刀を口に咥える。

『おいおい、死にたがりか?』

「んなわけねえだろ。てめえを倒すには邪魔だったんでな」

『グハツハツハ！人間のガキが俺を倒すか！いいぜ、やってみるよ!!』
二人は互いに笑い、そこからは殺し合いに入る。最初こそ隙を見つけようと果敢に攻めていたものの、いつの間にか防戦一方となっていた。そして、逆に一瞬の隙を突かれて左目に攻撃を受ける。

「ガアッ！」

『そこだ!!』

ガキイイイン!!

刃物と刃物のぶつかる音が鳴り響く。片目を閉じながらもゾロはなんとか勝つ方法を模索していた。牛鬼が飛び上がり、刃物の様に鋭い四本の足で斬りかかろうとするのをゾロは見逃しはしない。

「三刀流！」

またしても鳴り響く金属音。しかし先程とは違い受け止めるのは無く全てを受け流す。牛鬼の連撃が一瞬止まり、後ろにすぐさま退避する。

「刀狼流し」

『グフツ！やるなあ、ガキイ!!』

牛鬼が着地した瞬間に現れる全身の傷。人型なら更に深く行けただろうが、牛鬼の硬さが原因で小さな切り傷程度にしかならない。

「三刀流！龍巻き！」

ゾロが三本の刀を同時に振るった瞬間、斬撃で出来た竜巻が牛鬼に向かうも、温いと言わんばかりに竜巻を真つ二つに斬られる。それを見越していたゾロは竜巻が斬られた瞬間、刀を持った両の腕を交差させて突っ込む。

「鬼斬り!!」

『甘いんだよ!!』

ゾロの刀は見切られ2本の手足で止められたかと思えば、そのまま鋭い尾で胸を深く斬られる。

「ゴハッ！」

『へへ、ガキ。認めるぜ。お前は強い。だが、俺にやあ勝てねえよ』
「ふぎ……けんな……!!」

ゾロの傷は決して浅くは無い。否、それどころか常人が受ければ即死するであろう深すぎる傷。それでも、ゾロは執念のみで生きていた。まだ死ねない。死ぬ訳には行かない。

ゾロは上着を脱ぎ捨て再び刺青を出す。刺青は禍々しく輝きゾロの体は軽くなる。しかし、それでも次の攻撃を放てば自分が倒れる事は百も承知。

「おい!!この一刀で決着を着けてやる!!」

ゾロは左手に持つ刀を逆さにして持ち、右手の刀と組むように構えて回し始める。

『ほう、決死の覚悟か。いいじゃねえか！俺は嫌いじゃねえよ！』

「九山八海斬れぬもの無し！三刀流奥義!!」

『お前の決死の覚悟を受けてやろうじゃねえか！死ねえ!!』

同時に走り出す。どちらもこの一刀に掛ける。

三千世界!!

二人は背中を向け、先程までいた場所を入れ替えるように立つ。そして、ゾロの刀は三本共刀身が完全に砕かれ膝を着く。胸に付けられた斜めの傷からは大量の血が飛び散る。

ゾロは負けたのだ。剣士としての完全敗北。しかし、勝負には勝った。

ゾロの目の前に頭が落ちてくる。当然、牛鬼の頭だ。

『よお、ガキ。良い一撃だったぜ。お前さん、名前は？』

「兵……藤……麤路だ……!!」

『そうかい、名前は覚えたぜ。また、数百年後にでも遊ぼうや』

そう言つて牛鬼の頭は塵と化した。それを見てゾロも床にひれ伏す。

「クソツ……。せっかく……。貰ったやつだった……。んだ……。が……。な……」

ゾロは折れた刀を掴みそのまま気を失った。胸の傷から止めどな

く流れる血で池を作って。

4話

「いっ!!」

ゾロは痛みで突然目を覚ます。辺りを見回すも見た事のない場所。しかし、隣には黒歌が薄手の白装束を着て眠っていた為、危険が無いと判断する。左目付近には違和感があり、触れると何度も巻いたことのある包帯の感触があった。胸の方にも同様に巻かれ血で赤く滲んでいた。

「ここはどこだ・・・？俺は確か・・・」

「なんだ、目が覚めたのかい」

声のする方へ首だけ向けると午前に会った参曲と着物を気崩し、金色の耳と九つの尾を持つ美女、その後ろには同じように金色の耳を持った少女がいた。

「あんたは確か・・・空に浮いてた猫ババア・・・」

「ふんっ！」

「ぬおおおお！」

ゾロは速攻で傷を殴られる。それによって傷が開き、痛みにもがき苦しむ、隣の黒歌と激突する。

「いったくくく！なにするにや!!」

黒歌にも同じように傷を叩かれ、痛みのみならず、あまり気を失ってしまう。ゾロは数時間後に目を覚まし、その時には再び包帯は交換されていた。

「・・・で、あんたは？」

「申し遅れました。私はこの京都を束ねております、八坂と申します。この度はご迷惑をおかけしてしまい、大変申し訳ございませんでした」

八坂が初めに頭を下げ、共に後ろに居た少女も慌てて頭を下げる。

「ま、元々巻き込んだのはそっちだからね」

「よく言うよ。泣きながら私の所に来たのはどこの誰だったかねえ？」

「ふふ、構いませぬ。彼女が言っているのも事実、礼儀は求めませぬ」

「全く・・・あんたはいつまでも甘ちゃんだねえ、八坂。まあ、今回は人間であるあんたに迷惑を掛けたのも事実。という訳で関東うちと八坂から報奨を出そうと思ってる。何か欲しいものはあるかい？」

「欲しいもの・・・そうだな、刀が欲しい。三本だ」

「さ、三本も何に使うのじゃ・・・？」

「あ？そりゃあ、全部使うんだよ。俺は三刀流だからな」

「わかりました。後から武器庫へ案内しましょう。好きなものをお選び下され。しかし、報奨と実績が合わぬ・・・」

「なら、関東うちからの報奨だが、私が直々にその黒猫と鍛えてやる」

「うえ!?わ、私も!」

「なんだ、黒歌はアイツに負けっぱなしでもいいって言うのかい？」

「・・・上等にや。あんなやつ、すぐにぶっ潰せるだけの強さを手に入れてやるにや」

話が一区切りした所で、ゾロは体にムチを打って立ち上がる。またしても傷が開くがそれもお構い無しに。

「ど、どこに行く気じゃ!」

「武器庫だ」

「まだ寝てな。あんたの体には邪気が入りすぎて、自然治癒でしか治せないんだからね」

「チツ・・・なら、飯が食いたい」

「ふふ、準備させましょう。九重、黒歌殿と彼が動かないように見張りを」

「は、はい！母上!」

その言葉を最後に八坂と参曲は部屋を退室する。ゾロは諦めて横になり、九重はと言うとどうすればいいか分からずソワソワしている。

「の、のう!な、何故お主は仙術が使えるのじゃ!」

「俺の場合は神セイクリッド・ギア器とか言うやつのおかげらしい・・・。つか、修学旅行ってどうなったんだ？」

「それなら心配ないにや、ゾロは私を犯罪者から身を呈して守ったって事になってるにや。ちなみに、襲われた日から二日は経ってるわよ

？」

「・・・道理で腹が減るわけだ。んじや、飯が来たら起こしてくれ」

ゾロは目を閉じそのまま眠りにつく。九重は興味津々といった感じですつとゾロの事を見ていた。

「気になるかにや？」

「っ！う、うむ・・・。あ、あまり、人間を見た事がなくて・・・」

「にやはは！まあ、ゾロは人間の中でも変な部類に入るから、人間全員がこうだと思っちゃダメよ？」

「う、うむ！」

そこから、ゾロを挟み黒歌と九重の二人で話が弾む。数時間ほど話した頃に従者の妖怪が現れ支度が出来たと報告に来る。黒歌はゾロを起こし、従者先導の元3人で食事場へ向かう。

そして、食事が始まるも黒歌だけでなく九重と従者達も顔を引き攣らせる事をしでかした。

「重症人かつ寝起きだと言うのに、一時間で十人前を平らげたのだ。」

「ゾ、ゾロ・・・？い、いくらなんでも食いすぎじゃ・・・？」

「まあ、腹が減ってるからな」

「ふふふ、お食事はいかがですか？」

全員がゾロの食欲に引いている中、八坂が微笑みながら入ってくる。

「ああ、美味しいな。箸がどんどん進む」

「それはそれは。御家族の方にも連絡はしておいたので、怪我の回復に専念なさってください」

「悪いな。飯まで奢ってもらったつてのに」

「構いませぬ。一週間もあれば邪気は抜けるでしょう。それまでは絶対安静です」

「・・・ああ」

ゾロが再び食事を取ろうとすると、障子の方から妖怪がボロボロで吹き飛んでくる。

「な、なんじや!？」

ゾロと黒歌以外が九重と八坂を守るように陣を組む。倒れた襖の

奥からは数十人程の妖怪が入ってくる。

「八・・・坂様・・・！お・・・逃げを・・・！！」

「お初にお目にかかります、八坂殿。本日は我々『爆輪号』が京都を頂きにまいりました」

「爆輪号・・・。なるほど、表でいう半グレか。ここに襲撃するなど、死にに來たようなものだぞ？」

「それはありません。いくらあなたが強かろうと本気は出せまい」

「・・・こんな食ってるのに飽きないってすげえな」

「鮭は貰ったにゃん！」

「あ！おい、黒歌、てめえ！そいつは俺のだ！！」

緊迫した状況の中、ゾロと黒歌は我関せずといった感じでご飯を奪い合う。先程まで、ゾロの食欲に引いていたにも関わらずだ。

「おいおい、俺らを舐めてんのか!? ああ!!」

一人の半グレが黒歌を掴もうとした瞬間、ゾロが半グレの頭を思いつきり畳に叩きつけ、畳はと言うと完全に陥没し半グレも動かなくなる。

「確か、八坂さんと言ったな」

「ええ」

「居間で飯を作らせてろ」

「あなた方二人で我々を相手すると？」

「あんたら程度なら余裕にゃん。ねえ、ゾロ？」

「ああ。食後の運動になるかも怪しいぜ」

ゾロが着物の上を取り、般若を出現させる。それに、九重や従者達も言葉を失う。

「今帰るなら見逃してやるよ。だが、向かってくるってんなら・・・死にたい奴だけ来いよ」

「ぶち殺せえ!!」

数十人の妖怪がその号令と共に向かってくる。ゾロは刀が手元に無い為に徒手空拳でやり合う。

黒歌はと言うと、毒霧等が使えないということもありこちらも徒手空拳だ。どちらも戦力半減かと思われたがそんな事は一切ない。

ゾロは相手に容赦なく相手に蹴りを入れたり、刃物を奪い取って急所を突き、タイミング良く相手の得物を弾いて殴りつけると言った戦い方を見せる。

逆に黒歌の方は体の柔軟さを活かし、相手の刃物を蹴りあげると、仙術で体内の気を乱し、降ってきた刃物を蹴って相手に刺すというトリッキーな戦い方を見せた。

二人の強さにより、一人を除きこと切れている。ゾロは残った一人の顔を力いっぱいに掴み壁に思いつき叩きつける。

「ガハッ！」

「おい、他の奴らは何処にいる？」

「だ、誰が・・・！」

「なら、これならどうかにや？」

黒歌が妖術で半グレの指を炙ると途端に口が軽くなる。半グレは2つの集団に分かれて居るらしい。場所も教えて貰った所で、ゾロの肘打ちで気絶する。

「おし、それじゃあ行くか」

「どうせ行くなって言っても行くんならもう止めないにや」

ゾロはそこら辺に落ちていた花のワンポイントが入ったドスを持ち、啞然としている八坂達を置いて黒歌と共に出ていってしまう。

八坂達は正気を取り戻し、二人を追い掛けるよう指示を出すも見つからず、数時間後に大量の半グレ妖怪達が死にかけているのが二箇所発見される。

この事件を切っ掛けに、裏京都では二匹の狂犬がいると噂される事となった。

5話

「黒歌殿、ゾロ殿。再び礼を言わせて下さい。ありがとうございます。ございました」

半グレ討伐から翌日、二人は八坂に再び頭を下げられていた。

「別にいいにや。私もスツキリ出来たし」

「俺も構いやしねえよ」

「いえいえ、そんな事はございません。確かに私が出れば潰すのにはそう時間は掛からなかったでしょうが、犠牲者は出ておりました」

八坂はれっきとした九尾の狐。その本気は、姿を見せて暴れる事にある為、犠牲者が数百人は出たはずだ。参曲も運悪く、牛鬼の最後の後処理が残っていた為、館にはいなかった。

「報奨ですが、ゾロ殿、黒歌殿。私や九重の護衛隊をしませんか？」

「護衛隊……？」

「ええ。私が会談等の際にボディガードとして追隨するのです。それに、調べたところによれば黒歌殿はぐれ悪魔だとか」

「っ！」

「なんだ、お前もはぐれ悪魔だったのか」

「お、怒らないの……？」

「なんで怒るんだよ、言っただろう？誰にだって話したくないこと位はあるって。別に責めねえよ」

「ゾロ殿は知らなかったのか……、大変申し訳ない。しかし、本題はここから。確かにはぐれ悪魔は全勢力間で通達を出されていますが、進んで討伐しているかと言えはそうではありません。大抵は保護や勧誘と言ったものばかりです。討伐するのは理性を失った者のみ」

「……なるほどな。今までより自由は効くって訳だ。悪魔達にイチャモンを付けられてもそれはそれ、これはこれってか？」

「ええ。どうですか？黒歌殿」

「……あんただけなら構わないにや。九重の護衛までってなったらプライベートが無くなるし。でも、偶になら」

「ふふ。承知しました。各勢力へは通達しておきましょう。ゾロ殿は

いかがですか？」

「俺も黒歌と同じで頼む」

「ではそのように。それと、お二人には依頼という形で、危険度の高い妖怪の討伐等の仕事をお任せしたい。当然、依頼と言う事で報酬も用意させていただきます。どうですか？」

「まあ、金が出るってんなら」

「私も同意見よ」

「あい分かりました。それとゾロ殿に関してですが、先の牛鬼討伐の報奨で刀三本のみというのはあまりに少なく報奨とは言えません。そこで、昨夜の報奨と合わせて、剣の師匠、家の譲渡としました」

「い、家!?! ズ、ゾロの!?!」

「ええ。ゾロ殿はなんでも兄弟仲が悪いとか。しかしすぐという訳には行きませぬ。故に、高校進学と共に。という形になります」

「・・・それは願ってもねえ事だがいいのか？」

「ええ。これでも足りないと思うくらいです」

「まあ、貰えるってんなら貰うが」

「ふふ。では、色々と準備は進めておきましょう」

真面目な話も終わり、先程まであった少しピリついた空気も緩和される。

「ゾロ殿。報奨の刀ですが、今お選びになりますか？」

「ああ。出来るならな」

「では、ご案内しましょう。黒歌殿はどうされますか？」

「私はここでのんびりしとくにゃん」

「分かりました。ゾロ殿、こちらへ」

八坂は部屋を出て武器庫へ案内する。ゾロはと言うと、どんな刀があるか胸を躍らせていた。

そして、遂に嚴重に施された部屋の前で八坂は立ち止まる。封印を解除して自動で襖が開くと、刀や剣、槍等と言ったあらゆる武器がところ狭しと並んでいた。

「こちらが武器庫になります。好きなものをお選び下され」

「ああ。助かる」

「従者の者を外で待機させますので、終わったら声をお掛けください」
「ああ」

ゾロは早速、刀の方を物色し始める。しかし、刀だけでも数千本。ゾロ自身、時間が掛かると思ってはいたが、1時間が経過してもあまり良いと言える刀は無かった。

しかし、ゾロはある違和感に気付く。あまりにも普通の物過ぎるのだ。妖怪勢力と言うのなら妖刀の1本があってもおかしくは無い。

ということ、ゾロは仙術を纏い探索を始める。すると、下の方から微かに強い気配を感じる。それも複数。ゾロがすぐさま畳を外すと、隠し扉が現れる。

ゾロは隠し扉を開けて下へ進むと、三本の刀が丁寧に飾られている。しかし、ここからでも分かるほどに他の刀とは一線を画すオーラ。

三本の刀を取って上へと戻り、従者の案内の元八坂の所まで戻る。

「良い刀はあり・・・それは・・・」

「ああ。こいつらにする」

「いや、あの、ゾロ・・・?それって・・・」

「ああ、妖刀だな」

「このバカ!」

ゾロが分かってて妖刀を選び取ったという事実には黒歌は思わず頭を引つ叩く。

「いってえ!なにすんだ!」

「あんたこそ何考えてるにや!?!なんで妖刀って分かっててそれを持つてくるのよ!しかも三本!」

「別に妖刀がダメって言われてねえだろうが!!」

確かにゾロが言ったように妖刀を取るなどは言われていない。しかし、進んで妖刀を・・・それも三本全て妖刀なのは如何なものなのか。

「・・・ゾロ殿。本当によろしいのですか?それらは全てがいわく付きですが・・・」

「ああ、こいつらがいい。試し斬りをしたいんだが」

「分かりました。しかしその前に刀の説明を。そちらの朱色の鞘の刀は三代鬼徹。斬れ味はとて素晴らしいものですが、持ち主を次々と非業の死に導いた妖刀です。」

次に、そちらの赤い鞘の刀は村雨。こちらにも優れた斬れ味を持っておりませんが鬼徹と違うのはほんの小さなかすり傷でも死に至らせる呪毒です。使い続ければ持ち主をも呪い殺す妖刀。

そして、最後にそちらの紫の鞘の刀がエンマです」

「エンマ・・・？それって、仏教の閻魔大王と同じ名前にやん」

「ええ。元々、そのエンマは閻魔大王の系譜の者達が使っていたものです。斬れ味も最高級であり、地獄の底まで斬り捨てるとも言われております。しかし、どの刀よりも真面目故、持ち主の仙術や生命力を無理矢理引き出すのです」

「せ、生命力!?ゾロ!今すぐ返してくるにや!」

「あ?なんでだよ」

「いや、今の話聞いてなかったの!」

「聞いてたさ。あれだろ?地獄の底まで斬り捨てるんだろ?」

「なんで大事な所を聞かないのよ!!」

黒歌に首を締められながら前後に揺すられるも返す気の無いゾロ。八坂はそんなゾロを見て諦めたかのようにため息を着く。

「もし、死んだからと言って我々は責任を取れませぬ。本当によろしいのですか?」

「ああ。俺が死んだらそこまでって事だ」

「・・・分かりました。修練場へご案内しましょう」

八坂は立ち上がり、ゾロと黒歌を案内する。黒歌はゾロが妖刀を持っているからなのか一歩引いた場所を歩き、当の本人は特に何かを気にする訳でもなくてただ八坂について行く。

やがて、襖を開けるとそこは森の広がる空間だった。

「なんで家の中が森なんだ?」

「違うにや・・・!これ、相当レベルの高い幻術にや!」

「黒歌殿の言う通りです。好きに背景を変えられます。ゾロ殿。刀で木を一本ずつ斬ってみて下され」

「ああ」

ゾロは最初に三代鬼徹を抜く。いつもの様に仙術を纏わせ斬ると驚愕した。今までとは全く違うのだ。幻術とは言え、実態のある木を豆腐の様な手応えで斬ってしまった。

「なんて斬れ味だ・・・!!とんだジャジャ馬だな、こいつは・・・!!」
「それが鬼徹です」

「んじゃあ、次は村雨だな・・・」

ゾロが刀を抜くと、村雨の刀身に禍々しい文字が現れる。ゾロはもう一度木を斬り落とす。斬れ味は鬼徹と同等。しかし、問題はここからだった。木に呪詛が現れたと思ったら、数十秒もしない内に枯れ果てる。

「にやにや!?ど、どういう事にや!?!」

「これが村雨の持つ毒です。ほんの小さなかすり傷でも死に至らせる呪毒。私も初めて見ましたがこれほどとは・・・」

「・・・最後はお前だな。エンマ」

ゾロが刀を抜き刀身を見ようとした瞬間、異変は起こる。ゾロはまだ仙術を纏わせていない。それなのに、エンマは仙術を纏ったのだ。無理矢理引き出して。

「ぐ、ぐうう・・・!!」

「な、なんて邪気・・・!!ち、ちよつと、ゾロ!もつと抑えるにや!!」

「いけない!ゾロ殿!!今すぐ刀をお離しくだされ!!」

「ぐうう・・・!!うおおおお!!」

ゾロは木ではなく、空へ向かって斬撃を放つ。斬撃は八坂自身が作った結界をいとも容易く斬りさき、天井をも斬ってどこかへ行ってしまう。

「にや!?!ゾ、ゾロ!?!」

「そ、その腕は・・・!!」

二人がゾロの腕を見て驚愕する。ゾロの筋肉は普通の中学生と違って異常だ。それなのに、筋肉が消え骨と皮だけになっているのだ。エンマも未だにゾロの仙術を勝手に引き出している。

「このツ・・・!!返せ!!!」

ゾロが腕に意志を込めると、勝手に引き出された仙術はゾロの中に戻り、腕の筋肉も戻っていく。しかし、ゾロはと言うと肩で息をしている様子だった。

「ゾ、ゾロ！べ、別の刀にするにや！ま、まだゾロにその刀は早いしー」
「私もそう思います。こちらで戻しておきましょう。さあ」
「・・・いや。こいつらを貰う・・・！」

ゾロの意外過ぎる回答に二人の思考が一瞬止まる。ゾロはと言うと、エンマの刃を見ながらニヤリと笑う。

「鬼徹に村雨、エンマか・・・、こいつらを使いこなせば俺はもつと強くなれる・・・!!」

それから二人は、ゾロの傷の回復に専念させるため、刀を取り上げ無理矢理眠らせる。

その間に黒歌は八坂と諸々の契約を結び、起きたゾロと共に九重の相手をした。

最初こそゾロを警戒していたものの、遊ぶ内に心を開いていき帰る頃には寂しそうにしていた。また来るとい言葉聞き、子供らしい明るい笑顔を見せた。

ゾロは家に帰るなり両親に抱き着かれ思いつき泣かれてしまった。原因は分かっている為、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

イツセーはと言うと、あの後教師に大激怒された拳句、三人組と強制的に帰宅させられたらしい。

イツセーはそれをゾロのせいにしてブチギレていたが、ゾロはそれを無視して部屋で休む。

そして次の日に学校へ行くと教師達にも心配され、今まで話し掛けられることの無かったクラスメイトからも心配された。ゾロにとつては牛鬼という強者から受け取った傷プレゼントだったが、それをそのまま話す訳にもいかず適当にはぐらかす。

学校が終わった放課後、黒歌と共に仙術の鍛錬が始まるが修行は全て厳しいものだった。特にゾロの場合は完全に制御している訳ではないのでそこからの修行だったが、ここで黒歌どころか参曲でも予想外の出来事が起こった。あまりにも、仙術の適正が高すぎるのだ。

仙術とは本来、数十年〜数百年掛けて完全に習得出来るものなのにも関わらず、ゾロはたったの数日でステツプ1を難なくクリアしてしまったのだ。それどころか、無意識にやっていた仙術を纏わせるという技術はほんのひと握りしか出来ない技術でもある。

「これは驚いたねえ・・・、こんな人材、今まで見た事も聞いた事も無いよ・・・」

「そんな事を言われてもなあ・・・。あ、そうだ、師匠。この背中の刺青なんだが、どんな能力か知らねえか？」

ゾロが背中の刺青を見せた瞬間、参曲は納得が行く。何故、こんなにも上達が早かったのか。

「全ては分からないけど、あんたが仙術をマスター出来たのはこいつのおかげだね。あんたはこの神器を介して仙術を扱えるって訳だ」

「そ、そんな力があつたの!?!なら、誰でも仙術を使えるんじゃない？」

「そこまで都合良く行かないのがこの世の常だよ。こいつが取り入れているのは正の気ではなく邪の気がほとんどさ。たんなる一般人なら廃人になつてもおかしくは無いね。この子がそうならないのは異常なまでの覚悟と目標があるからだろう。さて、カラクリも分かつた所であんたの修行を変更しようかねえ」

それからゾロの修行内容は、神器無しでの仙術取り込みとなった。しかし、それは簡単では無かつた。世界の気を感じる事は出来る。だが、取り込むのは時間が掛かつた。

仙術、剣術の修行、八坂からの依頼、学校という超忙しさの中でもゾロは無事に中学を卒業し、家から近いという理由で魔の巣窟『駒王学園』へと入学する。そこにイツセー達三馬鹿がいるのは予想外もない所だったが。

修学旅行での約束通り、学校から近いかつギリギリ隣町の土地に家を建てたという連絡があり、黒歌とすぐさま引越しを決意。

両親にも話すと簡単に了承してくれたが、月に一度は顔を出すようにと条件を付けられた。ゾロもその程度ならと了承し入学式が終わったその日に引越す。家具等は後から買え揃える予定の為、家中はガラガラだった。

家はかなり広く二階にも部屋があるが、一番は地下に広大なトレーニングルームがあると言うこと。それも、色々と場所を変更出来る。二人はそこまで深く鍛錬はせず、ゾロはそのまま、黒歌は猫になつていつもの様に眠りにつく。

入学式から二日目、物語の歯車が動き出す事も知らずに。

6話

引越してから次の日、一通りの授業を終えて帰宅準備をしていた時。廊下の方からドタバタと走る音と悲鳴に似た男の声と女性の怒声が聞こえてくる。

全生徒が廊下へ目を向けると、イツセーと松田、元浜が女生徒に鬼の形相で追い掛けられていた。ゾロは自業自得と言わんばかりに特に気にすること無く教室を後にする。

しかし、その数分後。ゾロは絶体絶命のピンチに陥る。

「……ここ、どこだ？」

ゾロは完全に迷ってしまったのだ。ゾロは玄関を目ざしたはずなのに、先程とそこまで変わらない場所。完全に迷子である。

「……あの、すみません」

「あ？」

ゾロは後ろから声を掛けられ振り向くと、小柄な白髪の少女がいた。しかし、ゾロは直感で分かった。黒歌との関連のある少女だと。

「……高等部の方ですよね？なんで中等部にいるんですか？」

「ここ、中等部なのか？俺は玄関を目指していたんだがな……」

「……玄関なら反対です」

「そうなのか。悪いな、助かった」

「待って下さい。聞きたいことがあります」

「なんだ？」

「あなた、黒歌という女性を知っていますよね？」

「……シラネエ」

「……もう少し嘘だと言うことを隠したらどうです？」

一瞬で見破られる。それもそのはず、ゾロの目は泳ぎまくっているのだ。嘘をつけています。と顔に書いていようなものだ。

ゾロも諦める。どれだけ隠そうといつかはバレるのだ。そもそも話、黒歌が何故追われているのかもしれない。

「……まあ、知ってるしどこにいるかも分かるな」

「っ！会わせて下さいー！」

「断る。あいつは追われてるらしいからな、お前と会わせて居場所がバレれば終わりだ。じゃあな」

ゾロは家に帰る為に教えてもらった道を行こうとするが、突如として少女からの拳が飛んで来るも余裕で躲す。

「なんのつもりだ？」

「あなたが教えないと言うなら無理矢理吐かせます。私は知らなくちやいけないので」

「・・・そういう事なら相手してやる。来い」

ゾロは鞆を投げ置き、右手に軽く拳を作り左腕を垂らす様に構える。男からは一切の隙を感じない。なによりも先程よりも空気が重すぎるのだ。

「・・・この人、本当に人間？この威圧は何・・・？」

少女は恐怖を感じながらも構える。一瞬の静寂。先に仕掛けたのは少女だった。素直なストレート。普通の人間なら避けられ無いはずのパンチをゾロは軽々と避け、少女の顎に寸止めのパンチをカウンターとして返す。

「っ！」

「俺の勝ちだな」

「ま、まだです！」

少女はすぐさま後ろに下がりましたがまたしても攻撃を繰り返す。しかしいくらやっても結果は同じ。蹴りを入れようとも、フェイントを入れた攻撃をしようとも、全て顎の方に寸止めされる。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・ハア・・・！」

「まだやんのか？俺は帰りたいんだが・・・」

「なら、教えて下さい・・・!!」

「だから言ったら。教えられないって」

ゾロは少女の目を見るも諦める様子が全くない。早く帰りたいゾロは頭をかきながら諦める。

「まったく・・・なら、こうだ。今から俺は黒歌の場所に連れていく。ただし、誰にも言うな」

「い、言ったらどうなるんです・・・？」

「そんなときは……てめえを斬る。」

少女は心臓を鷲掴みされる感覚に襲われる。ゾロの片方の目が据わっている。本気で斬るつもりなのが全身で伝わる。

「わ、分かり……ました……」

「なら、とつとと行くぞ」

ゾロは鞆を拾い上げ歩く。少女もついて行きたかった。しかし、そう出来ない理由もある。それは……

「……あの、先輩。そっちじゃなくてこっちです」

「……」

一波乱ありながらも物語は進んでいく。

7話

少女との戦闘を終えようやく帰宅出来たゾロ。しかし、黒歌に伝えるという重大な事を忘れていた為、少女を見た瞬間驚きで大声を出してしまう。

「な、ななななんで・・・!!」

「黒歌に会わせろってしつこくてな。お前の知り合いだろ？」

「え、ええ、まあ・・・。で、でも！」

「黒歌・・・姉様・・・!!」

少女は涙を流し黒歌に抱きつく。黒歌はと言えどどうすればいいか分からず混乱し、ゾロは「姉妹だったのか」という感想を思う。

少女が落ち着いたのを見てとりあえず部屋に案内する。本来ならリビングの方がいいのだろうが、椅子すら無いため、それならと部屋にした。

黒歌と少女はゾロのベットに座り、ゾロは唯一の椅子と言える学習椅子に座る。

「その・・・先程はすみませんでした。私、白音と言います」

「兵藤麤路だ」

「兵藤・・・それって今日、女子更衣室を覗いたという・・・」

「それは兄貴だ。んで？なんでお前は黙ってるんだ？黒歌」

黒歌は俯きながら気まずそうに座っている。理由が理由なのだが、それを知らないゾロは当然疑問を浮かべる。

「姉様、教えて下さい。どうして元の主を殺したんですか？」

「元の主？」

「・・・ゾロ先輩にも言ってないんですか？」

「・・・ゾロには何も話してないわ。分かった、全て話すにや」

黒歌から聞いたのは壮絶な過去だった。父親は貴族悪魔分家の研究者だったらしく二人には興味を持たない。母親もそんな父に執着していたらしい。

ある時、実験が失敗して両親は呆気なく死亡。黒歌は妹を守るために、一人の上級悪魔と「妹には手を出さない」という誓約の元、眷属

入りしたにも関わらず、妹を無理矢理眷属にしようとした為にやむなく殺害。

妹を連れて行くこうにも幼すぎるため、捕まる可能性が高くなる。故に、情愛が深いとされるグレモリーへ妹を預け、自身は三大勢力に追いかけて回される日々。

全てを話し終えた黒歌は少し震えていた。嫌われるかもしれない。暴言を吐かれるかもしれない。あらゆる恐怖が黒歌を襲う。

そんな心中を知らないゾロはと言うと、座っていた椅子から立ち上がり黒歌の頭を軽く撫でる。

「辛いのによく話してくれたな。黒歌」

「ふえ．．．？お、怒らないの．．．？」

「なんで俺が怒るんだよ。そもそも、怒る要素が無かつたらうが。白音って言ったな。こいつの事、頼んでいいか？」

「はい」

ゾロは黒歌の頭を撫でるのを止め部屋を出ていく。その時、黒歌が小さく「ありがとう」と言ったのを聞き逃さなかった。

部屋を出たゾロは地下のトレーディングルームへ向かう。異空間に仕舞ってある妖刀達を取り出し、手入れを始める。

ゾロは刀の手入れを毎日欠かさずに行っている。理由は最高の状態で戦う為であるが、一番の目的は刀との『対話』だ。

刀を知り、その刀の特性を最大限に活かしてこそその剣士。ゾロはそう信じきっていた。

刀と持ち主に上下関係など存在しない。平等なのだ。ゾロが常に心掛けているのはそこだ。自分が刀を使うのでは無い、刀に使われるのでは無い、刀と心を通わせ共に使う。

「つたく．．．相変わらずお前らは綺麗だな」

ゾロはそう呟き、無言で丁寧に入手れを行う。手入れの順番はローテーションで行っている。でない、意思を持つ村雨とエンマが文句を言うかのようにオーラを跳ね上げるからだ。

今日の順番は三代鬼徹、村雨、エンマ。一時間、二時間、三時間と経過してようやく三本の手入れを終える。

「ふう・・・、黒歌と白音は放っておくとして、鍛錬しようにも道具が無いからな・・・」

部屋に戻ろうにもする事がない。そもそも、あの二人の邪魔をしたくない。ならと、ゾロはそのまま地面に寝っ転がる。

もう少しで眠れそうだと言う時に、頬を何かに触られる。目を開けると黒猫が一匹、静かに座っていた。

この黒猫は黒歌の使い魔であり、町にいるはぐれ悪魔を見つけると、今のように教えてくれるのだ。

ゾロは刀を取り、黒歌達には何も言わず黒猫の道案内の元、廃墟へ辿り着く。中の様子を伺うために開いている場所から入ると、紅の髪を持った女性と黒髪の女性、金髪の男性に白音がはぐれ悪魔と戦っていた。

否、戦っているのは白音と金髪の男性だけ。二人は後ろで談笑していた。二人がピンチだと言うのに。

そして、ゾロの後ろからは見知った気配が物凄い速さで近付いてくる。その気配はゾロの隣で止まる。

「白音は!?」

「落ち着け。あんな状況だ。」

「つ!!リアス・グレモリー・・・!!」

黒歌は怒りから突っ込んで行こうとするもゾロに首根っこを捕まえられ動けなくなる。

「な、なにすんのよー!」

「まあ待て。お前は顔が割れてる分、余計面倒になる。俺が行く」

ゾロは自身に幻惑を掛けて姿を変える。刀に手を掛けてそのまま飛び降りる。はぐれ悪魔はギリギリで気配を感知して避ける。

『人間だと・・・?退魔師の部類か!!』

「随分と楽しそうじゃねえか、混ぜてもらおうぜ」

「な!?!あ、あなた何者よ!」

ゾロは紅髪の女性を無視して鬼徹のみを抜く。白音ともう一人の男性は限界が近いのか膝を突いて肩で息をしている。

『人間風情がア!!』

はぐれ悪魔はゾロに猛攻を仕掛けるも、ゾロは体捌きのみで攻撃を躲す。刀を握りながらも刀を使わない。

そもそも、ゾロにとっては遅過ぎるのだ。牛鬼との戦いを経て、二人の師を得たゾロにとってはスローモーションなのだ。

『ハア・・・ハア・・・何故だ!!何故当たらない!!』

「んなもん、てめえが遅いからだろうが」

『貴様ア!!』

はぐれ悪魔が再度突っ込んで来る。にも関わらず、ゾロは終わりと
言わんばかりに刀を納刀する。はぐれ悪魔は好機と見て爪を繰り出
そうとするも、ふと目が合った。合ってしまった。

ゾロの目には諦めも無ければ、楽しいと思う感情も無い。あるの
は、純粹なまでの莫大な殺意。

これに気付いたはぐれ悪魔は急停止しようとするももう遅い。気
付けば、はぐれ悪魔の目の前にゾロはいなかった。

「二刀流居合。獅子歌歌。」

スチャン

再度納刀した瞬間、はぐれ悪魔の頭と体が突然の別れを告げる。こ
の結果に、ゾロ以外の誰もが驚愕した。ゾロは我関せずと言った感じ
で、黒歌がこっそり開いた魔法陣へ乗り、自宅へと帰る。

「・・・お疲れにゃ」

「ああ。今日はもう来ないだろう。寝るぞ」

ゾロは着替えを済ましてベットに入る。しかし、いつもなら猫にな
るはずの黒歌はそのまま入ってきて、ゾロの胸に顔を埋める。

「・・・今日は・・・このままでいさせて・・・!」

「・・・ああ、好きにしろ」

ゾロは黒歌の頭を優しく撫でながら眠りについた。

8話

はぐれ悪魔を斬った翌日の放課後、帰ろうとした矢先に白音に屋上へと呼び出される。屋上へ行くと腕に包帯を巻いた白音がいた。

「なんだ？怪我でもしたのか？」

「…はい。というよりも知っていますよね？昨日、はぐれ悪魔を斬ったのは先輩なんですから」

これには少しばかりゾロも驚く。バレているとは思っていないなかったからだ。

「チツ……んで？こんな所に呼び出してどうした？」

「お願いします！私達に戦い方を教えて下さい！」

白音は突然、頭を下げてお願いをする。まさか、ここまでされるとは思っていなかった。それこそ、白音は黒歌にお願いすると思っていたのだ。しかし、気になった事もある。

「私達つてのは？」

「…昨日、私の隣に居た男性です。あの人は木場祐斗先輩。ゾロ先輩と同じ年の方です。昨日の怪我で、今日はお休みしています…」

「…そうか。だが、俺は人に教えたことなんてねえぞ？」

「そう……ですか……」

「……まったく。今日、家に来い。お前の言っている先輩も一緒だ」

ゾロはそれだけ言って帰宅する。帰宅して黒歌にそう伝えると、驚くほどあっさり了承を貰えた。理由を聞くと「昨日の扱いを見たから」だそうだ。確かに、あの扱いは酷すぎる。本人達は自分が強いと思っているのだろうが、実際はそうでも無い。

そして夜中、家のチャイムが鳴り出てみると、白音と昨日の男性がいた。

「よお。とりあえず、中に入れ」

「お邪魔します」

「お、お邪魔します……」

男性の方は緊張しながらも家の中に入る。ゾロは自室では無く、トレーニングルームへ案内した。白音と男性の方は何も言わずついて

行き、トレーニングルームには黒歌が座禅をして待っていた。

「黒歌姉様！な、なんで！」

「なんでも何も、白音の事は私がやるって言ったにや。そっちの子はゾロが受け持つから。どうせなら、マンツーマンの方がいいでしょ？」

「そういう訳だ。さて、お前は……」

「ぼ、僕は木場祐斗。兵藤麤路君……だよな？」

「なんだ、知ってるのか。じゃあ、祐斗」

ゾロは用意していた木刀を祐斗に投げ、自身も木刀を握る。

「え、えっと……」

「本気で来い。でなきゃ、アドバイスも出来ねえ」

「わ、分かった」

祐斗が構える所から、一步踏み出すところまでをゾロは一つも見逃さず注視していた。そして、一太刀目。上段切りを難なく防ぐ。ここまでで幾つもの修正点を見つける。

それから5分程の試合をしてゾロがストップをかける。

「そこまでだ。基礎は出来てるな。お前、師匠でもいたか？」

「あ、うん。まあ、師匠と言っていいのかは微妙な所だったけどね」

「そうか。なら、その師匠から習ったもの全てを捨てろ」

ゾロの一言に祐斗は一瞬、固まってしまう。捨てるのは簡単だ。しかし、簡単に捨てていいものか迷ってしまう。

「お前の師はかなり腕が良いんだろうよ。だが、それが必ずしも良いとは限らねえ。現にお前の使っている剣技は力で押すためのものだ」「力で押す……？」

「ああ。だが、お前には肝心の力が無い。だからこそ、お前の才能に足枷をしてるんだ」

祐斗はどこか納得してしまう。確かに、今までの剣技にどこか違和感があった。自分に合って無いような微かな違和感。

「でも、才能というのは……」

「俺の勘だが、お前は力で攻めるといふよりも技で翻弄するタイプだ。すぐにとは言わねえ。ゆつくりと体に慣らすように変えろ」

この短い時間での変更。しかし、これで強くなれるのなら。それに、自分の師匠は師弟らしい事をしなかった気もする。ただ型を教えられ、後はそのまま放置。果たして、これが師匠と言えるのか。

「それと、胸の蟠りは消しとけ。わだかまじゃなきゃ、教える事も出来ねえよ」
祐斗はゾクリと背筋が凍る感覚を受ける。今さつき会ったばかりで、五分程しか剣を交えていないのに見破られたのだ。しかし、祐斗は譲れなかった。

「・・・悪いけどそれは出来ない。僕は復讐の為に生きているんだ。全ての聖剣を破壊する為に」

「なら、俺から教える事は何もねえよ。お前には覚悟が無さすぎる」

その言葉を聞いた瞬間、祐斗は激昂し神セイクリッド・ギア器、魔剣創造で創った魔剣でゾロに斬り掛かるも傷付かず簡単に砕かれてしまう。

「な!?!」

「だから言ったら、お前には覚悟が足りないって。お前の強くなりた理由は分かった、恨みも分かった。だが、それだけで強くなれると思うんじゃねえよ」

「ぼ、僕の憎しみが足りないって言うのか!?!」

「誰もそんな事言ってるねえだろ。それに俺は、恨みを捨てろだなんて一言も言ってるねえよ。本気で強くなりたいと思うなら、夢も野望全てかなぐり捨てて、強くなる事だけに集中しろ」

「強くなる事だけ・・・で、でも、僕は同士達の仇を・・・!!」

「とりあえず今日は帰れ。そして、体を休ませつつ考えろ」

祐斗の捨てた木刀を手にゾロは黒歌達の所へ行く。残された祐斗はどうすればいいか分からず立ち尽くすのみだった。

9話

「あれ？ゾロはもう終わりかによ？」

「ああ。あいつには考える時間が必要だからな」

「？まあ、ゾロが何考えてるか分からないのは今更だし別にいいにや」

「白音が座禅をしているのは気をより感じ取るためか？」

「ええ。仙術を極めるには、地味な修業が持ってこいだし。ゾロはもう寝るのかによ？」

「ああ。やる事が無えからな。おやすみ」

「ええ、おやすみ」

ゾロの背中を見ながら黒歌はやれやれとため息を着く。そんな黒歌が気になったのか、白音は瞑想を辞める。

「あの・・・姉様。先輩って一体・・・」

「単なる剣術バカにやん。さ、瞑想に戻りなさい」

「あの・・・僕からでもいいですか？」

「にやん？君はゾロが見てた子ね。何かによ？」

「ゾロ君は一体何を目指しているんですか・・・？」

「世界一の大剣豪にや。なんでも、巖流島の戦いを見てそう思ったらしいにや。最初は私も適当に流してたけど、今なら本当になりかねないし。そもそも、ゾロは実際に命を掛けてるもの」

「命・・・？」

「ゾロの腰にあった三本の刀は見たでしょ？あれは、とんでもない負の遺産にや」

「魔剣って事ですか？でも、日本刀でその手の類は全て破壊されたと・・・」

「まあ、有名なものはね。数百年、鎖国してた国よ？世に出ていないものなんてごまんとあるにや。木場君だっけかによ？とりあえず、しばらく考えなさい。そして、自分で答えを出すにや」

「・・・はい。失礼します」

祐斗は黒歌に一礼し帰っていく。白音はその後も数時間ほど黒歌から基礎的な事を教えてもらいゾロの家を後にする。

翌日は休みだった為、白音は朝から行こうとするも黒歌から、「急用が入ったから休み」という連絡を受け、1日中自室で座禅をする。

その頃ゾロと黒歌はと言うと、八坂からの仕事を引き受けていた。その仕事は、「京都での半グレを表裏関係なく全て潰して欲しい」というものだった。

体を動かす事が得意な二人は手分けして潰しにかかる。黒歌は表を、ゾロは裏を担当し、派手に暴れ回る。

しかし、誰も困るものなどいない。それどころか、感謝される。半グレ達は、恐喝、殺人、詐欺と表裏関係なく堂々と暴れ回り、遂には妖怪勢力が戦争を覚悟しなければならぬ程までに成長していた。

しかし、この勢力を跡形もなく潰した上、八坂が手綱を握っていると言うことから、ゾロと黒歌は『九尾の狂犬達』という二つ名を貰うこととなる。そしてその異名は少しずつ、しかし確実に他勢力にも伝わる事となる。

大暴れした翌日、二人は家で爆睡。起きたのは夜だったものの、特に気にすること無く遅めの夕食を摂る。

模擬戦をしようという事になり、リビングから鍛錬場へ移動しようと言う時にチャイムが鳴る。出れば、白音と祐斗だった為、家に入れつつ4人で鍛錬場へ向かう。白音の事は黒歌に任せてゾロは祐斗と向き合う。

「・・・あれから考えたんだ。でも、やっぱり僕は復讐を忘れることなんて出来ない」

「・・・そうか」

「でも、僕は強くならなきゃいけないんだ！だからこそ、君の前では復讐を忘れる！だから！」

祐斗は突然土下座をする。これには、流星の黒歌と白音も目を丸くしてしまった。

「僕に!!剣を教えて下さい・・・!!」

「ハッハッハッハ！いいぜ、祐斗。だが、俺は実践式でな。死んでも文句は言うなよ？」

「当然だよ」

祐斗はゾロの言葉に不敵な笑みを浮かべる。そして、この日から祐斗と白音の本格的なトレーニングが始まった。しかし、二人は眷属悪魔。限られた時間しかトレーニング出来ないからこそ、真剣に強さにしがみついた。

その結果、限られた時間しか修行出来ないながらも二人は原作での「吸血鬼騒動」の際の強さを手に入れた。

祐斗に至っては、慣れ親しんでいた型を一から変える事に最初は苦戦していたものの、徐々に慣れていき遂には才能を開花させる。

主であるリアス・グレモリーは二人が突然強くなったことに疑問を持つ事無く喜んだ。自分の評価がまた上がると。自分の事しか頭にないのだ。

そしてそれぞれが進級したころ、物語は再び動きだす。

「ひ、兵藤麤路さん！ウ、ウチと付き合ってくれませんか!？」

原作とは全く違う物語へと。

10話

「あ？誰だ、お前」

「う、ウチはミツテ・・・じゃなくて、天野ルナっす！」

「なんだ、その取ってつけた名前は」

「な!?し、失礼な！ウチだって、夜通し真剣に！あっ・・・」

ゾロは彼女を見て手で顔を覆いながらため息を着く。そもそも、彼女の気の流れは人間と違う。異種族ではあるのだろうが、ここまで暴露するとは思っても見なかった。

恐らく自分を殺す為に来たのだと推測するも、こうなってはムードが欠ける。なんとも言えない空気を払拭すべくゾロの方から声をかけようとした時、突然少女が崩れ落ち泣き出してしまった。

「お、おい！ど、どうした!？」

「ウチ・・・ウチ、またやっちゃった・・・！こ、こんなだからみんなに・・・！」

さつきよりも重い空気になりゾロも放ってはおけず、とりあえず近くの公園まで連れていく。あそこでそのまま泣かれています、せつかく緩和されたゾロの対応もまた元に戻ってしまうと思っただからだ。

ゾロは少女をベンチに座らせ、近くの自販機で適当に飲み物を買って少女に手渡す。

「あ、ありがとうございます・・・」

「んで？お前は俺を殺しに来たのか？」

「・・・はい」

「随分と素直な殺し屋だな」

「す、素直なのがウリなんで！」

「誇んじやねえよ。ったく・・・」

それから、ゾロは色々話を聞く事が出来た。まず、ゾロが狙われた理由は「神セイクリッド・ギア器を持っているかもしれないから」という曖昧な理由で、彼女がその仕事を請け負ったのは良いもの、先程のミスをしてしまったらしい。

「なんでウチってこうなんだろ・・・。仕事もちゃんと出来ないし、だ

からみんなから・・・」

「落ち込むんじゃねえよ。ミス位、誰にでもあんだろ」

「何をしているのかしら？ミッテルト」

少女が何かを言おうとするも別の女性の声に遮られる。ミッテルトと呼ばれ少女は怯えた表情になり、ゾロは片目で相手を捉える。

青色の髪に一昔前に流行したボディコンを着ている女性だった。背中に真つ黒な翼を出して飛んではいるが。

「カ、カラワーナ様・・・！」

「あなた、レイナーレ様の話を聞いていなかったのかしら？何を仲良くなっているの」

「ったく・・・、泣き虫な殺し屋の次はカラス人間か？ボケに振り切りやがって」

「・・・貴様。たかが人間の癖に敬う事も出来ないのか？」

「悪いな、異形を敬う心なんて無いんでな。カラスには特にな」

「っ!!貴様ア!!」

カラワーナと呼ばれた女性は二人に向かって光の槍を作って投げつけるも、ゾロは少女を担いで後ろに飛ぶ。

「チツ・・・おい、殺し屋！自分の身は自分で守れよ！」

「ちよ！な、何言ってるんすか!?!か、勝てるわけ無いっすよ！」

ゾロは短刀を抜き仙術を纏わせずに斬撃を飛ばす。カラワーナは驚きのあまり固まってしまい片翼を斬り落とされる。片翼で飛べるはずもなく、重力に従うしかない。

「わ、私の翼が・・・!!」

短刀流桜吹雪

一瞬でカラワーナの目の前まで来て横一線。ゾロが短刀を鞘に収めると同時に血飛沫が上がる。しかし少女には、その血飛沫が桜吹雪の様に見えていた。

「何を驚いてるんだか。裏の世界で飛ぶ斬撃なんて、珍しくもねえだろ」

「あ、あの、カラワーナ様を一瞬で・・・!!」

「とりあえずお前も今日は帰れ。あの痴女が死んだんなら言い訳もつ

くだろ？簡単に傷を付けるぞ」

ゾロは短刀でミッテルトに残らないよう一瞬で多数の傷を付ける。ミッテルトは痛みに一瞬顔を歪めるも、無言で頷き墮天使式の魔法陣でどこかへ消える。

ゾロも一刻も早くこの場を後にする。仙術で悪魔の気配を感じたのだ。恐らく白音と祐斗の仲間だろうと推測する。

赤髪と黒髪に出会ったら必ず面倒な事になる。それだけはなんとしてでも避けなければならなかった。

なんとか帰宅出来たはいいものの、あの場所にいたのはバレている可能性もある。故にゾロは1日様子を見る為に翌日は学校を休んだ。

偶にはと、黒歌を誘って駒王町へ二人で繰り出す。現在は朝。リアス・グレモリーももう一人も学校の為、見つかる事は無い。

という訳で、黒歌の行きたい所に全て付き合った。当然、買い物をした際の金額はゾロ持ち。ゾロは文句を言おうと思いはしたが、楽しそうな黒歌を見ると言う気も失せる。

カラオケ、シヨップピングモール、ボーリングと遊べるだけ遊び夕方。どこかで夕食を食べようと言う事になり、黒歌の希望で焼肉へ。

二時間の食べ放題を楽しみ、いざ帰宅となった時にゾロの携帯が鳴る。確認すると白音からの電話だった。

『すみません、ゾロ先輩。今、どこにいます？』

「黒歌とデートだった。何かあったのか？」

『デ、デート?!いい、いえ、昨日ってどこかで暴れたりしました?』

「暴れたがどうかしたか？」

『やっぱり・・・、ゾロ先輩の事が部長にバレました。多分、明日にも呼び出されるはずです。それと、先輩のお兄さんも悪魔になりました』

「チツ・・・分かった。悪いな、わざわざ」

『い、いえ。では』

「白音はなんて？」

「赤髪にバレたんだと」

「面倒ね・・・」

「それと、バカが悪魔になったんだと」

「うわ、最悪にやん・・・まあ、私の事はバレていないと思いたいけど・・・」

「まあ、大丈夫だろ。一応、明日は赤髪の所に行ってくる」

「まあ、心配はしてないけど気をつけるにや」

「ああ。それよりも他に行きたいところは？」

「んー、そうねえ・・・。公園かにはや？私とゾロが最初に会った」

「あそこか・・・。分かった、行くぞ」

ゾロと黒歌は再び歩き出す。ゾロは目元に傷があるものの、中々のイケメンであり黒歌も美人だ。見られないはずもない。過ぎ去る人は女性であろうと男性であろうと振り返り二人を見るも、当の二人は気にせず談笑に花を咲かせる。

歩いて数分で二人は目的地に辿り着く。遊具は新しいものに替えられているものの、二人が出会った当初の面影は残っていた。

ベンチに掛けのんびりしながら話をしていると、「きゃっ！」という可愛らしい悲鳴が聞こえ、二人が声の主を見れば黒い服を着た小柄な子が転びスーツケースの中身をぶちまけていた。

「はうう・・・ど、どうして、いつもこうなのでしょう・・・」

「おい、大丈夫か？」

「ありやりや。軽い惨事ね。」

二人はすぐさま近付き荷物を纏めるのを手伝う。しかし、黒歌が顔を一瞬顰めたのをゾロは見逃さなかった。荷物を纏め終わると、小柄な子は顔を上げるもその際風が吹き、少女のベールが風に攫われそうになるもゾロが素早くキャッチする。

「す、すみません。あ、ありがとうございます」

「大丈夫だ。ほれ」

ゾロはベールが脱げ、顔が露となった子に返す。小柄な子は金色の髪を持った少女で所謂美少女と言われるタイプだが、ゾロは特に反応を見せることなくベールを返すも、少女はゾロの顔を見た瞬間、驚愕した表情となる。

「そ、その目はどうされたんですか!？」

「あ？ああ、これか。なに、ちよつと事故にあつてな。それで？そんな大荷物を運んでるってことは引越しか？」

「は、はい！この町の教会に赴任してきたシスターの『アーシア・アルジエント』です」

黒歌はシスターという言葉に一瞬気を揺げるも、ゾロと共に気になつた。

確かにこの町に教会はある。しかし、数年前から廃墟と化して今は誰も居ないはずだ。そんな場所に赴任等あるはずも無い。

「じ、実は、お恥ずかしながら道に迷つてしまつて……」

「教会ならあつちだぞ」

「いや、真逆にや。ゾロつてば、本当に方向音痴だにや〜」

「た、たまたまだ！」

「ゾロさんつて言うんですね。あ、あの、そちらの方は……」

「こいつは黒。同居人だ」

「ゾロさん、黒さん。お助け頂きありがとうございました。あなた方二人に神の御加護があらんことを」

アーシアと名乗る女性が目をつぶり、二人に祈りを捧げるも黒歌はズキンと頭が痛む。しかし、目を閉じていたシスターにはバレなかつたようだ。

少女は二人に一礼し、黒歌の教えた道をスーツケースを引き摺つて向かう。厄介事の匂いがするものの、態々自分から行きはしない。

「今日の所は帰るか。頭痛、大丈夫か？」

「ええ……まさか、急に祈られるなんて思つてもみなかつたにや……」
「頭痛薬でも買ってやる」

二人はそのまま帰路に着く。家に戻り、ゾロは日課の手入れ、黒歌はゾロの部屋でゲームをして時間を潰しあつという間に1日が過ぎ去る。

次の日、学校へ登校するとイツセーがすぐさまゾロへ駆け寄つてくる。

「お、おい、ゾロ！お、お前、夕麻ちゃんの事覚えてるよな!？」

「俺に話しかけんな、クスガ」

「な、なんだよ、それ！俺が質問してる事に応えろ！」

「朝からうるせえな……。知るかよ、んなやつ」

「っ！もういい！本当にお前みたいなの弟で俺は残念だよ！」

イツセーはそれだけ言い残して教室の外へ出て行く。しかし、それはゾロも同じだ。イツセーの様な兄で本当に残念だと。

「あんたも大変ね、あんな大人子供みたいなの兄を持って」

「そう思うなら代わってくれ、桐生」

ゾロは話し掛けた少女を見ながら言う。『桐生藍華』、ゾロの数少ない友人の一人であり、原作ではイツセーの友人だったものの、この世界ではイツセーを苦手とする一人だ。

「嫌よ。あんな兄貴だったら風評被害で頭おかしくなるわ」

「分かってんじやねえか」

二人はそこそこに会話し、先生が入ってくる時には互いの席に着く。そして、そのまま何事も無く放課後になる。しかし、いつもと違ったのは白音と祐斗が入ってきた事だ。

「な!?あ、あれは、一年の塔城白音ちゃん!?な、なんで2年のクラスに!?つか、イケメン王子まで一緒かよ！」

「やあ、君が兵藤一誠君だね。リアス・グレモリー先輩が呼んでいたから一緒に来てくれるかい？」

「り、リアス先輩が俺を!？」

「……兵藤麤路先輩ですね？申し訳ないですが、あなたも一緒に来てもらっていいですか？お時間は取らせませんので」

「なるほど、他人のフリか）すぐに帰してくれるってんならまあ……」
「ありがとうございます」

ゾロは立ち上がり、二人を先頭について行く。

「（……それにしても、この二人はたった一年で中々強くなったな……）」
ゾロは思い返す。去年の出来事を。祐斗は生きる糧である復讐を一時的とは言え、プライドと共になぐり捨てて土下座をしたことを。白音が黒歌と仲直りして、強くして欲しいと心から願ったことを。

「（ある意味、俺の野望を叶える上で1番の障害になるかもな。この二

人は)」

この学園に来てゾロの周囲は変化した。校内には中学の時とは違い複数の友人がいて、一部の京の者と黒歌以外は関わりを持たなかったはずなのに、今では弟子がいる。

そんな事を考えながら進んでいたゾロだが、さつきまで目の前に居た白音達がいつの間にか居なくなっていた。そして、どこもかしこも同じような部屋が続く廊下。

「……ここはどこだ？」

そう呟いた瞬間、携帯が鳴る。見れば白音の名前が表示されていた為、迷うことなく出る。

「おい、白音。今、お前はどこにいるんだ？」

『……聞きたいのは私の方です、なんで後ろを付いてくるだけなのに逸れるんですか？』

「あ？俺はちゃんとして行ったぞ」

『……というか、一年もいるならちゃんと道を覚えておいてください。それでどこにいるんですか？迎えに行きます』

「生徒会室……って書いてるな」

「分かりました。いいですか？絶対にその場を動かないでください。絶対ですよ？」

「あ、ああ」

白音の少し怒りの混じった声を聞き流石のゾロもほんの少し焦る。

しかし、二人は気付いていなかった。今、ゾロが居るのは高等部の生徒会室前ではなく、中等部の生徒会室前だと言うことに。

11話

「・・・先輩。何をどうしたら高等部から中等部へ行くんですか？ロリコンなんですか？変態ですか？」

「うるせえな！俺だって、好きでいたわけじゃねえよ！歩いてたらあつちにいたんだよ！」

白音からの電話から1時間後にゾロは発見され、白音に文句を言われていた。そして今度は、はぐれないようにしつかりと手を握られているも、その体格差から白音が迷子になりそうと言う理由で手を繋がれてるようにも見える。

数分程歩き、ようやく目的地の旧校舎へと着く。

「ようやく着きました。多分部長も怒っているでしょうから、油を注がないでくださいね？」

「・・・まあ、善処する」

「部長、失礼します。兵藤麤路先輩を連れて来ました」

白音が扉を開けると、なんとも怪しく不気味な部屋だった。部屋の中央に来客用のソファ等が置かれ、イツセーとリアスは向かい合って座っている。

「おい、ゾロ！お前、なにしてんだよ！」

「チツ・・・そういや、こいつもいたな・・・。で？何の用だ」

「あなた、口の利き方を考えなさい。せっかく、私が呼んであげたというのに」

「そうかい。なら、帰らせてもらうぜ」

「な！ま、待ちなさい！」

「なんだ？悪いが俺はこんな悪趣味な部屋でお話し合いなんてするつもりは無いんだが？」

ゾロの言い分に祐斗は苦笑し、白音は顔を手で覆う。そして、主であるリアスと彼女の側近である姫島朱乃は怒りを隠そうともしなかったがそれより早くイツセーが殴りかかって来る。

今までなら受けていた・・・否、受けてあげていた暴力を軽く避けて逆にゾロは殴り飛ばす。

「ゴハッ！」

「な!?!あなた、よくも私の可愛い下僕を!!」

「つたく・・・そっちからだっただろうが」

「黙りなさい!白音、祐斗!!そいつを潰しなさい!!」

しかし二人は動かない。否、動く気も無い。それに、何百、何千と手合わせをしてきたものの、二人は一度もゾロに勝てた事がないのだ。

そんなことを知らないリアスは二人の行動にも激怒し、遂には魔力を溜め始める。それは朱乃も同じで、リアスの手には黒い球体が、朱乃の手には雷が出てくるも、ゾロにとつては遅すぎる。いくら優れた力を持つていようと、使いこなせなければ意味を成さないのだ。

ゾロはカバンから、いつも持ち歩いているドスを取り出す。このドスは京都で拾って以来ずっと使っているものだが、毎日手入れを欠かさない為、切れ味は最高品質なものとなっている。

「短刀流居合」

「消し飛びなさい!!」

「雷よ!!」

二人の放った魔力は一瞬で縦に真つ二つとなる。見慣れている二人はそれでも無いが、魔力を放った本人達は驚愕する事しか出来なかった。

「じゃあな・・・。ああ、そうだ。1つ、お前二人に教えといてやるよ」

ゾロは既に潰れた左から後ろを向き、右目では今にもリアスを殺さんと殺気を放つ。

「てめえらが二人にどういう対応をしようと勝手だが、あまり舐めると飼い犬に手を噛まれるぞ」

それだけを言い残しゾロは部屋を出ていく。祐斗と白音も一礼しゾロを追いかける。

部室には、伸びきったイツセーとゾロの迫力に腰が抜けた二人のみが残された。

「悪かったな、二人とも」

「いえ。あれは部長が悪いので気にしないでください」

「それにいつもの事だから今更だよ」

「お前らも大変だな。ま、今度飯でも奢ってやる」

「ご飯・・・!!」

「ありがとう。その時は甘えさせてもらうよ」

「それじゃあまた明日」

「ああ。また」

「あ！よ、ようやく見つけたっす!!」

「あ？」

ゾロ達は声の方を見ると以前の墮天使が息を切らして走ってくる。しかし、その墮天使を知らない二人はすぐさま臨戦態勢を取る。

「ひっ！ちよ、ま、待つつす！お、お願いっすから！」

「・・・ゾロ君。知り合いかい？」

「・・・ああ、あの時の殺し屋か」

「・・・殺し屋？」

「ちよ！た、確かに当たっているっすけど、その回答はダメっすよ！」

「で？何をそんなに焦ってんだ？」

「あ、そ、そうだ！お、お願いします！ウ、ウチの友達を助けてください!!」

誰かが止めようにも物語は止めることも訂正する事も出来ない。この世界は原作からどんどん遠ざかっていく。

12話

「友達？」

「は、はい！あ、あなたを殺そうとした私が頼めることじゃないのは百も承知つす……で、でも……!!」

「……ちよつと待ってろ。」

そう言つて、ゾロは携帯を取り出し誰かに電話を掛ける。

「……俺だ。悪いな、今日は帰りが遅くなる。……ああ、ああ。……ああ?!お、おい!……つたく。んじゃ、殺し屋。案内しろ。」

「ふえ……?」

「手伝つて欲しいんだろ?お前らはどうする?」

「行きます。ストレス発散の為に。」

「あ、あはは……まあ、僕も手伝うよ。主に白音ちゃんの制御だけど……」

「そういう訳だ。で、どこに行けばいい?」

「っ!あ、ありがとうございます!ば、場所はこの町の教会つす!」

「待ちなさい!!」

4人が駆けようとした時、聞き覚えのある声からストップが入る。振り返れば案の定、リアスだった。その後ろには朱乃とイツセーもいる。

「兵藤麤路!二人を連れて行くのは認められないわ!二人は私の眷属よ!それに、この町は私の管理下にあるの!勝手な行動は憤みなさい!」

「だからなんだ?俺はお前の言うことを聞く義理はねえよ。行くぞ。」

ミッテルトを先頭にゾロ達はリアス達を置いて走り出す。白音と祐斗が言う事を聞かなかつたという事実によりアスはシヨックを受けると、次にはゾロに激しい憎悪を抱く。

自身の忠実な眷属もとい駒を勝手に横取りしたと。それは朱乃も同じで、せつかくのストレス発散が消えたという事に怒りを覚える。イツセーはと言うと、リアスの言う事を聞かなかつたゾロに激しく怒りを覚える。

彼、彼女らは単純なのだ。自分の思い通りに行かなければ他人のせいにし、やりたい事が出来ないとなると癩癩を起こす。まるで小さな子供の様に。

リアス達も少し離れたゾロ達を追う。この恨みを晴らすために。

ゾロ達と言うと、既に廃教会へ到着しいつでも動けるように立っていた。

ゾロは腰に刀を差しているものの、鬼徹達では無く普通の刀。この刀は、祐斗達との鍛錬で使用しているものだが、斬れ味は言うまでもない。

「おし。んじや行くか。」

「そうだね。」

「はい。全てぶっ飛ばします。」

「あ、あの！ほ、本当にこれだけで大丈夫なんすか!?!ほ、他の人も!」
「必要ねえよ。お前ら、やるからには徹底的に潰せよ。」

「はい!」

準備の出来た三人は殺る気を漲らせる。それを見てミッテルトは震え上がった。敵じゃなくて本当に良かったと。

白音が巨大なドアをぶち破ると、数百人程の神父がいるが、まずはゾロが三本の刀を抜き構える。

「なんだ、貴様ら!」

「三刀流!龍巻!!」

「!」
「ガアアアア!」
「!」

「な、なんだ!?!」

「き、気をつけろ!この竜巻、斬り裂いてるぞ!!」

「祐斗!白音!」

「はい!!」

名前を呼ばれた瞬間、ミッテルトの視界から二人が消える。ミッテルトは驚くよりも早く、更に驚く事が目の前で起こっている。ある神父は見えない何かに壁に叩きつけられ、ある神父は突然、胸や首から血しぶきを上げる。

神父達は大混乱に陥り連携もろくに取れないまま、簡単に全滅す

る。

「おい、殺し屋。お前の友達つてのはどこにいる？」

「へあ!? あ、は、はい! こ、ここの地下「えい!」ふえ!」

「次はゾロ君が暴れる番だよ。僕達は充分暴れたからね。」

「おう。行くぞ、殺し屋。」

「ちよ! 待つっす!」

ゾロは刀を鞘に収め、白音の壊した祭壇の下に行く。ミッテルトは急いでゾロについて行くも、その小さな体が怯えているのをゾロは見逃さなかった。

下まで降りると、黒のロングコートを着た男の堕天使と痴女の様な格好をした女性堕天使と十字架に磔にされている金髪の少女がいた。しかし、ゾロは見覚えがあった。

「殺し屋。お前の友達つて、まさかアーシアの事か？」

「っ! し、知ってるんすね!? そ、そうっす! い、今すぐ助けなきや、セイクリッド・ギア神器を抜かれちゃうんす! だ、だから!」

一刀流縁切り

ゾロとミッテルトの会話にようやく気付いた堕天使がこちらを向くも、女性の堕天使はゾロの『飛ぶ斬撃』で片腕を斬切される。

「ギャー!! わ、私の! 私の腕がア!!」

「ミッテルト!! 貴様、何のつもりだア!!」

「ウチはただ、その子を守りたいだけっすよ!」

「殺し屋・・・いや、ミッテルト。お前が助けてやれ。」

「っ! は、はいっす!!」

ゾロは牽制の為に『飛ぶ斬撃』を放ち、二人の堕天使を十字架から離す。ミッテルトは光の矢を撃ち込み、鎖を破壊してアーシアをキヤッチした後、すぐさまゾロの方へ戻る。

「ミッテルト・・・さん・・・?」

「ア、アーシア! も、もう、大丈夫っす!」

「あなたは・・・」

「今はミッテルトに甘えとけ。ミッテルト。上に行け。」

「は、はいっす!!」

「ミッテルトオオオ!!ドーナシーク!!裏切り者を殺しなさい!!!」

痴女の墮天使が叫んだ瞬間、コートの中の墮天使が動こうとするも時既に遅し。動いた瞬間にゾロに脳天から真つ二つに斬り裂かれ呆気なく死ぬ。ミッテルトはアーシアを担ぎながら絶対に後ろを見ずに走っていた為、運良く見る事は無かった。

「な!？」

「後はてめえだけだな。」

「ヒイツ!く、来るな!わ、私は崇高なる墮天使!!き、貴様の様な下賤な人間が私を殺すなど!」

「二刀流奥義」

ゾロは墮天使の言葉を無視してもう一本の刀を抜き、片方を逆手に構え、すぐさま走り出す。

墮天使は死の恐怖から反撃も逃走も出来ず、腰が抜けてしまう。しかし、ゾロは止まらない。ゾロは回転し、墮天使が瞬きをした瞬間には消えていた。どこにいるか探そうとするも体が動かない。

それもそのはず、墮天使はボロボロと肉の塊となって崩れ落ちていくのだ。ゾロは血を払い鞘に収める。

斬鯨キリサメ

ゾロは死体に見向きもせず上に戻る。上では、長椅子にアーシアが寝かされてはいたものの、命に別状は無いようで、ミッテルト達は安堵している様子だった。

「これで終わりだな。」

「そうだね。でも問題は……」

「このシスターさんですね。」

「……ウチ、頑張つてアーシアと一緒にいるっす!もし、狙われてもアーシアだけは絶対に……!!」

「……ミッテルト。お前、家事出来るか?」

「か、家事……?ま、まあ、それなりに……」

「よし。なら、二人は俺が引き取る。」

「ええ!?な、何言ってるんすか!?ウ、ウチはあなたを!」

「別に気にしちやいなえよ。それに、ちようど家事が出来るやつを探

してたんだ。当然拒否も出来るがどうする?」

「お、置いてくれるならお願いします!アーシアだけでもいいっす!」
ミッテルトはゾロに土下座をする勢いで頭を下げる。それを見たゾロは頭に?を浮かべる。

「何言ってるんだ、お前は。二人とも、引き取るって言ったろ。ほら、アーシアを背負え。行くぞ。」

「ま、待ちなさい!!」

「チツ・・・今更何の用だ。」

入口にはリアス・グレモリー、姫島朱乃、イツセーが肩で息をして入口に立っている。

「な!?だ、誰だ、その美少女二人は!」

「何故、墮天使と共にいるのよ!」

「なんで一々、お前に教えなきやいけないんだよ。俺はてめえの所有物じゃねえよ。」

ゾロは仙術で霧を作り、ミッテルトとアーシアと共に一瞬で消える。この場で追い付けた者は祐斗と白音くらいだが、特に追う必要も無いためそのままスルーしたのだった。

リアス達はただの無駄足となった事に怒り、祐斗と白音を責めたが、二人は我関せずと言った表情。

「祐斗、白音!!二人を兵藤麤路と接触するのを禁じるわ!!これは、主としての命令よ!!聞けないというのであれば、あなた達二人をはぐれとして処理するわよ!」

「僕は構いません。」

「私もです。それに今、私達をはぐれにすれば困るのは部長達だと思いますが?」

「あらあら、どういう意味ですか?」

「部長は近々、婚約を控えてるそうですね。しかし、あなたはそれを破談にしたい。その為には人手がいるんじゃないですか?」

「っ!な、何故それを!」

「・・・まあ、あんな大声で通信したら誰でも分かります。それを加味した上ではぐれにするならどうぞ。」

「二人共、部長になんて言い草なんだよ！部長は俺たちの主で「何も知らない君が口を挟まないでくれるかい？」っ！」

イツセーが喋っている途中で祐斗からストツプが入る。純粋な殺意を込めながら。

流石のイツセーもこれには怯え、後ずさりしてしまう。

「・・・それで、部長。どうしますか？はぐれとして対処すると言うのであれば、私と祐斗先輩はこの場を去りますが。」

リアスは歯を食いしばり、拳をこれでもかと強く握る。立場が逆転してしまっただ。まさか、「はぐれにしても構わない」と言い出すのだ。

それに、祐斗の言った事も事実だ。実家の勝手に決めた婚約を破棄するには強行手段に出るしか無い。その為には一人でも多く数が必要なのだ。

「・・・分かったわ。まだ、私の手元に置いてあげる。その代わりに、次は無いわよ!!」

「はい。」

二人は頭を下げ、教会から去ろうとする。朱乃はこの行動に我慢が出来ず、雷を放とうとするも莫大なまでの殺意に当てられ、体が震え腰が一瞬で抜けてしまう。この殺意には、イツセーとリアスも再度、震えが止まらなくなった。

二人では無い。顔も名前も知らない第三者からの莫大な殺意。祐斗と白音は一瞬だけ反応を示すものの、慣れ親しんだ気配だと分かり、特に気にすることなく教会を後にして帰路へと着いた。

13話

ガチャンガチャン

「そんな……！事が……！あつた……！のか……！」

「ええ……。正直、あの時の私はどうかしてたと思うにや……。」

「だがその方法……！以外、無かつたんだろ……！」

「まあ、それはそうだけど……てか、人が話してる時くらい、素振りを辞めるにや。」

あの後、ミツテルトとアーシアを連れて帰ってきたゾロは、二人を部屋に寝かせ黒歌が帰ってくるまでは鍛錬室で瞑想。帰ってきてからは素振りをしていた。

しかし、単なる素振りのはずは無い。単なる素振りからは、こんな金属音が聞こえない。

ゾロが素振りをしていた得物は、特注のバーベル。それも、片方だけにこれでもかと重りが付けられている。その重さ、約4t。

ゾロはバーベルをゆつくりと地面に置き汗を拭う。

「まあこれであのバカ達も、白音と祐斗が離れつつあると危機感を覚えてまともな行動をするだろ。」

「それはどうかにや？自分こそ最強と思ってるバカ二人に、我儘が過ぎるあんたの兄。下手をすれば、もつと面倒な事になるかもにや。」

「ま、否定は出来ねえな。」

ゾロは、鬼徹、閻魔、村雨を抜き、虚空に向かって振るう。しかし、閻雲に振るっている訳でもない。まるで、目の前に本当に敵がいるかのように。

黒歌はそれをボーツと見てみると、村雨にほんの少し違和感を感じる。まるで、虚空すらも斬っているかのように。

ゾロも気付いている様で村雨をじつと見つめている。

「……ゾロも気付いてるのね？」

「……ああ。こいつは……村雨は呪毒だけじゃねえ。他にも何かある。八坂さんも知らねえ何かが。」

「……ま、今日はもう休むにや。明日も学校でしょ？明日は私が二人

を見ておくから。」

「・・・ああ。」

ゾロは納刀して異空間へ仕舞うと風呂場へ行く。しかし、考えているのは先程の違和感だ。今までこんな事は無かった。

しかし、調べても出てくるものは少ないだろう。幼少期は冥界で過ごしたとはいえ黒歌も妖怪でありはぐれだ。その黒歌が知らなかったとなると、よっぽど嚴重に封印されていたのだろう。

そしてゾロ自身、今考えると不自然な事がもう一つある。何故、あの時、自分が妖刀を見つけたのか。

あの三本は他の妖刀と比べ物にならない刀。

一本は持ち主を非業の死へと導く刀、一本は相手と持ち主に即死する程の呪毒を流す刀、一本は持ち主の生命力と仙術を勝手に引き出し殺す刀。

そんなものをあの時のゾロ・・・否、今のゾロでさえも見つけ出せる筈が無い。それこそ、あの部屋に入った瞬間、八坂に知らせが行く方が自然だ。

それなのに、八坂はゾロが手にした事を見るまで気付けなかった。つまり、この三本は内側から長い年月を掛けて負のオーラを、呪いを結界に染み込ませ脆くさせたと言うことになる。それも、妖怪達に気付かれぬ様に。そして、持ち出された際にもオーラを極限まで抑えていたのだ。

ゾロは頭の中で色々と考察を考えていた為、気付けなかった。風呂を上がろうと顔を上げた瞬間、目の前に黒歌がいた事に。

「うおおお?!?!」

「にやはははははは♪」

「な、何してんだ、お前?! い、いつ入ってきた!?!」

「あら、普通に入ってきたにや。なくんか、ゾロが考え事してたからちよくつと驚かそうと思つたら、めっちゃ良い反応を貰えたにや♪」

「だからと言って、普通は声を・・・!?!」

ゾロは黒歌の体に視線が行き、思わず目を逸らす。何故なら、黒歌

は全裸で入ってきていたのだ。強くなる事を最優先にしているとはいえ、ゾロも普通の高校生。思春期真っ只中なのだ。

しかし、その反応を見て黒歌が揶揄わないはずもない。黒歌はイタズラな笑みを浮かべ、わざとゾロに体を擦り付けるように近付く。

「あれれ〜？ゾロはな〜んで、目を合わせてくれないのかにや〜？」

「わ、悪いかよ！」

「にやはははは♪いくら強いゾロと云えど、やっぱり子供ね〜。初心な反応が見れて、お姉さん得した気分じゃん♪」

「くっ・・・！てめえ、後で覚えてろよ・・・！」

「はあく、面白かったにや〜♪さくて、揶揄うのも終わりにして、ゾロ。背中流してあげるにや。」

「はあ!?お、お前、急に何言い出してんだ!?!」

「いいから、ほら。さっさと座るにや。」

「・・・」

ゾロはなすがままに座り、黒歌はゾロの背中を洗い始める。しかし、二人の間に会話は無かった。ゾロは戸惑いと何を話せばいいかわからず、黒歌も今更ながら恥ずかしくなり、なんと言葉をかければいいのか分からなかった。

数秒か数分か。互いに緊張から話せずに居たが、最初に言葉を発したのは黒歌だった。

「ね、ねえ、ゾロ?そ、その・・・あ、ありがとう・・・」

「あ?なんだ、急に。」

「い、いや、その・・・まだ、お礼を言ってなかったと思って・・・。白音の事もそうだけど、三年前の牛鬼の事も・・・わ、私が行かなかつたらゾロは左目を無くすことも胸に傷を作ることもしなくて済んだのに・・・」

「・・・その事か。別に構わねえよ。確かに俺は重症を負ったが、そのおかげでお前は後ろ盾を得て、俺も刀を貰った。それに、俺は判断を誤ったとも思っちゃいねえよ。」

「で、でもあの時、私が巫山戯たから!」

「でもなんて言葉は使うんじゃないやねえよ。それにあの時、牛鬼と戦わな

きや、誰かが死んでた。関係の無い一般人まで死んだかもしれないねえ。それに、この家だって貰えなかった。リスクとリターンは五分だ。」

「リスクとリターンは絶対合っていないけど・・・」

「・・・それに、俺はお前に感謝してるんだ。黒歌。」

「か、感謝・・・？」

「お前が居なかったら、今の俺は無い。あのままだったら誰も信用出来ず、イタズラに人を殺し回っていたかもしれないねえ。だからこそ言わせてくれ。俺の傍に居てくれてありがとう、黒歌。」

ゾロは黒歌に向き直り頭を下げる。黒歌はと言うと、ゾロの言葉を聞き涙を流すしか無かった。

黒歌は今まで、ゾロを裏の世界に引き込んだ事に負い目を感じていた。確かにゾロは変わっている。普通の子供とは違う。それでも、現在の表の社会に刀は必要無い。ゾロもいずれはそれを知り、普通の人生を歩んでいたかもしれない。自身はそれを奪ったのだと思い込んでいた。

しかし、ゾロの本心は違った。責める所か礼を言われてしまったのだ。責めない方がおかしい。

しかし、黒歌も心のどこかで分かっていた。ゾロは周りとは違うからこそ考え方も違うと。でもそれを認め甘えれば、いざ責められた時に心を保てないと思ひ、認めたくなかった。それだというのに。

「(それなのに、なんでゾロがお礼を言うのよ・・・!!こんなんじゃ・・・こんなんじゃ二度と離れられないじゃない・・・!!)」

黒歌は認めてしまった。ゾロの本心を。そして、心の荷が降りた瞬間、心臓がいつもよりうるさく感じる。

「・・・そ、そう。わ、私、先上がるにや!」

黒歌は逃げるように風呂場から出ていく。ゾロは少し頭を冷やす為に、シャワーで水を浴びる。

黒歌は脱衣場でもたれつつも、自分の胸を抑える。しかし、鼓動は早くなる一方。いやでも自覚してしまう。否、自覚せざるを得ない。

「(私・・・完全にゾロに落ちちゃったにやん・・・)」

少女の恋はまだ始まったばかり。

14話

「おい、ゾロ!!昨日のはどういう事だよ!!」

「うるせえな・・・てめえに話すことなんてねえよ。」

ゾロが登校した瞬間、イツサーに詰め寄られる。昨日のというのは、ゾロが墮天使と共にいた事だろう。

「な!?お前、俺はお前の!」

「兄貴だから言えつつか?なら、ここでハッキリいつてやるよ。俺はてめえを兄貴だとも家族だとも思った事は一切ない。俺にとつてお前は、「血の繋がった他人」だ。」

それだけを言い横を通り過ぎる。ちらりとイツサーの顔を見ると、驚きと怒りの混じったなんとも言えない顔をしていた。しかし、特に何を思う訳でもなく教室へ向かう。

放課後までは特に絡まれる事も無く帰宅しようとするも、前に祐斗と白音にご飯を奢るといふ約束をしていた為、気は進まないものの、オカルト研究部へと向かう。

しかし、普通に着くはずも無い。ゾロは再び迷う。しかし、運がいい事に正面から二人の女性が歩いてくる。

二人とも眼鏡を掛けているものの、片方の髪型はロングで、もう片方はショート的女性。

「すまない、旧校舎つてどうやって行くか知ってるか?」

「旧校舎ですか?一体なんの用で?」

「友人に用があつてな。知らなかつたらいいんだが・・・」

「友人ですか・・・分かりました。今ならまだ来ていないでしょうし。」

「?まあ、知ってるなら頼む。」

「分かりました。椿姫、あなたは先に戻っていて下さい。私は彼を案内します。」

「はい、会長。失礼します。」

そう言つて、椿姫と呼ばれた長髪の女性はどこかへ行つてしまう。しかし、ゾロはそれよりも気になった事が二つあった。

「会長つて・・・あんだ、生徒会長なのか？」

「ええ、兵藤麤路君。あなたはいつも居眠りをしていましたからね。さあ、こちらです。」

ゾロは女性に言われた事に心当たりがあり少し気まづくなるものの、彼女の後ろをついて行く。ゾロはもう一つ気になった事を聞く。

「あんたも悪魔なのか？」

「ええ。あなたの事もリアスから聞いていますよ。彼女は、「私の眷属を洗脳している！」などと癩癩を起こしていました、いずれは現状の様になつたでしょうね。」

「なんだ、アイツの事を知ってんのか？」

「ええ。幼なじみですから。・・・まあ、子供の頃から何も変わってはいませんが。」

「アイツ、ガキの時からああなのかよ・・・。あんたも相当大変だったんじゃないか？」

「それを言えばあなたこそ。兵藤一誠君と兄弟だというだけで、あらゆる偏見を持たれたとか。」

「・・・昔の話さ。今は関係ねえよ。」

「・・・すみません。不快にさせてしまいましたね。今のは忘れてくれると助かります。」

「いや、俺の方こそ悪かったな。」

そこから二人は無言となる。数分程歩いた所で旧校舎が見えてくるが、まだ距離があるというのにゾロはある気配に気付く。かなり抑えられてはいるものの、完全には殺しきれていない気配。

「(相当強いのがいるな・・・)」

「?どうかされましたか？」

「・・・いや、なんでもねえ。悪いな、忙しいのに案内させちまって。」

「いえ。私はあなたに興味がありましたから。少しでも知れて良かったです。では。」

短髪の少女はそのまま踵を返し新校舎へ戻っていく。ゾロは森を抜けようやく目的地に着く。微かな記憶を辿り、ドアを開けると可愛らしい女性の悲鳴が聞こえる。

「あ？なんだ？」

「な！？あ、あなた、誰ですの！？」

「悪い、ドアの前にいたのか。大丈夫か？」

「な！？兵藤麤路！！」

「・・・どういう状況だ？」

部屋を見渡せば、目の前には数十人の女性と金髪の男性、奥の方に白音達があり、端の方にメイドがいる。

「（尋常なまでの強さはあのメイドか・・・）」

「・・・リアス。君の眷属はまだいたんだな。」

「ふぎけないで！！そんな奴が眷属はずがないでしょ！？墮天使と通じているのよ！？」

「ほう・・・なら、ここで殺しても問題あるまい！！ミラ！！」

ミラと呼ばれた、着物を羽織った女性は棍をゾロを突こうとするも体が急停止する。体が意志とは関係なく動かなくなり、ミラの本能が警報を鳴らす。「あと一歩踏み込めば死ぬ」と。

「おい、ミラ！何をしている！！」

「いい判断だな。祐斗、白音。今から飯行かねえか？」

「行きます！！絶対に！！」

「僕も構わないよ。」

「な！？二人とも、何を言っているの！」

「そうですわ！これはリアスの婚約を決める大事な「僕／私には関係ありませんので。失礼します。」っ！なら、これならどうか！？」

朱乃が雷を放とうとした瞬間、この場がこれ以上無いまでのプレッシャーに包まれる。放っているのはゾロでは無くメイドだ。その圧にゾロ以外が背筋を凍らし一部の者は腰を抜かす。

「・・・お嬢様、ライザー様。これ以上やるのであれば、実力行使すると先程告げただけです。兵藤麤路様、この度はご迷惑をおかけし誠に申し訳ございませんでした。」

メイドは綺麗な姿勢でゾロへ頭を下げる。この光景に、再び皆が驚愕する。

メイドの名は、グレイファイア・ルキフグス。最強の魔王の眷属であ

り、銀髪の殲滅女王クイーン・オブ・ディバウアという異名もある最強の女性悪魔が人間に頭を下げたのだ。

「構わねえよ。それに、あんたに謝られたところで、そのバカからの謝罪がなけりやなんの意味もないしな。」

「・・・言葉ありません。」

「じゃあな。」

「っ!!待ちなさい、兵藤麤路!!私はあなたに決闘を申し込むわ!!」

「「は?」「」」

ゾロは突然過ぎる事に思考が停止してしまう。それは白音や祐斗、グレイフィアも同じだ。しかし、リアスと何故かライザーも話を進める。

「なるほど、それはいい案だな。リアス、手を貸してやる。俺もアイツに腹が立ったのでな。」

「いつもなら断るところだけど、特別に許可してあげるわ。」

「・・・お二人とも。彼は「ああ、構わねえよ。」え?」

グレイフィアの言葉を遮り、ゾロはリアスの宣戦布告を簡単に受ける。

「し、しかし、あなたは・・・」

「ただし条件がある。これは単なるお遊戯だって事と、そっちの金髪も入れるということだ。行けるか?」

「そ、その程度なら・・・」

「舐められたものだな。人間ごときが、俺たち悪魔に勝てるっても?」

「ああ。この場でてめえを斬り刻んだっていいんだがな。」

「減らず口を・・・!!」

強気な姿勢にこの場一人、疑問を持つ者がいた。それは、先程ドアの前に立っていた金髪の少女だ。何故彼はここまで強く言えるのかが分からない。

そもそも、先程のプレッシャーを何ともないかの様に振舞っていたのだ。只者であるはずも無い。

「・・・では、その様に手配致します。ただし、この決闘にお嬢様が敗れた際には、即座にライザー様と婚約していただきます。」

「な!?!ふぎけないで!私は「リアス。」っ!」

「これ以上我儘を言うなら、あなたを強制的に冥界へ連れて行くことも出来るのよ?次期当主たる者が駄々を捏ねるのはやめなさい。…兵藤麤路様。今回は本当に申し訳ありませんでした。日時は決まり次第、ソーナ様を介して伝えてもよろしいでしょうか?」

「ああ。」

ゾロが後ろを振り向き出ようとした所で、ゾロの後頭部に花瓶が投げつけられ派手に割れる。これには祐斗と白音も驚き振り返れば、憤怒の顔をしたイツセーだった。

「ゾロ、てめえ!!急に入ってきて、勝手なことばっか言いやがって!!」

「…行くぞ。」

「…最低ですね。変態先輩。」

ゾロは相手をする事無く白音達と部屋を後にする。その時、白音がイツセーに向けて放った一言にイツセーはショックを受ける。祐斗はともかく白音は分かってくれると思っていたのだろう。しかし、そんな期待を粉々にされた。

「ゾロ君、大丈夫かい?」

「ああ。なんともねえよ。二人は、破片なんかは大丈夫だったか?」

「…はい。本当にあの人は、貴方と血が繋がっているんですか?とてもそうには見えないのですが…」

「大事なものは血じゃなくて信頼だ。俺とアイツの間に信頼なんてもんは微塵もないさ。」

「あ、あの!!」

「ん?お前はさっきの…」

後ろを振り返れば先程の金髪の少女だ。申し訳なさそうな顔をしているかと思えば突如頭を下げる。

「あ、兄が申し訳ありませんでした!」

「…兄?てことは、お前、あの金髪の妹なのか?」

「彼女はレイヴェル・フェニックス様。フェニックス侯爵家の末妹だよ。」

「…ああ。フェニックスって死なない鳥か。」

「・・・はい。お願いします！どうか、お兄様との試合を辞退してください！」

「断る。」

「な!?!あ、あなた、自分が何を言っているか分かっていますの!?!」

「不死鳥フェニックスだろうが龍ドラゴンだろうが、俺の前に来るなら斬るまでだ。」

ゾロはそれだけ言うのと背を向けて出口を目指し白音と祐斗もそれに追随する。レイヴェルはその背中から目を背けることは出来なかった。

15話

「帰ったぞ。」

「あ！ゾロさん！おかえりなさいっす！」

「お、お疲れ様です！」

白音達との食事を終え帰宅すると、ミッテルトとアーシアが出迎えてくれる。二人とも黒歌の部屋着を着ており、上からは白いエプロンを着ている。

「ああ。ただいま。料理をしたのか？」

「そうっす！アーシアに色々教えてたんすけど、アーシアは料理の才能が凄いつすよ！」

「そうなのか？気になるな・・・」

「そ、そんな事はないですよ！」

アーシアは謙遜しつつも褒められ、照れる顔を隠し切れてはいない。2階の方からは上着のみで下は履いていない黒歌が眠そうな顔をして降りてくる。

「あ、ゾロく。おかえりく」

「おう、ただいま。ミッテルト、飯は出来てるか？」

「バッチリっす！ささ、こっちっすよ！」

ミッテルトとアーシアは早く食べて貰いたいのか、ゾロと黒歌の手を引きリビングへと向かう。

テーブルには色とりどりのご飯が並べられ、黒歌は既に涎を垂らし
ている。

「にやははく♪美味しそうだにやく♪」

「じゃあ食うか。」

「「「いただきます」」」

ゾロは食事と共に今の幸福を噛み締める。家にいた時も幸福ではあったが、イツセーが居た為に安心感はほとんど無かった。しかし、今はそのイツセーが居ない。

しかし、そんなゾロとは対照的にため息をつく者もいる。その者は地下奥深くに鎮座していた。

リアス・グレモリーと同じ紅の髪を持ち、派手な装飾が施された衣装を着ている男性は書類を見て頭を抱えていた。

「本当にリアスには困ったものだね……。まさか、一般人にまで手を出そうとするとは……」

「……その事なのですが、今回の決闘。リアス様とライザー様の勝率は0かと。」

「なんだって?」

「私見ではありませんが、リアス様からの報告と直接見た印象は全くの別です。あの少年は、恐らく魔王クラスであろうとも簡単に降してしまいうやもしれません。」

この情報にサーゼクスは耳を疑う。リアスからの報告では気にする必要も無いと言うものだった。しかし、自身の信用出来る臣下の意見は全くの別。

「……グレイフィア。すぐに兵藤麤路の素性を調べてくれ。君の言っている事が本当ならば、不味い事になるかもしれない。」

「承知しました。サーゼクス様。」

グレイフィアは一礼し部屋を出ていく。サーゼクスはそれを見送って背もたれに強く背中を預ける。

リアスの報告を全て信用していた訳では無い。彼女の眷属に新しく加入した兵藤一誠の事は全て調べあげた。家族構成から過去に裏の世界の者と通じていたかどうかまで。

当然イツセーだけではなく、その両親や弟の事まで調べるも特に普通のどこにでもある一般家庭。

そのはずだったのに、蓋を開けてみれば魔王級をも簡単に降すかもしれないという実力。

「：リアスの我儘もそうだが、彼が敵にならない事を祈るばかりだ。」

サーゼクスがため息を付く中、また別の場所でもゾロの話題が上がっていた。

外見はまるで黄金で出来たかの様な程の輝きを持ち、辺りは神聖な力で満ち満ちている。そして、その高天原の最頂点にある屋敷で八坂がある幼女と話をしていた。

「ふうむ、兵藤麤路かあ……。まさか、この様な人間がいたとはねえ……」

「ええ。最初は私もすぐに力尽きると思っていたのですが、彼らを持って三年。力尽きる所か少しづつ使いこなして来ております。」

「あはははは♪いいね、いいね♪なんとかして日本神話ウチに引き入れたところだよ。」

「それは恐らく難しいでしょう。かの少年は一匹狼。今はパイプで繋がっているとえど、いつ切れるか分かりませぬ。天照大御神様。」

天照大御神と呼ばれた少女は楽しげに笑う。

生まれて何万年と日本を見守って来たが、ここまでの逸材はどこを探してもいなかった。

一本の妖刀ならまだ分かる。しかし、三刀流など聞いた事も無い上、その全てが妖刀。それも二本は誰も扱いきれなかった暴れん坊。

そんな負の遺産とも言える刀を扱うのだ。楽しくならないはずも無い。

「ふふふ……楽しみだよ。僕をどれだけ笑わしてくれるんだろうね？人の子であり、鬼の子でもある兵藤麤路君。」

天照大御神はゾロの写真を見ながら、楽しげな笑いから愉悦顔へと変えたのだった。

16話

「明日?」

「はい。先程、グレイファイア様からご連絡がありました。それと、リアスからの伝言も預かっています。今なら奴隷として許してあげると。」

「バカも程々にすればいいものを……。悪いな、会長。助かった。」
「いえ……。ご武運を。」

ゾロは生徒会室を出て少し考えにふける。それは最初の一撃だ。出来るだけ大きく派手な方がいい。それに場所も専用の物を作るらしいので、どれだけ暴れても構わないという。

「あ、先輩。」

「よう、白音。明日は楽しみだな。」

「その事ですが、私と祐斗先輩は部長からスパイしているかもという事で、出られなくなりました。」

「……。あいつは本当にバカの極みだな。」

「まあ、部長の決めた事ですから私からは特に何も言いません。祐斗先輩も同じ考えの様です。」

「そうか。ま、切るなら早めの方がいいぞ。」

「はい。それとゾロ先輩。今日、お暇なら組手に付き合ってくださいませんか?」

「分かった。後から家に来い。」

「ありがとうございます。」

白音は一礼しゾロの元を離れる。その背中を見て決意する。今回の決闘でエンマ達を使うと。

白音達の扱いへの怒りも当然ある。しかし、それよりも思い知らせてやりたいのだ。リアスと自分の実力がどれ程離れているのかを。平和ボケしたイツセーに現実を教えてやりたいのだ。

ゾロは悪魔勢力を敵に回す覚悟をする。いずれは敵対する予定だったのが早まっただけ。1つの勢力も潰せなければ大剣豪とは言えない。

そして、決闘の日はあつという間に来た。ゾロの出で立ちは黒のブーツに黒のジーパン、上から黒の着物を羽織り赤い帯で着物を括っている。

そして、その腰には鬼徹、村雨、エンマが待ちきれぬとばかりに微かではあるもののオーラを放っていた。

そんなゾロは生徒会室で待機しており、目を閉じて寝息を立てている。

「か、会長。今からこの方は戦うのですよね？何故ここまで・・・」

「・・・本当に余裕なのでしょう。恐らく、リアスとライザーは完全に敗北するでしょう。ライザーは慢心し、リアスは眷属を二人欠いている。これがどれほどまで影響を及ぼすか・・・」

「失礼致します。そろそろ開始時刻です。」

「んっんっ！ああ、分かった。」

ゾロは片目で三人を捉える。その目はいつもとは違い、今から狩りを始める目だった。

グレイフィアが去った後、床に魔法陣が展開され、なんの戸惑いも無く魔法陣の上に立つ。

魔法陣が輝き転移した場所は森の中。ゾロはすぐ様仙術を使って全員の場所を把握する。グレモリー眷属とフェニックス眷属は、ゾロが先程まで居た生徒会室に居ることをすぐ様確認する。

《皆様、今宵はグレモリー眷属、フェニックス眷属と人間である兵藤麤路様の決闘で審判役を努めさせていただきます。グレモリーの使用人、グレイフィア・ルキフグスでございます。今回は、リアス様の通う駒王学園のレプリカを用意させていただきました。》

ゾロはグレイフィアの言葉に耳を傾けつつ、目を閉じて邪気を貯める。エンマは何よりも手のかかる刀。故に先に気を貯めておかなければならない。

《本来ならば15分の作戦タイムがございしますが、今回は決闘の為その作戦タイムは短縮させていただきます。それでは、ゲーム開始です。》

「二刀流!!」

ゾロはすぐ様エンマを抜き仙術を流す。しかし、エンマは当然と言うようにそれ以上の仙術エネルギーを刀身に流し、周りの空気が邪気で汚染される。

ゾロは邪気をこれでもかと纏ったエンマを力強く振るう。

閻魔!!地獄断!!

一瞬の静寂。その静寂を打ち破るかの如く、ゾロの・・・エンマの放った斬撃は駒王学園をモデルとしたバトルフィールドを真つ二つにする。

地獄の底までも断ち斬ると言われるエンマ。高々、魔力で生成した程度の異次元を斬り伏せる事など、容易な事だった。

ゾロの腕はエンマに搾り取られそうになるも気合いで元に戻してすぐ様走り出す。空に少しずつ万華鏡の様な空間が拡がっていくのを見て、残り時間が少ない事を本能で理解する。

観客席では観ている者全てが騒然としていた。なんせ、人間が地を割ったのだ。驚かない筈もない。そんな中には自身の眷属に引き入れようとする者達もいる。

そんな混沌とする中、1つの笑い声が聞こえてきた。幼い声での爆笑。声のする方を見れば魔王の側近であるグレイフィアと巫女服を着た幼女。それを見たサーゼクスは立ち上がり頭を下げる。

「お久しゅうございます。天照大御神殿。」

「やあやあ、魔王君。悪いね、アポ無しで。面白い噂を聞き付けて見に来ただけけど。」

「噂?」

「そう。グレモリー次期当主が人間に喧嘩を売ったって聞いてね。それにしても・・・ふふふ。」

天照はサーゼクスが座つてた椅子に何事も無く座り、足をぶらぶらとさせながら画面を見る。

試合はゾロが生徒会室のドアを蹴破り、ライザーの顔を掴んで外に放り出していた。

「あははははは♪あの子は本当に人間?神ですら近付き難い邪気じゃないか♪それに、あの問題児達を本当に従えてるなんて!これは面白

いなく♪」

「問題児？」

「そうそう。あの三本は北欧の魔剣に劣らない程の乱暴者さ。普通なら僕のような主神級ですら扱えないよ。なんせ、死んでしまうからね。」
「な!?!そ、そんな物、聞いたことが！」

「それはそうさ。なんせ、魔王君が生まれる前に僕自身が封印を施し九尾に管理してもらってたんだ。知ってるはずもない。まあ、存在を知っているのなんて一部の原初神位だよ。」

天照は愉悦に浸る様に画面を見る。サーゼクスとグレイファイア、その他の悪魔達は不気味なものを見るような目で天照を見る。

今、ゾロはライザーのみを滅多斬りにしている。右手に持つ紫色の持ち手の刀で半分にし、口に咥えた刀で首を跳ねる。ライザーの眷属とリアス達も攻撃しているものの、全て避けて只管にライザーのみを攻撃している。

《ク、クソ！しつこいぞ、貴様!!》

《悪いな。俺の取り柄はしつこさなんでな!!》

《ガアア!!》

ゾロは右手で持ったエンマで、ライザーを斜めに斬り裂く。先程まで炎で再生していたものの今度は思いつきり血が吹き出る。

《痛い！痛い痛い痛い!!》

《どうした？もう回復はしねえのか？》

《ヒィー!》

《貴様!!これ以上、ライザー様を傷つけさせはしない!!》

ライトアーマーを身に付けた女性が斬りかかって来るもゾロはやはり避けてライザーの顔面に思いつきりスタンプをお見舞いする。

《ぐふう!!》

「あははは♪容赦無いね。益々、気に入っちゃうなあ♪それにガタイも僕好みだから、食べてみても・・・♪」

《あ、あなたは、何故そこまでお兄様ばかりを狙いますの!?!》

《あ?んなもん、お前らを斬る気がないからに決まってるだろ。》

《な、なんだと!?!》

《俺には女を斬る趣味なんてねえよ。・・・やり合いたいなら大人しく待ってろ。》

ゾロのプレッシャーに全員の背中に冷たいものが走る。本当に女性には斬らないのだろう。しかし、冷や汗が止まらない。

《まずはためえからだな。》

ゾロはエンマ以外を鞘に収め、エンマに仙術を纏わせる。レイヴェル達の目には刀身が黒くたっただけ。しかし、ライザーには全くの別のものが見えていた。

ライザーの瞳に映るのは、あらゆる生物が混ざった様な化け物達を背後に宿すゾロだ。

当然ライザーの幻覚だが、精神的に弱っているライザーにとっては本物しか見えない。

《ま、待て!!お、俺はフェニックス家の悪魔だぞ!!い、今、見逃せば貴様の願いをなんでも叶えてやる!!》

一刀流 魂未狩り

ゾロはエンマを振るうもライザーには全く当たらない。しかし、ライザーは白目を剥いて倒れる。そして、淡い光となって消えていった。

《ラ、ライザー様のリザインを確認。フェニックス眷属、全員のリタイアです・・・。》

《さて、ようやくだな。邪魔は無くなった。》

《ふ、ふん!偉そうに出来るのも今のうちよ!朱乃、イツセー!やってしまいなさい!》

《はい!部長!!》

二人は走り出そうとするも目の前にゾロは居らず、それどころか突如として力が入らなくなり前のめりに転んでしまう。

そして、突如としての感じたことの無い程の激痛。見れば、アキレス腱の部分のみが切られているのだ。あまりの痛みに二人も淡い光に包まれフィールドから姿を消す。

「あくあ。もう、終わりか。それじゃあ僕は帰るね。」

天照は結末を見届けずに煙の様に消える。それを見たサーゼクス

はグレイファイアに指示を出してリアスを強制リタイアさせる。結果はゾロの勝ちとなった。

17話

「消えた？いや、強制的に連行されたか。」

ゾロが刀を仕舞うと同時に、元の生徒会室に戻ってくる。しかし、そこにいたのはソーナ達では無く天照だった。

「やあやあ、兵藤麤路君。いい試合だったじゃないか。まあ、一方的だったけどね。」

「誰だ、お前。」

「僕は天照大御神。日本神話の主神さ。」

「勧誘なら断る。興味がねえからな。」

「あらら。それは残念。まあ、勧誘は諦めるとして。兵藤麤路君：いや、親しみを込めてゾロ君と呼ばせてもらおうか。僕の夫になつてくれないかい？」

「なに？」

唐突過ぎるお願いに流石のゾロも固まる。しかし、天照は間を開ける事無く勝手に喋る。

「僕は今まで色恋沙汰には興味が無くてね。永遠に婚姻はしない予定だったんだが、君の事を聞き実際に目にした事でビビっときたんだ。僕の運命の相手だとね。」

「悪いが結婚するつもりはねえよ。それに、俺は人間として死ぬって決めてるからな。」

「ふふ。なるほどねえ・・・でも、僕は欲しいものは絶対に手に入れるタイプなのさ。必ず、君の心をモノにして見せるよ。」

先程まで幼女の姿をしていた天照は高校生位の身長になりゾロの目の前に立つ。その目は獲物を狙う目をしており、当然ゾロをロツクオンしている。

「僕はずっと君の事を見ている。僕からのアプローチ、見逃さないでね♪」

そう言つて天照は輝きながら消えていく。それに対しゾロは特に何も思うこと無くそのまま帰宅する。玄関を開けた瞬間、そこには黒歌がニコニコとしながらも威圧感を醸し出しながら仁王立ちをして

いる光景が。

「おかえり、ゾロ♪」

「ああ。ただいま。どうかしたのか？」

「どうかしたのかじゃないにや・・・!!」

黒歌はゾロに近付き思いつきりゲンコツをする。異形の膂力だ。普通の人間ならば即死だが、ゾロは頭に大きなタンコブを作って玄関をのたうち回るだけだった。

「痛ってえな!!なにすんだ!!」

「この馬鹿!!どれだけ私が心配したと思ってるのよ!!馬鹿ゾロ!!」

黒歌は大泣きしながらゾロの胸ぐらを掴み思いつきり前後に激しく揺さぶる。ゾロは今回の決闘の事をミッテルトとアーシアにはおろか、黒歌にも伝えていなかったのだ。

黒歌達に心配を掛けない為にと思いやった事だが、黒歌は白音達からその事を聞いて酷く驚いた。

「もう二度と!!こんな事しないで!!返事は!!」

「わ、分かった。そ、その……済まなかった……」

「次やったらこんなんじゃないから!!分かった!」

「あ、ああ……」

黒歌は本気で怒ったためか肩で息をしている。少しして息を整えるとゾロの手を無理矢理引いてベットに投げたと思ったら上着を剥ぎ取る。

「お、おい!」

「黙る!怪我が無いか調べるから!」

黒歌の凄い剣幕にやられ押し黙るゾロ。黒歌は丁寧に体を見るも傷が無いことを見て安心する。

「良かった・・・傷はないにや。さ、今日はとつと寝る。いい?」

「・・・ああ。その・・・悪かった。」

「・・・いいにや。話はまた明日するから。」

そう言っつて黒歌は部屋を出ていく。ゾロはそのまま裸で大の字になって横になる。白音と祐斗の事を心配しているうちに眠気が来て抗うこと無く眠りへ入る。

しかし、ゾロは不思議な夢を見る。どこか知らない場所。周りにはグレーのスーツを着た男性とパイソン柄のジャケットを着た眼帯の男が向かい合っている。

二人とも心から楽しそうにしており、いぎ殴り合うという時にゾロの手に何か柔らかい感触を感じて一気に引き戻される。感触に疑問に疑問を持ち目を開けると、何故か全裸の天照大御神がおり、うつとりとした表情を浮かべており、ゾロの手は小さな胸を触っている。

「あんっ……／＼／まさか、目覚め早々に僕の胸を揉むだなんて以外と助平なのかい？」

「うおおお!!な、なんでお前がいる?!?」

「あははは♪僕は言ったはずだよ?君の事をずっと見ているってね。でもまさかこんな幼児体型でも胸を求めるなんて、やっぱり君は男子おのこなんだねえ。男は皆、胸が好きだなんて言ってたけど本当だったとは。母様の日記は正しかった訳だ。さあ、ゾロ君!僕の胸をもっと堪能していいよ!」

「誰がするか!誰が!つか、服を着ろ!!」

「ノリが悪いねえ……まあいいさ。それは今度してもらおうとして、今日は仕事を頼みたいんだ。」

「あ?仕事?」

「ああ。八坂から聞いてるよ。報酬があれば請け負ってくれと。」

「まあ、内容次第だがな。んで?依頼内容は?」

「まさか、こんな状態で話すのかい?裸の男女が1つの部屋にいるんだよ?どう考えてもピロートークじゃないか。」

「チツ……なら、先に降りてるからとつと服を着て降りてこい。」

ゾロは服を着て先に部屋を出る。残された天照はと言うと、さも当然かのように部屋の物色を始める。しかし、ゾロの部屋には剣術に関する本ばかりで、他には特にこれと言って無い。

そもそも部屋にあるものがダンスとベット、本棚が1つしかないのだ。漁ろうにも漁る事が出来ない。

「ふむ……春画の一つでも置かれていれば好みが分かるんだけどねえ……まさか、その手の物が何一つ無いとは……いや、確かこ

ここには猫又もいたな。」

天照は印を結び、いつもの巫女服へと着替えつつも一人ブツブツと発する。しかし、それでも警戒を怠らないのが神と言えらるだろう。

「ねえ、猫又君。彼はどんなものがタイプなんだい？」

壁の一角が歪んだと思ったら突然黒歌が現れる。黒歌はあの後、少し時間を置いていつものようにゾロと眠ろうとすれば、神のオーラを感知しずっと隠れていたのだ。

「・・・いつから気付いてたにや？」

「最初からさ。僕がゾロ君の部屋に入った時からね。こうみえて高位の神だからね。」

天照はまるでイタズラが成功したと言わんばかりにニコリと微笑む。しかし、そのオーラはほんの僅かに負のオーラを纏わせていた。

「日本神話の主神様がこんな所に何の用にや？言っとくけど、ゾロは絶対に渡さないにや。」

「だろうね。でも僕は必ず手に入れるよ。君より早くね。」

傍から見れば、二人の間で火花でも散っているかのようにも見えるだろうが、相手は最古であり最初の一柱でもある。

目を離さなくともやられるだろうが、黒歌は決して目を逸らさなかつた。天照はそんな黒歌を見て楽しげに笑う。

「あはは♪いいね、いいね♪君の事も気に入ったよ♪さ、下に行こうか。」

天照は黒歌の返事も聞かずに下に降りる。黒歌は力が抜けへたり込むしか出来なかつた。

その頃ゾロはと言うと、普通に朝食を取っていた。裏の新聞を読みながらミッテルトとアジアの作った朝食を頬張っていると、ふとした記事に目が止まる。

「懸賞金か。一、十、百、千・・・6000万\$か。」

「ろ、6000万!？」

「す、すごい額っすー！い、一体、どんな極悪人なのか・・・」

「・・・悪かつたな。極悪人で。」

「「え？」」

ゾロが新聞を見せると、一面に大きくゾロの写真と懸賞金額が乗っていた。これを見たミッテルトは思わず飲み物を吹き出し、アーシアは驚愕した顔をしている。

「ゾゾ、ゾロさん!いい、いい一体どんな悪い事をしたんですか!」「そ、そうっす!いい、今から自首しましょう!そ、そうすれば数年後には出られるかもしれないっすよ!」

「なんもしてねえよ。…まあ、やったとすればあの決闘だろうがな。」「け、決闘!?だ、誰とっすか!」

「リアス・グレモリーさ。」

「!?だ、誰すか!」

「ま、ゾロ君の嫁さ。よろしく、墮天使ちゃんにシスターちゃん。」

「よ、嫁え!」

「はあ…ツツコムのもアホらしい。それよりも、なんで俺に懸賞金が付いたか知ってるか?」

「さあね。ま、考えられるのはリアス・グレモリーしかいないけどね。これで君は絶対絶命という訳だ。ほとんどの悪魔から狙われるだろうね。どうだい?僕と婚姻する気になった?」

「アホか。とつと仕事の話をするぞ。ミッテルト、何か飲み物を頼む。」

「は、はい!こ、紅茶とコーヒー、どちらがいいっすか?」

「うくん…コーヒーを頼むよ。」

「は、はい!」

ミッテルトは初めての来客にガチガチになりながらも、コーヒーを入れて天照に振る舞う。

「んく♪いい香りだね♪墮天使ちゃん、入れるの上手いだねえ。」

「あ、ありがとうございます!」

「んで?仕事つてのは?」

「ああ。駒王町に入ってきた墮天使と聖剣の処分を頼みたいのさ。」

物語は更に加速する。

18話

「なんだ、ミツテルト。聖剣をパクったのか？」

「ええ!?いい、いやいや!や、やってないっすよ!」

「まあ、彼女じゃないよ。聖書に記されし古き墮天使コカビエルさ。」
「コ、コカビエルですか!?で、でも、なんで聖剣を・・・?」

「ま、恐らくあの鴉は戦争がしたいんじゃないかな?まあそれだけなら勝手にやればいいけど、日本神話の憲兵隊が日ノ本に居た痕跡を見つけてね。でも、僕らは悪魔共のせいで人手が足りないから迂闊には動けないって訳さ。」

「・・・つまり、その鴉を斬ればいいんだな?」

「ああ。報酬はなんでもいいよ。お金でも名誉でも地位でも。君の望む物を与えよう。」

「受けても良いが条件がある。報酬は先払いだ。」

ゾロの一言で天照の顔は真剣なものへと変わる。それも当然だ。彼女は主神であり依頼主。ゾロの仕事に対する腕は聞いてはいるもののまだ信頼が足りない。

「悪いがそれは難しいだろうね。例え僕が許可したとしても下はそう行かない。全員が全員、君の事を知っているわけじゃないからね。」

「なに。そこまで高い報酬でもねえよ。二人を駒王学園に通わせてやるだけだ。」

「へえ。それは意外な報酬だね。何か裏でもあるのかい?」

「いやなに。コイツらも学校に通わせてやりたいと思っただけだ。」

「くふふふ・・・あははははは♪やはり、君は面白い!しかし、報酬は後払いの方がこちらも都合がいい。もし、後払いにしてくれるならばびっつきり色を付けよう。どうだい?」

「乗った。それじゃあ、その墮天使の情報を後から送ってくれ。簡単でいい。」

「分かった。それじゃあ僕はもう行くよ。そろそろ戻らないと怒られてしまうからね。」

天照はゾロへウインクをして昨日と同じように居なくなる。二人

はと言うとポカンとした表情で固まっており、ゾロはそんな二人を放置して学園へと向かう。

歩きながら白音と祐斗の強化法を考えていると、後ろからドタドタと走る音が聞こえるもすぐに誰かは分かる。念の為、仙術で感知するとやはりリアス達だ。

「兵藤麤路!!昨日は良くもやってくれたわね!!」

「・・・」

「っ!!てめえ、無視すんじやねえ!!」

イツセーがブチ切れゾロを殴り飛ばそうとするもその拳を小さな手が止める。イツセーがブチ切れた顔で見ると白音が呆れた顔をして3人を見ていた。

「・・・朝から何をしてるんですか?」

「白音!何をしているのよ!!」

「何してるも何も殴られそうになっていた先輩を助けただけです。こんな朝から問題を起こす気ですか?」

「黙りなさい!白音!今日という今日は「何をしています。リアス。」っ!」

全員が声の方を見ると生徒会長であるソーナがいた。それだけでは無い。その後方にはソーナの眷属達である生徒会メンバーもいる。「リアス。何故こんな朝早くから騒ぎを起こしているか説明してくださいよね?」

「そ、それは・・・」

「私はこの学園の生徒会長です。校内で問題を起こすのなら、幼なじみであろうと公平に取り締まります。」

リアスはソーナの眼力に少し後ずさりをする。否、後ずさりすることしか出来ない。ゾロはと言うと歩みを廊下からソーナの方へと変え、近付くにつれて眷属がソーナを守るように構るも、ゾロはそんなシトリー眷属の横を素通りする。

「・・・ゾロ君?あなたの教室は向こうじゃ・・・」

「帰るんだよ。やる気が無くなった。迷惑かけたな、会長。」

「おい、待てよ!お前!!会長に失礼だろう!!」

「よしなさい、匙。」

「しかし、会長！」

ゾロはゆっくりと後ろを振り向き全員を捉える。ソーナはその目を見て背中にゾクリと冷たいものが走る。

ゾロの目は無だった。何にも興味を示していない目。ここまで感情を無にしている人間を見るのは初めてだった。

「うおおおおお!!!」

イツセーは一般人が見ているにも関わらず、セイクリッド・ギア 神 器を出してゾロの顔を思いつきり殴る。周りはパニックになるもゾロは興味のないう目でイツセーを見ており、その目を向けられたイツセーは馬乗りになりゾロの顔を殴り続ける。

「何をしてるんですか!!!」

白音はイツセーを思い切り蹴り飛ばしゾロに駆け寄る。

「ぐへえ……」

「先輩！大丈夫ですか!?!」

「……ああ。痛くもねえ。」

ゾロは血唾を吐きながら鞭を持つ。イツセーは教師や生徒会メンバーに押さえ付けられている。それはリアスと朱乃も同じだった。二人も魔力を溜めていたのだ。

「離しなさい！私を誰だと思ってるの!」

「椿姫！イツセー君を助けないといけないの!離して!」

「……椿姫、リアス達を生徒会室へ。兵藤麤路君、あなたにも来てもらいます。」

「……」

ゾロは無言で玄関の方を目指し、その態度に生徒会の書記でソーナの兵士である匙元士郎は一言言おうとゾロに近付こうとするも白音に止められる。

「!?!」

「やめておいた方がいいです。今のゾロ先輩には何言っても無駄だと思おうので。」

「……匙。放っておきなさい。白音さん、何があったか聞いても。」

「分かりました。」

帰ってしまったゾロの代わりに白音が生徒会室へ連れて行かれ、1時間ほど話を聞かれる。今度、何か奢ってもらおうと思った白音だった。

19話

町ゆく人々はゾロを二度見する。それも当然と言えるだろう。ゾロは白音が止めるまでずっとイツセーに殴られていたのだ。口端は切れて鼻血を出し、左目部分には青痣を作っている。しかも手当ても受けずに学校から出てきたのだ。

ある通行人は二度見し、ある通行人は見なかったように足早に立ち去り、ある通行人は少し悲鳴を上げる。しかし、ゾロは気にせず目的の地へと向かった。

その目的地とは今までの自分を形成した場所である実家だ。玄関の鍵を開け中へ入ると見慣れた靴が二足と見た事のない靴が2足。そして、リビングの方から感じる邪とは真逆の力。

いつでも動けるようにしてリビングのドアを開けると、両親と二人の少女が談笑していた。

片方は栗毛でツインテールの髪型をしており、もう片方は青色の髪に緑色のメッシュを入れているショートカットの少女だ。

四人はゾロを見るや否や酷く驚いた顔をしていた。

「ゾ、ゾロ!?ど、どうしたのよ!その傷は!」

「と、とりあえず救急箱を持ってくる!」

「いや、いい。悪いな、変な時に帰ってきて。」

「イリナ。彼は……」

「え〜つと……」

「ああ、そう言えば会った事無かったわね。この子はゾロ。イツセーと双子の子なの。」

「……この二人から発せられているのが聖なるものか?だとすれば、天照の言つたた聖剣使いはこいつらか……」

「(この男……強いな。)」

青髪の少女、ゼノヴィアは確信した。否、せざるを得なかった。ゾロの筋肉は見せるためのもので無く戦う為のものだと。二人の探り合いに気付かなかった栗毛の少女イリナは立ち上がって帰り支度を始める。

「それじゃあ、おじさん。おばさん。今日はこれで。」

「そう・・・またいつでもいらつしやい。」

「はい！ゼノヴィア、行くわよ。」

「・・・ああ。確か、ゾロと言ったな。」

「なんだ？」

「これを飲むといい。傷が早く治る。」

ゼノヴィアは腰のポーチから錠剤の入った瓶を投げ、ゾロは難なくキャッチする。中にはかなりの量の錠剤が入っていた。

「貰えねえよ、こんなもん。」

「日本で言う、お近付きの印と言うやつだ。君とはまた会える気がするからね。」

そう言い残してゼノヴィアはイリナと共に家を出ていく。ゾロは貰った薬を一応は飲み席へと座る。

「・・・イツセーにやられたの？」

「ああ。いつもの癩癩だ。」

「あいつは・・・」

二人とも頭を抱える。当然の事ながら二人はイツセーへの期待は無いのだろう。二人はイツセーのいい話は聞いた事が無い。それどころか、問題行動しか起こさない

ゾロは二人の心中を察しながらも、奥のスーツケースに気付く。

2、3日所では無い尋常な量のスーツケース。

「旅行にでも行くのか？」

「え？ああ、あれ？そうよ。たまには父さんと羽を伸ばそうと思つて。」

「ああ、そうだ！せっかくなら、ゾロもどうだ？」

「いや、今回は遠慮しておく。二人で楽しんできたらいい。」

ゾロはそう言つて財布から万札を十枚出してテーブルの上に置く。当然、二人は驚いた。

「ゾ、ゾロー！こ、これは・・・」

「俺からの感謝の気持ちだ。こんな俺を育て上げてくれた感謝の気持ちでもある。この金でたまには好きなものでも堪能してくれ。」

「・・・ゾロ。あなた、危険なバイトをしてるんじゃないでしょうね？」
母親はゾロを少し睨むように見つめる。それは怒りでは無く心配から来るものだと思えてくる。しかし
今はまだ話す事は出来ない。

「・・・命に関わる様な事を確かにしている。でも、今はまだ話す事は出来ねえ。だが、近いうちに必ず話す。」

ゾロは母の真剣な眼差しに目を逸らさずに答える。二人は一瞬、同様にしたようにも見えたが言うだけ無駄だと思っただのか諦めるようにため息を着く。

「分かった・・・。だけどな。このお金は受け取れない。これは、ゾロが必死になって稼いだんだろ？なら、自分の為に使いなさい。」

「父さん・・・」

「その代わり、自分の命をあまり軽視しないで。あなたの命は、あなただけじゃないの。」

「・・・ああ。分かった。」

ゾロは財布に金を戻して立ち上がる。しかし、ゾロの目にはほんの少しだけ涙が溜まっていた。自分を心配してくれる者がいる。その事実が嬉しかった。

「・・・今度、俺が住んでる家に来てくれ。紹介したい奴らがいる。」

「ええ。分かったわ。近いうちにお邪魔するわね。」

「でも、その時に話してくれないか？お前が秘密にしている事を。でも、無理には言わない。もし、話せるなら話して欲しい。」

「・・・分かった。」

ゾロはそのまま実家を出る。しかし、扉を開けると見た事の無い女性が扉の横で腕を組んでいた。スーツを着用しており一見クールなイメージの女性。しかし、その身には神のオーラを纏っている。

「いいご両親ですね。貴方のことを心から心配してくれる。」

「・・・あんたは？」

「申し遅れました。日本神話の一寸、ツクヨミノムコト月読命と申します。天照大御神姉様より命を受けてまいりました。こちらはコカビエルの資料にございます。」

月読命と名乗った女性は神聖陣から複数の紙を取り出して手渡す。ゾロはそれを受け取るも月読命の視線が気になった。

「俺の顔になにか付いてるか？」

「・・・いえ。御無礼を致しました。これにて。」

月読命の体は闇となりそのまま消える。これこそが彼女の転移なのだ。月の神。それは正しく闇と同じだった。

20話

月読命は高天原のとある部屋を目指して足早になっていた。従者や他の神々は月読命を見ては逃げるように避けていく。いつもの日常だったが、一柱だけ目の前に立っていた。

「どうした？そんなに足早で。」

「・・・建御雷。タケミカヅチそこをどきなさい。」

月読命が見上げるのはスキンヘッドにアロハシャツと言ったラフな格好をした大男。名を建御雷之男神。タケミカヅチのおかみ天照大御神の義弟である。

「姉貴のところだろ？今はやめとけ。気色悪い顔してっからよ。」

「いつもの事です。」

「ま、俺も姉貴に用があるから行くけどな。」

片方は不機嫌顔で。もう片方は楽しそうに笑みを浮かべながら共に目的地へとやってきた。月読命はノックもせずしに重々しい扉を開ける。そこにはニヤニヤとしながら幾つもの写真を眺めている天照の姿があつた。

「ん〜♪これも良いね♪いや、これも捨て難い…：どれを飾ろうか迷っちゃうね〜♪」

「・・・神話の主神がそんな気色悪い顔をするものではありません。天照姉様。」

「やあ、月読命。お使いご苦労。それで？二人して何の用だい？僕は今、写真選びに忙しいんだ。」

「兵藤麤路とかいうガキのか？何をそこまで入れ込む？」

「言っただろう？見た瞬間にビビっと来たって。」

天照のいつもの態度に限界を感じた月読命は怒りで机を叩き割った。

「何を考えているのです!! あんな人間を神聖な高天原に入れるなど言語道断!! 即刻封印すべきです!!」

「い〜や、ダメだ。封印はしない。いや、出来ないと言うべきかな?」

「あん? 出来ない?」

天照は手に持っていた写真を割れた机の上に置く。写真に映って

いたのは当然ゾロであり、今朝撮ったばかりのものであった。

「ああ。既にゾロ君は妖刀達の呪いが染み付いている。僕でも解呪が手間取る程にはね。」

「ならば、尚更「月読命」っ！」

「僕は彼を封印しない。それに、彼の夢の果てを見たいんだ。あんな人材、二度と現れないだろうからね。」

「・・・分かりました。しかし、私は決して婚姻など認めません。幾ら姉様であろうとそれだけは決して容認する事が出来ません。」

「はあく・・・いつも相手を見つけると五月蠅い癖に、いざ相手を見つければ文句を言う。どっちなのかハッキリしてほしいね。」

「私は全員が納得出来る者を探せと言っているんです！」

「ハッハッハ！そりゃあ無理だろ！それこそ、どつかの主神クラスじゃねえか！」

「あなたは黙っていなさい！建御雷！」

「確かに建御雷の言う通りだ。月読命。君も恋をしてみるといい。僕の気持ち分かるはずさ。さくて！ゾロ君の所に行こうっつと！」

「ちよ、姉様！話はまだ！」

天照は逃げるように人間界へ降りていく。月読命は割れた机の上に乗かれたゾロの写真を手に取り、謎の怒りが込み上げてくる。それを見た建御雷は再び笑いに襲われた。

「・・・何がおかしいのです？」

「いや、だってよ！あの何を考えてるか分かんねえ月読命がここまで嫉妬してんだ！これが笑わずにいられるかってんだ！」

「嫉妬・・・？私が・・・？」

「ああ、そうさ。お前は嫉妬してんだよ。今まで姉貴から貰っていた愛が別のやつに向いてんだ。嫉妬もするだろうよ。」

「嫉妬・・・これが・・・嫉妬・・・」

月読命はNPCの様に自身の手を見ながら繰り返す。それを見ながら建御雷は部屋を退室し、一人となった月読命は突然笑い出す。

「ふくくく・・・！この私が人の子に嫉妬・・・？ええ、そうね・・・。なら、嫉妬の原因を潰すまで・・・!!」

神は人よりも欲に忠実で嫉妬深い。これはギリシヤ神話に限った事ではなく、全ての神に当たる事なのだ。

北欧の主神が知識の為に右眼を犠牲にしたり、今回の天照のゾロに対するストーカー行為も「ゾロを手に入れたい」という欲から来ている。故に月読命の嫉妬も神として当然の事なのだ。

それを知らないゾロは家に帰るなりアジアから治療を受けていた。

「悪いな。助かった。」

「い、いえ！ゾロさん達には助けてもらったのにこんな事しか出来ないの……」

「んなこたあねえよ。充分、助かってる。」

ゾロがアジアの頭を少し荒く撫でるも、アジアは照れつつも嬉しそうな表情を見せる。

「でも、兵藤一誠も最悪っすね！イライラしたからと言って兄弟を殴るなんて！」

「それがアイツなのよ。自分こそが世界の中心って思ってるんですよ。まだ猿の方が賢いや。」

「うんうん、本当だね。僕も実際に見たけど、あれは最悪だ。しかも、ロンギヌス神滅具と来た。覚醒はしてないようだけど。」

リビングで話している中、何気なく椅子に座っている天照。最初はゾロ以外が頷こうとするも声の主に気付き、驚愕する。ミッテルトは驚愕のあまり椅子から落ちてしまったが。

「あ、あんた、いつの間に入ってきたにや!？」

「ゾロ君が元聖女に治療を受けている時だよ。なにやら、面白そうな話をしていたからね。」

「そ、それよりも、ロンギヌス神滅具ってどういう事っすか!？」

「今朝、ゾロ君の写真を撮っている時に遠目から見て気が付いたのさ。二天龍の片割れだね。」

「いや、それ完全に盗撮にや！てか、二天龍!？」

天照の二つの発言にゾロ以外の全員が再び驚愕する。ゾロはと言えば、頭に？を浮かべている様子だった。

「おや？ゾロ君は知らないのかい？」

「どこかで聞いた事はある気がするが忘れたな。」

「い、いやいや！な、何言ってるんすか！神滅具ロンギヌスと言えは神すらも滅ぼせるとんでもない代物つすよ!?そ、それに、二天龍と言えは神すらも恐れたと言われる真正正銘の化け物つす！」

「だが覚醒してないんだろ？なら、心配する必要は無いじゃねえか。」

「まあ、覚醒したとしても警戒は必要無いはずだよ。天龍はそこまで宿主には興味を持たないそうだし。それに、あの弱さなら下手をすれば一生覚醒しないかもね。」

「邪魔になれば斬るだけだ。」

「ちよ、ゾロ！どこに行くにや!？」

「寝る。ミッテルト、アジア。俺の分の昼飯はそいつに食わせとけ。」

そう言い残してゾロはリビングから出て行った。

「なるほどね。情報通りって訳だ。」

「じよ、情報通り・・・？」

「天龍や神滅具ロンギヌスの名前を出せば兄に関心や嫉妬心を持つかと思っただ顔色一つ変えないとはね。本当に興味が無いか、或いはどうでもいいのか。」

「・・・試したってわけ？」

「黒猫君、勘違いはしないでね。僕は全てを知りたいだけさ。ゾロ君の好みから何が嫌い何に興味を持ち何に無関心なのかを。僕はそれほどもだに彼を気に入っているんだ。」

「あ、あの・・・な、何故そこまでゾロさんの事を気に入っているのでしょうか・・・？」

「恋だね。僕は彼に一目惚れと言うやつをしたまでさ。」

「こ、恋!？」

「ああ。まあ、主神としての意見で言えば彼が希代の英雄になれる器だからかな？」

「英雄ねえ・・・ゾロはそんなのには興味無いと思うけど？」

「だろうね。でも、英雄はいつの間にか成っているものさ。望んでな

んてなれやししないよ。まあ、その歴史は闇に葬られるだろうけどね。」
「？何か言いましたか？」

「いや、なんでもないよ。それよりも僕はお腹が空いていてね。何か食べさせてくれないかい？」

天照は目線をミツテルトとアーシアに移す。その瞳はまるで二人の魂までも見透かすかのようだった。

21話

「祐斗の様子がおかしい?」

「はい……。何をするにも上の空という感じで……。」

翌日、学校に来たゾロは昼休み、白音から祐斗に対する相談を受けていた。白音が言うには昨日辺りから突然何かを考え込むようになったと言う。

「……まあ、聖剣だろうな。」

「聖剣……?しかしこの町に聖剣なんて……。」

「昨日、実家に二人いた。聖剣を持った奴らがな。恐らくその二人か、別の聖剣使いに会ったんだろ。今は祐斗の好きにさせとけ。」

「……分かりました。しかし教会関係者が何故……?」

白音はブツブツと呟きながらも色々と考察を初めて自分の世界に入り込む。ゾロはと言えば、何か胸騒ぎがしていた。コカビエルに対してでは無いのは明白だ。

同時期、ゼノヴィアとイリナはとある神社に来ていた。その神社では低級ではあるものの神を祀っている場所。二人がその神社に足を踏み入れた瞬間、ゼノヴィアとイリナの首に刀や薙刀などが突きつけられる。

「な、なによ、貴方達!」

「よせ、イリナ。」

「……教会の犬が何の用だ。ここは、貴様らが足を踏み入れていい場所では無い。」

「存じております。しかし、ここへ足を踏み入れたのは日本神話の主神である天照大御神殿に伝えなければいけないことがあるからです。」

「ならば他所を当たれ。最も、貴様らの様な無礼な輩が入れるところなどありはしないがな。」

「な、なんですって!?!」

「イリナ!……連れの者が失礼を。では、これで。」

ゼノヴィアは一礼しイリナを無理矢理連れて神社を後にする。階

段を降りるとイリナはゼノヴィアの手を解く。

「ちよつと、ゼノヴィア! どういうつもりよ!？」

「それはこつちのセリフだ。上からも敵対するなと言う指令があつただろう。それに先程の警戒は当然のものだ。」

「だからと言って、あんな異教徒に．．．!!」

イリナはゼノヴィアを置いてそのままどこかへ行ってしまう。ゼノヴィアはそれを見るだけにして追いかけてようとはしなかった。それどころかため息を付くしか無かった。

「全く．．．。イリナの奴め．．．。確かにこの町の管理者はリアス・グレモリーだが、その大元である日本神話に許可を取らなければ元も子もないだろう．．．。」

「へえ．．．。教会には君みたいに筋を通す者もいるんだねえ．．．。」
「っ! 誰だ!!」

ゼノヴィアは辺りを見渡すと、樹木の上に巫女服を着た少女が居た。当然、天照である。天照は樹木から降りてゼノヴィアの前に立つ。

「さて、教会の戦士ちゃん。僕に何の用だい？」

「あなたは．．．。」

「君が探していた日本神話の主神さ。」

「っ! ぶ、無礼をしました。我らの管理する聖剣が盗まれ、この町に盗み出した張本人がいるとの事で、この町で活動する為に許可を頂きに参りました。」

「．．．ああ。墮天使の小童の事か。」

「し、知っておられたのですか．．．。」

「ああ。しかし、君たちのセキュリティはどうなっているんだい? 不用心にも程があるだろう?」

「．．．返す言葉も見つかりません。」

「そもそも、この場合はミカエルの小僧が詫びを入れなければ何も始まらない。しかし、君の勇気に免じて許可を出そう。ただし、くれぐれも騒ぎは起こさないでくれよ? 起こした場合はペナルティを課すからね。」

「承知しました。わざわざ、時間を取っていただき、ありがとうございます。」「

ゼノヴィアは一礼し、ここからでも見える駒王学園を目指して歩き始める。そんなゼノヴィアを天照は眺めながらいつもの笑みを浮かべる。

「まさか、あんな人材が教会に属していたとはねえ。ふふふ♪ペナルティは日本神話に所属する事にしようかな♪」

舌なめずりをしながら天照も駒王学園へと向かった。

22話

「ここか……。ん？あれは……」

ゼノヴィアが駒王学園にたどり着き見つけたのは昨日見たゾロだった。ゼノヴィアはゾロの方へ足を向ける。

「やあ。昨日ぶりだな。」

「あ？……。ああ。薬をくれた奴か。昨日は助かった。」

「いや、構わないさ。それより、旧校舎というのはどこだろうか。用があるんだが……」

「……。確か、こっちだな。」

ゾロは記憶を辿りながら歩き、ゼノヴィアもそれについて行く。しかし、当然着くはずも無い。

「……。まさかとは思ったが迷ったのか？」

「……。いや、確かこっちだったはずだ。」

「そこは来た道だが？」

「……」

「……。あなたは何をやってるんですか。」

「白音か。ちようど良かった。」

「そこにいる聖剣使いさんを案内しようとしたんですね？」

白音がそう発言した次の瞬間、ゼノヴィアは後ろに飛び上がり背中に背負っていた白い布に包まれたものへ手をかける。しかし、白音は特に構えるわけでもなく視線はゼノヴィアに向けているだけだった。

「別にあなたと戦うつもりはありません。というより、あなたの仲間はまだ一人いるんじゃないですか？」

「……。何故、君に答える必要がある？」

「あります。先程、栗毛のツインテールの女性が部室に入ってくるなり、突然喚き出してリアス様と絶賛喧嘩中ですから。」

「な!?そ、それは本当か!?あのバカは……!!」

「じゃあ、後は頼んだ。」

ゾロが立ち去ろうとするも白音は咄嗟にゾロの腕を掴む。ゾロが目を向けるとジト目でゾロを見ていた。

「何言ってるんですか？あなたも行くんですよ？そもそも、類まれなる方向音痴なんですからじつとしておいて下さい。」

「チツ・・・分かったよ・・・行けばいいんだろ、行けば・・・」

ゾロは白音の威圧に負けて渋々と言った感じで従う。ゼノヴィアはと言えば、二人の間に入れずに困惑するだけだった。その後、白音主導の元オカルト研究部へと案内されるも、旧校舎に入る前から怒声が聞こえて来る。

ゼノヴィアは顔に手を当て、白音はまだやっているのかという顔をして、ゾロは大きなあくびをする。部室に近付くにつれ、怒声は大きくなり瓶が割れたような音や何か物が壊れた音まで聞こえてくる。

「ここが、リアス様の根城であるオカルト研究部です。」

「案内してくれたことには感謝する・・・しかし、今まで受けたどの任務よりも過酷な気がするな・・・」

「まあ、音を聞く限り、殺し合いに発展してもおかしくは無いですからね。」

ゼノヴィアは面倒臭いというオーラを隠すこともせずオカルト研究部のドアを開ける。中は大惨事という言葉に相応しかった。

恐らく高価であろう飾られていた壺は全て割れ、来客用の長テーブルやソファ等も粉々。部室の全てが廃棄せざるを得ない状況と化していた。

その中央には、リアスと朱乃、イリナが睨み合い、イツセーは言ううとただオロオロするしかなく、祐斗もいたがどこか迷いのある表情で四人を見ていた。

「ゼノヴィア！良かったわ、あなたが来てくれて！今すぐこの悪魔達をつっ!？」

パシンと言う乾いた音が響く。音の原因はイリナの頬だ。ゼノヴィアは怒り心頭のイリナをビンタした。

「何を考えているんだ、イリナ。彼女はこの町の管理者だ。それに喧嘩を売るなど。」

「な、なんで・・・!!だ、だって、この悪魔がイツセー君を・・・!!」「・・・正直に言う。もう、君の尻拭いにはウンザリだ。この任務は私

一人で遂行する。君はヴァチカンに帰れ。リアス・グレモリーとその眷属たち、この度は、私の相方が迷惑を掛けた。本当にすまない。」
ゼノヴィアはリアスに頭を下げる。ゼノヴィアの所属する教会からすれば悪魔へ頭を下げる等、今日への裏切りに近い。

しかし、ゼノヴィアは現在の日本には殆どいない、仁義を貫く女性だ。しかし、リアスはそれで納得するはずもない。

「ふぎけないで!!教会の犬が突然現れたと思えば罵詈雑言の数々!!許せるはずは無いわ!!」

「それは承知の上で非礼を詫びている。本当に済まなかった。」

ゼノヴィアは頭を上げてオカルト研究部を去ろうとするも、そこに祐斗が立ち塞がる。しかし、その瞳は怒りを表していると言うよりも、困惑しているという方が正しかった。

「君は・・・」

「僕はリアス・グレモリー様の騎士^{ナイト}だ。一応ね。そして、君たちの先輩でもある。」

「先輩・・・?」

『『聖剣計画』。聞き覚えはあるだろうか?』

「まさか、生き残りだと・・・!?!」

「そうだ。君は見たところ、古くから教会に携わっている。それを踏まえて話を聞きたい。」

「・・・いいだろう。正直、彼女達とは話が出来ないだろうからね。リアス・グレモリー。今回の件は本当に済まなかった。いずれ、相応の詫びをいれさせてもらう。」

ゼノヴィアは今一度頭を下げてオカルト研究部を出ていく。祐斗もそれに続き、白音がドアを閉めると再び怒号が聞こえ始める。

「みつともない所を見せて済まなかった。」

「いや。イリナから喧嘩を吹っつけたのだろうか?こちらこそ申し訳ない。」

互いに頭を下げてほんの数秒で頭を上げる。ゾロはと言えば祐斗の表情を見ていた。

目の前には宿願であるエクス・カリバーを携えた少女がいる。しかし、自身に教えを乞いた時の切羽詰まった時の表情とは違い、祐斗の顔には怒りと困惑の入り交じった表情が目に見えて分かる。

「では、私達は先に失礼します。本当に、部長がすみませんでした。」
白音は頭を下げてゾロの腕を掴み旧校舎を後にする。ゼノヴィアと祐斗はとりあえず落ち着ける場所で話をする為にカフェへ向かった。

23話

ゾロは家の地下で只管に瞑想していた。セイクリッド・ギア 神 器を使わずに仙術を取り入れる修行だ。しかしそれだけでは無い。ゾロは仙術を使つて地脈に入り込もうとしていた。

「・・・ダメか。」

「どう？」

「ダメだな。入れる気がしねえ。」

「流石のゾロでも無理なものがあるのね。」

「当たり前だ。・・・少し出てくる。」

「ええ。気をつけてにや〜。」

ゾロは黒歌の声に後ろ手を振って応える。

「あれ？ゾロさん、お出掛けつすか？」

「ああ。ちよつと出てくる。」

「分かったつす！お気をつけて！」

制服のまま駒王町を歩く。目的地などは特に無いもののゾロは歩く。しばらく歩いていたゾロだが突然立ち止まる。視線を感じるのだ。

それも複数。

それが単なる視線なら気にも止めないがその視線にはそれぞれに濃密なまでの殺意が込められている。再び歩き出そうとした際に突然斬り掛かられるも、ゾロは余裕を持って避ける。

「おや？避けられましたか。」

「うひゃひゃひゃひゃ！完全に気配を殺していたのになあ！」

「うふふ。でも、次で仕留めればなんの問題も無いわ。」

斬り掛かつて来たのは神父服を着た男二人とシスター服を着た女性。しかし、全員の手を持った得物は見覚えのある代物だった。

「・・・エクスカリバーか。」

「おや？単なる一般人かと思ったら裏の人間でしたか。」

「うっひよお！そいつぁいいねえ！」

「あら。案外好みなのだけれど残念ね。」

三人はゾロを値踏みしたように見下すも、ゾロは不敵な笑みを見せる。

「遊んでやるよ。ちょうど退屈していたところだからな。」

ゾロはトレーニング用の刀を三本抜く。三人は未だに侮った目をしている。ゾロが攻撃をしようと構えた所で見覚えのある二人に先に攻撃される。

「やあ、ゾロ君。」

「少し待たせたか？兵藤麤路。」

「チツ・・・なんで、お前らがいる？」

「通りすがりさ。」

「ふむ、『斬姫』ですか。相手にとって不足無しとは正にこの事ですね。」

祐斗はイカれたテンションをした聖剣使いと、ゼノヴィアはメガネの聖剣使いと、ゾロはシスター服の聖剣使いと睨み合う。

一瞬の無音の後、六人は互いに睨み合っていた者同士で鏢迫り合いが起こる。

ゾロと祐斗の実力ならば鏢迫り合いになる事など決してありはない。しかし、何故起こっているのかと言えば様子見をしているからだ。

ゾロと祐斗は足で蹴りを入れて少し距離を取る。その際にゾロは祐斗を見るが、その顔には怒りに歪んでいた。

「・・・それがエクスカリバーなのかい？」

「ああ、そうさ！お前の様なクソ悪魔を斬るためにはうってつけだよなあ!!」

イカれたテンションの神父が祐斗を斬り付けようと向かって来ても、祐斗は居合の要領で神父をエクスカリバーごと真つ二つに叩き斬った。

「僕たちはこんな物の為に・・・!!」

「あら。これは分が悪いわね。悪いけど、先に引かせて貰うわ。」

シスターはそのまま景色に溶け込む様に消えていく。ゾロはそれを見ているだけで追おうとはしなかった。

「ハアツ!!」

「くっ……!これが『斬姫』ですか……!!私も引かせて貰いましょう!」

「三刀流」

ゾロは腕をクロスして逃げられる前に距離を詰める。

煉獄鬼斬り

「ガハッ……!」

神父は胸にクロススの傷を付けられるも、ギリギリのところでもエキスカリバーで致命傷を防いだ。しかし、エキスカリバーは粉々に砕け力を失う。

神父は壊れたエキスカリバーを捨てそのまま閃光弾で逃げ去った。

「逃がしたか……。しかし、二本回収出来たのは大きい。木場祐斗、兵藤ゾロ。助かった。」

「成り行きだ。祐斗、俺はもう帰るが飯を食って行くか?」

「……うん。そうさせてもらってもいいかい?」

「ああ。お前はどうする?」

「わ、私もいいのか?」

「まあな。だが、暴れるんじやねえぞ。」

「か、感謝する。」

ゾロと祐斗は歩き出し、ゼノヴィアも折れた聖剣を回収して少し遅れつつも二人について行く。

家には直ぐに着いて、ドアを開けるなり美味しい匂いが漂う。三人はリビングへ向いドアを開ければ、黒歌と白音が椅子に座って待っていた。

「あ、ゾロ。おかえり〜って……。なんで聖剣使いがいるわけ……?」

「成り行きだ。」

「先輩、お邪魔しています。」

「ああ。」

「あ、ゾロさん!おかえりなさいっす!ちょうど、今出来上がった所っすよー!」

「っ!せ、聖剣……!」

「ここは魔境か・・・？悪魔に墮天使に人間・・・？」

「まあ、初めて入ったのならそうなるね。アーシアさん、ミッテルトさん、黒歌さん。お邪魔します。」

「・・・まあ、ゾロがいいならいいか。」

その後、アーシアとミッテルトが全員分のご飯をよそってそれぞれに渡す。当然、ミッテルトはゼノヴィアの持つ聖剣にビビり散らかしていたのは言うまでも無かった。

今日の0時に投稿したものはミスです。申し訳ありませんでした。

24話

「なるほどね。ま、それでも聖剣を二本取り返せただけでもラツキーにや。で？祐斗はどうするにや？」

「・・・分かりません。ゼノヴィアの話聞いた時も実際に対峙した時も復讐としての怒りではなく、困惑の方が正直大きかったですし・・・。」

「ま、あの聖剣は急ごしらえで作った所もあるしねえ。」

「「「「え？」」」」」

全員が声の方を向けば、当然の様に天照がソファアに座り寛いでいた。

「急ごしらえってのは？」

「ち、ちよつと待て！何を普通に話を進めようとしているんだ!?!こ、こちらの方は天照大御神様だぞ!?!」

「主神兼ストーリーカーだろ。」

「あははは♪僕にそんな事を言えるなんてゾロ君くらいだよ。さて、話を戻そうか。教会の管理しているエクスカリバーは本物ではない。」

「ど、どういう事つすか!?!だ、だって、エクスカリバーは過去の大戦で砕け散ったって!」

「ああ。その通りだよ。だからこそ、偽物なのさ。」

「・・・なるほどにや。エクスカリバーは折れた際に意思を失ったってわけね。」

「物分りが良くて助かるよ。生物の死とは鼓動が止まることじゃない、意思を失ってからさ。意思を失った聖剣など、単なる剣と同義だからね。」

「ならば僕達は・・・!」

「言葉を選ばなければ、丸つきり無駄だったと言えるだろうね。」

「エクスカリバーが偽物・・・いや、この場合は本物に近い偽物と言うべきか・・・。」

「その通り。ああ、そうだ。ゾロ君。コカビエル一派が動き出した。」

あの鴉共の狙いは戦争らしい。場所は駒王学園。今頃、堕ちた聖職者が二本のエクスカリバーを統合している頃だろうね。」

「お、堕ちた聖職者って!」

「お、お待ちください!二本のエクスカリバーとはまさか!!」

「ああ。君の相棒はエクスカリバーを奪われた。単身でコカビエルの元へ行ったみたいだよ。まあ、生き延びてはいるみたいだね。」

「ふうん……。駒王学園って言ったらリアス・グレモリーの根城。つまり、鉢合わせする可能性は充分あるってわけにや。」

「そういう事さ。僕たち日本神話は今回の一件、手を出さない事にした。もし駒王町が破壊されたのなら三大勢力と戦争をする口実になるしね。」

「だが、お前は戦争をしたくない。というより、関わりたくないわけだ。」

「そういう事さ。依頼は継続している。進むも降りるも君次第って訳だ。」

「やるさ。一度首を突っ込んだんだ。後に引く気はねえよ。お前らはどうする?」

「私は当然行きます。部長の事はどうでもいいですが、駒王町が好きなので。」

「……。僕も行くよ。過去に決着を付ける為に。」

「当然、私も行かせてもらう。」

「ま、私も暇だから手伝ってあげるにや。」

「ふふ♪急ごしらえなパーティーとしては破格過ぎるほど豪華じゃないか。なら、この家と二人は僕に任せてよ。まあ、報酬の一部先払いたさ。」

「ああ。頼んだ。んじゃ、行くぞ。」

そう言つて、ゾロを先頭に四人も続く。アジアとミッテルトは四人の背中を見つめるしか無かった。特に、ミッテルトは自身の弱さを呪うばかり。

グリゴリ時代、どれだけトレーニングをしようとも今以上に強くなれなかった。上司に相談すると、堕天使としてこれ以上は強くなれな

いと、包み隠さずに言われた。だからこそ、ゾロ達が羨ましかった。自分も混ざりたいと思っても混ざれないのだ。

「墮天使ちゃんは随分と熱心な視線を向けるじゃないか。彼女らが羨ましいのかい？」

「っ！は、はい・・・ウ、ウチはこれ以上強くなれないっすから・・・」

「ふむ・・・確かに今の環境じゃ先へは進めないだろうね。」

「か、環境・・・？」

「そう。強くなるには飽くなきまでの食欲さと環境が必要なさ。しかし、酷いことを言うのなら君の墮天使としての強さはもう伸ばせない。それでも強さに拘るのなら『外』を利用すればいい。」

「外・・・？」

「ま、主に言うのなら武術さ。どうだい？」

「や、やりたいっす！わ、私も皆さんを守るくらい強くないたいっす！」

「素直でいい子だね。じゃあ、今はゾロ君達の帰りを共に待つとしようか。」

天照は二人をソファアに座るよう言い、テレビを付けて寛ぎ始めたのだった。

25話

駒王学園は魔法陣によって囲まれていた。理由はコカビエルの襲来によるもの。しかし、現在魔法陣を展開しているのはグレモリー眷属と複数の悪魔だった。

当然、リアスは「自分達が相手をする。」とソーナに抗議を入れたが、ソーナから「たった三人で何が出来るのか？」という当然の疑問に何も言えなくなった。

当然、人数がいれば良いという訳でもない。その上、相手は過去の大战を生き抜いた歴戦の墮天使。成人にもなっていない悪魔が倒せるはずもない。

しかし、それは当然ソーナも分かっている。それを眷属にも話し、「死ぬのが嫌なら参加しなくても構わない」とまで言った。ソーナは主である前に彼、彼女らの命を預かっているのだ。参加しなくとも責めるつもりは無かった。しかし、眷属達は誰も去る事は無かった。

その結果に涙が溢れそうになるのを堪え、駒王学園へと足を進める。グラウンドの上空で退屈そうに座るコカビエルに、奥の方では初老の男性が手に複数の魔法陣を展開させ、その目の前では光り輝く柱。それを守るように、ゾロを襲撃した二人がいた。

「来るのはサーゼクスか？それともセラフォルか？」

「両方です。しかし、その間は我々が時間を稼ぎます。」

「クツクツクツクツ……！その様子を見れば力量差は分かっているよ。うだな。よかろう、貴様の敬意に評して準備運動くらいはさせてやる。」

コカビエルが指を鳴らせば三つの魔法陣が展開され、三つ首の獣であるケルベロスが三頭現れる。

「ケルベロスですか……。眷属達へ告げます！自身の命を最優先に撃退してください！」

「「「了解！」「「「「」」」」」

そこからは激戦だった。二人ひと組となり深追いし過ぎずに連携を取りながら確実にケルベロスを討ち取っていく。それでも多少時

間が掛かるもの。三頭を倒すのに掛かった時間は二十分前後だった。

「はあ．．．はあ．．．」

「弱いな。しかし、弱いなりに考え討ち取ったか。数年もすれば脅威となる．．．が、貴様らにへばっている時間はあるのか？」

コカビエルが再び指を鳴らすとさつきよりも数倍の数の魔法陣が現れ、何十頭というケルベロスが現れる。この光景にシトリー眷属は顔を青ざめるしか無かった。

「な、なんだよ、あの数．．．!!」

「(今の私達では対処しきれない．．．!しかし、誰一人として死なせる事など．．．!考えなければ．．．!!)」

「会長!!避けて!!」

「え?」

ソーナの意識が少しばかり逸れたばかりにケルベロスの顔がすぐ目前まで迫っていた。既に避けられない距離。死という恐怖からソーナは目を瞑る。しかし、10秒経っても痛み等は全くない。

恐る恐る目を開ければ、そこにケルベロスはいなかった。しかし、自身の隣からする吐き気を催す程の血の臭い。強ばる首を無理やり向ければ巨体な断面図があった。

「キャッ!」

思わず腰が抜けるソーナだが、頭では理解する事に必死だった。しかし、その前に後ろから複数人の足音が聞こえてくる。シトリー眷属全員が後ろを向けばゾロ達が普通に歩いてきた。

「ゾ、ゾロ君．．．?」

「よお、会長。悪いがそいつらは貰うぞ。」

「今のは貴様か?見事な斬撃だ。しかし、同時にならどうだ!!」

ケルベロス達は狙う相手をシトリー眷属からゾロ達へと切り替え襲いかかってくる。しかし、ゾロは刀を抜こうとはしない。ゾロの目に迫り噛み殺そうとする二頭のケルベロスは黒歌の掌底打ちとゼノヴィアの剣技によって阻まれる。

「ゾロ。このわんコロは私とゼノつちで貰うにや!」

「済まない、また横取りさせてもらおう。」

「僕は聖劍使いにするよ。」

「私はもう片方の聖劍使いにします。」

「なら、俺はあいつだな。」

ゾロは腰に下げているトレーニング用の刀を抜く。その顔は挑発的な笑みを浮かべていた。

「ほう．．．しかし、最初から王は取れまい。」

コカビエルは両手を叩けば先程よりも大きな魔法陣が展開され、再度ケルベロスが現れる。しかしその大きさは普通のケルベロスの倍であり、数えるのが面倒になるほどの首の数。

「にやつ!?ど、どんだけ首があんのよ!?!」

「まさか、原初のケルベロスか!?!」

「御明答。冥府で退屈そうにしていたのでな。こうして連れて来た訳だ。」

「てめえら!手を出すんじゃねえぞ!!」

口に三本目の刀を咥え一太刀で首を斬り落とす。しかし、ケルベロスは痛みを感じていないかのように他の首で噛み付こうとする中、ゾロは左半身に寄せた二本の刀を口に咥えた一本の後ろを跨がせる異質な構えを取る。

虎狩り!!
とらがり

そのまま刀を振り下ろすとケルベロスの牙と当たり、独特な金属音が鳴り響く。それだけに収まらず自身の何十倍もある原初のケルベロスを後退させる。

「．．．あ?チツ．．．仕方ねえな．．．」

ゾロは刀を全て鞘に納め地面に置く。黒歌や白音、祐斗以外のその場の全員がゾロの異様な行動に一瞬だけ動きが止まるも、ゾロは亜空間からエンマ達を取り出す。

原初のケルベロスは全ての首が復活してゾロに襲いかかるも簡単に躲かれる。

ゾロは鬼徹のみを抜いて口に咥え、左右の手をエンマと村雨と持ち手に逆手で置く。ケルベロスの首が複数噛み付こうとした瞬間、ゆつくりと刀を抜く。

ゾロに襲いかかったケルベロスの首は全て地に落ちる。しかし、刀を抜いた瞬間をソーナ達は一切確認出来なかった。ケルベロスの巨体では無い。速すぎて見えなかったのだ。

しかし起こった事象はそれだけでは無かった。先程まで驚異的な再生能力を見せていたケルベロスは全く再生せず、それどころか全身から血を吹き出して倒れてしまった。

「・・・貴様。何をした？」

「俺の持つてる刀は自己中だな。持ち主の俺の体なんか気にもせずには暴れ回る。」

エンマを持つ右腕は枝のように細くなっており、村雨を持つ左腕には肩までビッシリと隙間なく呪詛が浮かび上がっている。それを気合いで治し、コカビエルに向く。その表情は今の自分がどこまで行けるのか楽しみと言わんばかりの不敵な笑みだった。

しかし、突如として先程まで感じていた莫大なまでの聖なるオーラが突然消え、全員がそこを見れば祐斗が初老の男性の胸を突き刺していた。

祐斗はゆっくりと剣を抜く。今までの恨みを全て置くように。

初老の男性は痛みと今から来る死の恐怖に顔を歪ませながらそのまま息を引き取った。祐斗は剣に着いた血を払いゾロの元へとゆっくり歩いてくる。白音も少し遅れてゾロの元へ辿り着いた。

「復讐は済んだか？」

「・・・一応の決着は着けたよ。後はコカビエルを倒すだけだ。」

「クッククッククックッ・・・！アーハッハッハッハッ！まさかこの時代にこれ程の強者が居たとはな！おかげで俺の計画は丸つぶれだがまあいい。ここまで奮闘した褒美だ。面白い事を教えてやろう。」

「面白い事・・・？」

「ああ。過去の大战中、四大魔王が死んだ事は貴様らも知っているだろう？だが、この時に死んだのは魔王だけでは無い。聖剣使い、貴様の崇めている神も死んだのだ!!」

「「「「「な!?!」」」」」」

この情報に一人を除いて全員が驚愕する。そんな話を一度も聞いた事が無いからだ。なにより、誰よりも神を信仰していたゼノヴィアは信じられるはずもない。

「う、嘘を付くな!!わ、我らが主が既に身罷られているなど・・・!!」
「なら、聖女と呼ばれたアーシア・アルジェントは何故追放された?神の慈愛があつたのならば追放などされなかつたはずだ。」

「そ、それは・・・!」

「眼・耳・鼻・舌・身・意・・・」

「む?」

「人の六根に好・悪・平!! またおのおのに浄と染・・・!! 一世三十六煩惱!!」

「ゾ、ゾロ君・・・?」

「一刀流!! 三十六煩惱砲!!」

「ぬうっ!!」

ゾロは村雨を勢いよく振り、『飛ぶ斬撃』をコカビエルに飛ばす。咄嗟の事と油断していた事もあり避けるのが遅れ左半身の翼を全て斬り落とされ撃墜する。

異形は人間よりも頑丈に出来ている。故に上空から落ちてても軽い打撲、もしくはは無傷。しかし、コカビエルは起き上がると同時に憤怒の目をゾロに向ける。

自分よりも脆く弱い人間の攻撃を油断していたとは言え受けたのだ。最上級墮天使としてのプライドが許すはずもない。

「貴様・・・!!」

「つまらねえ話をグダグダ喋りやがって・・・。長えんだよ、話が。」
「人間風情がア!!」

コカビエルは激昂し手に光の槍を持ってゾロ達の元へ走り出す。

ゾロはと言えば前傾的な姿勢を取ったと思えば、ゆらりの一瞬だけ体勢を崩して回転しながら物凄いスピードでコカビエルを迎え撃つ。

「三刀流 豹琴玉!!」

「喰らうか!!」

手負いと言えど、コカビエルは過去の大戦を生き残った歴戦の墮天

使。紙一重で右手に濃密な光の剣を作りゾロの刀を弾くも横に弾き飛ばされる。

すぐさま体勢を立て直そうと体を一回転するも着地する前に背中を物凄い衝撃が襲う。

衝撃を与えたのは黒歌の掌底打ちであり浮き上がった所を白音の空中前転蹴りで再度地面に叩き落とす。しかし、地面に接触する前に咲き誇る魔剣に全身を串刺しにされる。

「ゴブア！」

「さあ、ゾロ！トリは譲つてあげるにや！」

「頼んだよ、ゾロ君！」

「お願いします、先輩！」

「三刀流!!」

「ふ、ふぎけるな・・・!!お、俺は最強の・・・!!」

「艶美魔夜不眠鬼斬り!!」

上空よりコカビエルに狙いを定めゾロが一気にコカビエルを斬り裂き着地する。その際、咲き誇っていた魔剣達もコカビエルと共に粉々に砕け散る。

「てめえが最強だ?んなもん、閻魔にでもほざいてろ。蛙野郎。」

刀を納め、未だショックで立ち上がれないゼノヴィアを肩に担いでそのまま全員で帰路に着く。

ソーナ達は目の前の事象を信じられず固まるばかり。

こうして、コカビエルの襲来を終えたゾロ達であった。

白音の放った空中前転蹴りは『狂犬の極・翔舞』です。他に書き方が分からずこの様な書き方になって申し訳ありません。

26話

「んっ……ここは……?」

陽光に照らされ、ゼノヴィアは目を覚ます。壁には大きめのアタッシューケースが二つと背負っていたエクスカリバー、日本に来た際のスーツケースが置かれている。

「……そうだ。私は……っ!!」

ブーツとしていた頭が少し時間を置くだけで昨日の事を鮮明に思い出させる。思い出したくもない言葉まで。

「ハア……ハア……」

今までに感じたことの無い尋常な汗。ゼノヴィアはベッドの上で自分を抱きしめ小さくなっていく。今にも心が壊れそうになった時、ドアのノックで意識が全てハッキリしていく。

「し、失礼します。あ、起きていらっしやっただすね!」

「あ、ああ……。君は確か、アジア・アルジエントだったか……?」

「お、覚えててくれたんですね!」

「ああ……。それで、どうかしたのか?」

「朝ごはんが出来たので呼びに来たんですよ。」

「そうか。助かるよ。だが、少し汗をかいてしまっただね。お風呂へ行きたいんだが……」

「それなら、案内しますね。」

ゼノヴィアはベッドから抜けてアジアについて行く。ゼノヴィアが歩きながらキョロキョロとあちこちを興味深そうに見ながら歩く。

「ふふ。わかりますよ、その気持ち。」

「え?」

「教会では中々見られませんでしたから。私もたまにやっってしまうんです。」

「そ、そうか。」

「さ、こちらですよ。」

「すまない。助かったよ。」

ゼノヴィアが脱衣場のドアを開けると、上半身半裸でゾロが歯磨きをしていた。異性の裸を見た事の無いゼノヴィアは恥ずかしさのあまり固まってしまおう。

「な、なななな！」

「ん？なんだ、起きたのか。」

「あ、ご、ごめんなさい！今の時間は誰も入ってないかと・・・」

「構わねえよ。見られて困るようなもんも無いしな。」

ゾロは歯磨きを終えてそのまま脱衣場を出ていくもゼノヴィアは少しの間動けなかった。

「ゼ、ゼノヴィアさん？」

「っ！な、なんでもない！」

ゼノヴィアは恥ずかしさを隠すように脱衣場へ入り、着ていた戦闘服を脱いで、そのまま湯船へ浸かる。浸かった瞬間、ゼノヴィアは今までの疲れが現れたように脱力していく。

「はあ・・・」

しかし、脱力すると同時に再び思い起こされる嫌な記憶。その事実のため息を着くしかない。

「あれは、夢だったのならいいのにな・・・」

「残念だけど、夢では無いよ。」

「っ！天照様！」

「そう畏まらなくていいよ。ここでは身分なんて無いからね。そもそも、君の扱いは食客で僕は不法侵入者だ。」

天照はそう言いつつも、いつものロリボディでゼノヴィアの隣で湯に浸かる。

「ふう・・・。やはり、日ノ本の湯は格別だ。君もそう思わないかい？」

「・・・はい。これまで任務で色々な国を回って来ましたが、この国の風呂は格別です。」

「ははは♪そうでしょ、そうでしょ♪鎖国時代、僕も抜け出して色々な国の湯を堪能したが、一番はやはり日ノ本だったよ。」

傍から見れば会話が弾んでいる様に見える光景だが、ゼノヴィアは

天照大御神に畏怖しか感じなかった。

それもそのはず。一介の戦士と主神がサシで会話することなど、他国ではありえない事なのだ。

「・・・正直、僕は君を甘く見ていたらしい。」

「それはどういう・・・」

「僕の見立てでは、君と相棒は戦死か逃亡すると思っていた。しかし、二人共生き残っている。まあ片方は重症だけどね。それでも大したものだよ。」

「・・・しかし、私は天照様の出した条件を破りました。足りないのは百も承知です。しかし、どうか私の首一つで済ませてはいけないでしょうか。」

「無理だね。そもそも君の首なんて要らないさ。しかし、ペナルティは受けてもらう。君には僕の手足となって動いてもらうよ。」

「手足・・・?」

「もっと簡単に言うのなら、教会を見限って日本神話に来いということさ。当然、拒否するのなら僕は日ノ本にある教会を片っ端から潰す。しかし、君がそれを許諾するのであれば今回の件は許そう。」

「し、しかし、他の神々が納得されるとは到底・・・」

「それは君の仕事だ。なに、簡単な事だよ。ただ只管に強くなればい。時間は1週間。ゆっくり決断してね。」

天照はそう言い残して風呂場を後にする。しかし、ゼノヴィアの心境は穏やかでは無かった。

神の不在を知った今、今まで通り教会を心から信用は出来ない。しかし、だからと言って今まで信じていたものを捨てる事なども出来はしない。

与えられた時間は一週間。長い様に見えるもの、人生の選択と思うと時間が足りなさ過ぎる。

ゼノヴィアは悩みながらも浴室を出て重大な事に気付いてしまう。替えの服を持ってくるのを忘れたのだ。

部屋にスーツケースがあったのは確認している。しかし、その中から着替えを持ってくるのを忘れてしまった。

「しまったな……。このまま取りに戻るか？いや、この格好など……」
ゼノヴィアが別の悩みを抱えてしまった時、ふと廊下の方から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「むう……。黒歌さんったら、起こせていう割には起きないなんて……。せつかく、好きな秋刀魚の塩焼きにしたつすのに……」

「す、すまない！」

「は、はいい!?そ、その声は聖剣使いさん!?ど、どうかされたんすか!」
「い、いやその……。風呂に入ったはいいんだが着替えを忘れてしまつてね……。で、出来れば取ってきて欲しいんだ。紺色のスーツケースに入っている。」

「き、着替えを!?わ、分かりました!す、すぐに取って来るつす!」

廊下に居たミッテルトは慌てているのかドタバタと走っていく。

「良かった……。しかし、あの慌てよう……。まさか、私は怖がられているのか……。?いや、確かに教会と墮天使は長年敵対しているが、なにもあそこまで怖がらなくても……」

ゼノヴィアはミッテルトの慌てように自身が怖がられていると思ってしまう。確かにその理由には一理ある。

しかし、ミッテルト自身はゾロが出てくわしてしまえば欲情して襲ってしまうかもしれないと解釈しただけだった。

せつかく温まったのだから体を冷やす訳にはいくまいと、ゼノヴィアは体に残った水分をバスタオルで吹き飛ぶ。たまたま脱衣場にバスタオルが並べられていたのが幸をなし、体を拭いたタオル以外にも一枚乾いたタオルを体に巻いて地面に座り込む。

考えるのは主の死とそれを隠蔽した教会の事。それ以外にもゼノヴィア自身が姉と慕っている者の事だった。

「……。グリゼルダ姉さん。もしも私が教会から離れたなら悲しんでくれるのだろうか……。?いや、もしかしたら恨まれるかもしれないね……。」

幼少期から共に過ごした姉。ゼノヴィアは教会を離れた際に、どんな感情を向けられるのが怖くなってしまった。

「お、お待たせしました!聖剣使いさん!持ってきたつすよ!」

「つ！す、すまない。助かったよ。」

ゼノヴィアはミッテルトから着替えを受け取り、そのままミッテルト先導の元リビングへ向かう。

リビングの様子と言えば、天照がゾロにくつついてはいるもののゾロはガン無視しながら新聞を読んでおり、黒歌はそれを不機嫌そうに見ているだけ。アーシアの方は人数分の朝食を皿に盛り付けていた。

「よお。目覚めはどうだ？」

「・・・最高とは言えないね。」

「さきー！今日の朝食は秋刀魚の塩焼きつすよ！」

ゼノヴィアの暗い空気を断ち切るかの様に、ミッテルトはハキハキとした声でそれぞれの目の前に朝食が並べられる。

「あ、ゼノヴィアさん。お箸は使えますか？ナイフとフォークもあります。」

「お箸で構わない。しかし、見事だな・・・」

「ほんとだにや。日本に住んでここまで経ってないのにこの腕前は才能としか言いようがないにや。」

「い、いえいえ、そんな事は！」

「そ、そうつす！というか、現代が便利過ぎるんすよ！ちよつとネットで検索したら沢山レシピが出てくるんすから！まあ、ウチとアーシアからしたら大助かりつすけどね！」

「いやはや、それでも凄いよ。レシピを見ただけでここまで作れるなんて。」

「てか、お前はいつ帰るんだ？」

「おや？照れているのかい？そんなに照れなくてもアダツ！」

ゾロは変なことを言う天照に容赦なく拳骨する。この光景にアーシア、ミッテルト、ゼノヴィアは石像の様に固まるしか出来なかった。

唯一黒歌だけは特に何も思っていないのか普通に朝食を摂っている。

「ゾ、ゾゾゾゾロさん!?な、なななな！」

「お前は何バカな事言っつてんだ。」

「くうううう！拳骨なんて父様にやられて以来だよ・・・！」

「にやはははは♪ミッテルト、アーシア。この家に住む以上は慣れる

しかないにや。だって、ゾロの中では上下関係なんて皆無なんだから。それに、今のはこの主神様が悪いにや。」

「むう……。この手の冗談は通じないのか……。次を考えないかね……。」

幸いにも天照も怒っていない様で、ミツテルト達は安堵の息を吐くばかり。天照は何か考え込む様な素振りを見せるもすぐに顔を上げる。

「ああ、そうだ。ゾロ君。報酬の件だがアーシア・アルジエントちゃんもミツテルトちゃんの駒王学園の編入はOKだよ。それと、追加の報酬として二人を僕直属の従者としたから。」

「そうか。分かった。」

「ちよちよちよ、ちよい待ちにや!ど、どういう事!?ミツテルトとアーシアを直属の従者にしたって!」

「言葉通りさ。彼女達二人はこれより僕の直属の従者ということ。まあ、名ばかりだけどね。でも、これならもしも何かあったとしても日本神話の一員として文句を言えるということ。まあ、何も無いのが一番だけどね。」

「し、しかし、それで他の神々が納得するとは到底……」

「まあしないだろうね。でも、主神の直属の部下に手を出せばその後の事は容易に想像出来るだろう?」

「そ、それはそうっすけど……」

「まあ、この事を全勢力に伝えるのは1週間後だけどね。」

「それはお前に任せる。んじゃ行ってくる。ミツテルト、アーシア。美味かった。」

そう言い残してゾロは学校へと向かう。二人はゾロに美味しかったと言われる度心が踊る。

ゼノヴィアと黒歌は目で追うだけだったものの、天照だけはイタズラを思いついたかのようにニヤリと笑った。

27話

天照の話进行思い出しながら、ゾロは通学路を歩く。顔は無表情だったが内心は嬉しかった。

二人は世界を知らなすぎる。

アーシアは聖女として崇められ同世代と絡む事を許されなく過ごし、悪魔を一度治療しただけで異端児として追い出され、ミッテルトは同族からバカにされ蔑まれ続けて今まで生きてきた。

二人とも過酷という言葉だけでは足りない生き方をしてきた。だからこそゾロは二人に普通の生き方を与えてあげたい。

二人だけでは無い。黒歌や白音、祐斗にもだ。ゾロは全員に普通の幸せを与えたいという夢を暮らすうちに抱いていた。

野望とは真逆の夢。それでも抱いたからには見届けなければならぬ。

そんな事を考えながら歩いているといつの間にか学園が目の前まで見えてくる。しかし、いつもの光景とはほんの少しだけ違う。校門の傍で腕を組んでいる女性がいた。

ロングの銀髪であり全身黒の服に身を纏っている。登校している生徒は男女関係なく二度見するほどの美貌。しかし銀髪の女性は興味なさげに目を閉じて何かを待っている様にさえ見える。

ゾロは特に何も思うことは無くそのまま学園を目指して歩く。女性の横を通り過ぎた時、やはり目を開くことは無い。

ガキン

突然の短い金属同士がぶつかったような音。しかし誰も振り向く事は無かった。何故なら誰にも聞こえていなかったのだから。

「てめえ、なんのつもりだ？」

「ふふふ・・・やはり、コカビエルを斬っただけはあるわね。」

金属音の正体はゾロの持つ短刀と女性の白い鱗に覆われた腕。その鱗の連なりはまるで龍のよう。

満足したのか女性は力を抜いて腕を引き上げ、ゾロも短刀を仕舞う。やはり周りは気付いていない素振りだ。校内へ入っていく。

「認識阻害の術式だから見られることは無いわ。最も本気でぶつかり合えば簡単に壊れてしまふけれどね。」

「んで？てめえは誰だ？」

「私は『白の龍』ヴァーリ。あなたの実力に敬していい事を教えてあげるわ。『赤』はもう目覚める。」

「白い龍・・・？赤・・・？」

「また会いましょう。私の『ライバル』、兵藤麤路。」

そう言つてヴァーリと名乗った女性は霧の様に消えていく。

ゾロも何事も無かった様に振舞つて校舎へ入つていく。そしていつも通り授業を受けていたが全く身に入らなかつた。

原因は当然、ヴァーリと名乗った女性だ。たった一度。それも軽くぶつかりあつた程度。しかしすぐに感じた。「ヴァーリは自分と同じ、もしくは超える強さ」だと。

牛鬼に負けて以降、ゾロは見違える程に強くなつていった。しかし、それは同時に同レベルの相手が居ないということ。

広く見ればゾロ以上の強者等山ほどいる。しかし、現在のゾロは学生であり守るべきものもある為、手を出せずにいた。そもそも、ゾロは仕事では無い限り手を出すことは無い。

しかし、チャンスが巡つてきた。牛鬼に負けて以降、初めての強者。自分がどれだけ強くなれたかをようやく測れる。

そんな事を考えているといつの間にか放課後になつていた。帰る準備をしながらヴァーリの事を考えていると教室のドアが勢いよく開かれ、リアス、朱乃、イツセーが入ってくる。

リアスはそのままゾロの元へ一直線に向かつたと思つたら、突然胸ぐらを掴む。その表情は憤怒そのもの。しかし、誰もこの事を気にしていない。

「（今度は頭を使つたつて訳か。）おい、その手をどけろ。」

「ふざけないで!!あなたのせいで、私の評価はボロボロよ!!」

「聞こえなかつたか？その手をどけろ。」

「ゾロ、てめえ!部長になんて口聞いてんだ!!」

「仕方ありませんわ・・・少し躰をしなければなりませんわね。どちら

が上か教えて差しあげますわ!!」

二人が魔力を迸らせた瞬間、認識阻害の術式は簡単に解ける。理由はリアス達の術式が荒過ぎるのだ。これにより、朱乃の手で迸る雷とイツセーの籠手は一般生徒に再度露呈してしまう。

「っ!!兵藤ゾロ!!」

リアス達は逃げる様に教室を後にする。ゾロは全く意味が分からなかった。

「ったく……。なんなんだ、あいつら。」

ゾロは周りの目を気にする事なくそのまま教室を出る。しかし、ドアを開けた所に天照が大人の姿で駒王学園の制服に身を包み腕を組んでいた。

「やあ、ゾロ君。」

「なにやってんだ、お前?」

「一度、この学び舎をじっくり見ておきたくてね。」

「そうか。今から帰るが家に来るか?」

「おや?おやおやおや?あの恥ずかしがり屋なゾロ君からのお誘い?ようやく僕の「来ねえならずとそこにいろ。」ちよ!い、今は冗談だから置いていかないでよ!」

「おい、ひつつくな!」

「いくやくだ〜!僕はこれからゾロ君のひつつき虫として生きていくことに決めた!」

「馬鹿な事言ってねえでとっとと離れろ!」

ゾロは腕にくっついて離れようとしないうちに天照を無理矢理剥がそうとしている最中、すぐそこから見知ったオーラが急いで近付いて来るのが分かる。ゾロが顔をその方向へ向けると、ソーナが息を切らしながら走ってきた。

「はあ……。はあ……。ぶ、無事でしたか!」

「あ?どうしたんだ?会長。」

「あ、あの……。そちらの方は……。?」

「僕は「単なるストーカーだ。」もう、恥ずかしがり屋だなあ、ゾロ君は。」

「は、はあ……。そ、それよりも、リアスは……。」
「どっか行った。じゃあな。」

ゾロは天照を引き剥がしながら玄関へ向かうも、結局家に着くまで天照は離れなかった。

「帰ったぞ。」

「あ、ゾロさん！おかえりなさいっす！」

「そ、それに、天照様!?そ、その格好は・・・?」

「ああ、これかい?似合っているだろう?」

「はい！超、似合ってるっす！」

「そ、そうでした！ゾロさんにお客様が来てます！」

「客?」

ゾロは天照を引き剥がす事を諦め、そのままリビングへ向かうと、漢服を肩から羽織り制服を着た黒髪ショート女性の優雅に紅茶を飲んでいた。

「・・・てめえ、何者だ?」

「流石は『狂犬』ね。私は曹操と言うの。」

「曹操だと?」

「ええ。私は『曹操孟徳』のれっきとした子孫よ。」

「で?その子孫が何の用だ?」

『『狂犬』と呼ばれるあなたの力を知りたくて・・・ね!!』

曹操と名乗った女性は何も無い所から槍を出したかと思えばゾロの心臓部を狙って突くも、三代鬼徹によって簡単に防がれる。

「っ!!予想以上ね・・・!!」

「今日の俺は本当にツイてるな・・・。強え奴に二人も会えるとは・・・!!」

ゾロの寧猛な笑みと曹操の驚きと笑みを見て、アーシアとミッテルトは只管に震えるしか出来ない。正に一触即発の空気。しかし曹操は槍を収める。

「また会いましょう。兵藤麤路。」

「・・・ああ。」

曹操はゾロの横を通り過ぎ家から出ていく。玄関の閉まる音と共に二人は泣きながらゾロに抱き着く。

「うえええええん!!ゾロざああああん!!」

「ご、怖がったつずく!!!」

「泣くんじやねえよ、二人とも。天照、あの槍は神セイクリッド・ギア器か?」

「ああ。神滅具ロンギヌスの1つであり、神をも討ち滅ぼす槍。黄昏トゥルー・ロンギヌスの聖槍。

神滅具の中でも一位、二位を争うほどの凶悪な神セイクリッド・ギア器さ。」

「だが、武器である以上は使用者の力量次第。あの、曹操つてやつは先祖の名前を語るだけじゃねえ様だな。」

「ふふふ。それは、そうでしょう。なんせ、相手は過去現在未来において、最強の使い手なのですから。」

ゾロがりビングの入口を見れば、八坂と九重、黒歌がいた。九重はゾロを見た瞬間、明るい笑顔になり足元に抱きつく。

「久しぶりじやのう!ゾロ!」

「ああ。久しぶりだな。九重。」

ゾロが九重を撫でてしていると泣いていた二人はようやく落ち着き、九重を不思議そうに見る。

「あ、あの、ゾロさん。その子は・・・?」

「こいつは九重。九尾の娘だ。」

「ええ!?!」

「それで?八坂さんが来るなんて珍しいな。」

「僕がお願いしたのさ。今度、三大勢力の首脳会談があつて、僕達日本神話も呼ばれてるんだ。だから、その際の護衛つて訳さ。」

「あ、あの、天照様!日本神話と妖怪勢力つてあまり仲が良くないと聞いたんすけど・・・」

「実際はそうでも無いよ。確かに妖怪との小競り合いはあるけど、そこまで大怪我を追うほどでも無いんだ。まあ、言ってしまうえば互いに喧嘩をしてストレス発散している訳だ。」

「それはそれでどうなのかにゃ・・・」

「ふふふ。しかし、これは両陣営承知の上です。ですので加減は分かっているのですよ。」

「なら、大丈夫だな。それよりミツテルト。今日の夕飯はなんだ?」

「今日は唐揚げっす!天照様とお客様方も食べて行くっすか?」

「僕は最初からそのつもりさ。」

「唐揚げ！母上、私食べたいです！」

「ご迷惑でなければ御一緒させていただきますよ。」

「分かったつす！アーシア、追加で沢山作るつすよ！」

「は、はいい！」

アーシアとミツテルトは台所へ戻ったと思つたら、二人で山盛りの唐揚げの入ったお皿を二皿ずつ持ってくる。そこからは宴のように騒いで朝まで騒ぎ尽くすゾロ達だった。

ところ変わってヴァチカンへ戻ったゼノヴィアは重い足取りで出口へと向かつていた。

「(ふふふ……。まさか、こうも簡単に追い出されるとはね……。)」

ゼノヴィアは上層部へ全て包み隠さずに報告した。その結果、全ての聖剣を没収された上に永久追放されたのだ。この結果に絶望を通り越して笑いしか出なかった。

「ゼノヴィア……！」

「……？グリゼルダ姉さん……！」

ゼノヴィアは目の前から走ってくるシスター服の女性に抱き着く。この女性こそゼノヴィアが姉と慕っている、『グリゼルダ・クアルタ』だ。

「半年ぶりね。ゼノヴィア。」

「ああ。グリゼルダ姉さんはどうしたんだ？」

「任務の報告よ。あなたこそどうしたの？」

「私は……。その……。任務の報告と教会の脱退を……」

「え？」

ゼノヴィアの声は思わず小さくなってしまふ。それもそうだ。孤児だった彼女にとって唯一姉と呼べる存在。どれだけ覚悟しようとも怖いものは怖いのだ。

しかし、グリゼルダはと言えば信じられないといった目をするもいつもの慈愛に満ちた目に戻りゼノヴィアを再び優しく抱きしめる。

「……そう。でもあなたの決めたことなら構わないわ。どれだけ離れていても私はあなたの姉よ。」

「グリゼルダ……。姉さん……!!」

グリゼルダの言葉にゼノヴィアは思わず涙を流してしまう。それから数十分、グリゼルダを抱きしめながらゼノヴィアは泣き続けた。泣き止んだゼノヴィアはグリゼルダとベンチの方へ移動する。

「ゼノヴィア。あなたはこれからどうするの？」

「もう一度日本へ行く。そこで一から始めるさ。」

「そう……。また、会えなくなるわね……」

「大丈夫さ、グリゼルダ姉さん。どこかでバツタリ会うこともある。」

「ふふっ。そうね。」

「……。それじゃあ私は行く。」

「ええ。気を付けてね。ゼノヴィア。」

ゼノヴィアは振り返らずにグリゼルダから次第に離れていく。ゼノヴィアの新たな一歩を踏み出したのだった。

29話

午前四時。まだ皆が寝静まる中、ゾロは一人バーベルで素振りをしていた。しかし、考えるのは昨日出会った強敵二人。

「朝から元気じゃないか。」

「あ？なんだ、天照か。」

「なんだとは酷いじゃないね。ゾロ君。」

大人の姿でゾロの鍛錬を見る天照。ゾロの好みを知りたいのか、黒歌の様な体型をしている。

「たまには真面目な話をしようと思ってね。」

「・・・まあ、聞いてやる。」

ゾロはダンベルを下ろし、近くにあつた椅子を二脚引つ張つてくる。

「ありがとう。」

「んで？真面目な話つてのは？」

「・・・今回の首脳会談後、僕は主神を降りようとかんがえているんだ。後任は僕の右腕であり妹でもある月読命。君も会つたことはあるだろう？」

「・・・ああ。あのスーツの女か。」

ゾロは以前、実家で出会つた事を思い出す。そして、見事なまでに隠された神に軽く衝撃を覚えたことも。

「彼女は要領がいい。僕よりも要領よく問題解決をしてくれるだろう。」

「で、なんでそれを俺に話した？」

「・・・ゾロ君。改めて言う。僕は君の事が大好きだ。僕と結婚してくれないか？」

いつものおちやらけた表情とは全く違う真面目な顔。しかし、ゾロには断らなければならぬ私情がある。

「・・・悪いが今は無理だ。」

「今は？」

「100年だ。俺のもう1つの夢を叶え終わったらお前を娶る。」

「もう1つの夢・・・?」

「なに。アイツらに『普通』を教えてやるだけだ。『普通』に生きて、『普通』に暮らし、『普通』に死ぬ。アイツらにはその『普通』を今まで感じられなかった。」

「・・・なるほど。『普通』か・・・。それは良い夢じゃないか。分かった。100年、君を待とう。」

「助かる。」

「それと、僕が主神を降りた際にはこの家に住まわせてもらってもいいかい?ここは居心地が良い。」

「お前はもう住んでる様なもんだろうが。」

「あははは!確かにね。さて、真面目な話はこれで終わりだ。次は仕事の話をしようじゃないか。」

「仕事?」

「ああ。ゾロ君には僕の護衛を頼みたい。」

「それなら八坂さんと黒歌に頼んだんだろ?」

「ああ。それ以外にも月読命にも頼んだ。しかし、日本神話と三大勢力は言わば敵同士。味方は多いに越した事は無い。」

「分かった。時間は後から教えろ。」

「それともう一つ。教会の戦士ゼノヴィアを先程無事に保護したっていう連絡が来た。数時間程でこの家に来るそうだよ。」

「つまり、教会からは見捨てられたって事だな。」

「だろうね。教会もあれほどの才ある者を見捨てるなんてどうかしてる。」

「同意だな。お前はゼノヴィアも臣下にするのか?」

「そのつもりだよ。僕が直接鍛えようと思っただね。彼女は磨けば化ける。」

「そりゃあ、楽しみだ。」

ゾロは戦闘狂の様な笑みを浮かべるも、天照から見ればそれすら愛おしく見える。それほどまでに天照はゾロに惚れているのだ。

いつも突き放しはするものの最後まで付き合ってくれる優しさ、何事も最後までやり遂げる誠実さ、好意に気付かない鈍感さ、見た目に

反して女性に鈍感なところ。その全てに惚れている。

「これで仕事の話も終わりだ。さて、日課の子作りでもしようか！」

「した事ねえだろうが！」

ゾロにゲンコツを喰らうも、鍛錬場から出ていくゾロの背中にくつつく天照。その姿はまるで恋人の様にも見えた。

30話

「……やっぱり出てこないものね。」

曹操は薄暗く散らかった部屋で書類を見ながら一人呟く。物の散乱具合は異常であり他の者が見ればまるでゴミ屋敷だ。

「相変わらず君の部屋は汚いね。曹操。」

「私は片付けが苦手なのよ。今更でしょ？」

曹操の後ろには白い髪に赤い目、黒のコートを身にまとった青年が曹操の後ろにいた。彼の名はジークフリート。5本の伝説の魔剣を使う剣士。

「それで？なんの用かしら？」

「三大勢力の会談の日にちが決まったらしいよ。しかも、そこに日本神話も参加するとか。」

「そう……！なら、私も行くしかないわね。」

「例の兵藤麤路とかいう人間が参加すると？」

「ええ。彼は参加するわ。必ず。」

「旧魔王派からの文句は絶えないだろうね。」

「大丈夫よ。どうせ、アイツらは全滅だもの。ヘラクレス達に伝えて。会談には私達『英雄派』も乗り込むわ。」

「曹操。何が君をそこまで駆り立てる？僕達は異形にどこまで迫れるかを試したいだけだ。」

「だからこそよ。兵藤麤路は強い。いいえ、強すぎる。それこそ、本気の私とヴァーリと同格。」

「そんな剣士が今まで見つからなかったと？」

「ええ。偶然が重なり続けた結果よ。恐らく主神クラスは自国の強化の為に喉から手が出る程欲しているけどそれは出来ない。」

「日本神話の主神か……」

「ええ。少なくとも天照大御神はコカビエル撃破の前に接触していた。そして、他神話が手を出せないのは戦力が未知数だからよ。日本神話はほとんど情報が無い。天照大御神の本気も含めて全てが謎。」

曹操の言う通りで、日本神話は戦力のほとんどを表に出していない

い。そして、200年の鎖国という歴史もありこの鎖が情報を流さない要因の一つでもあった。

それに、日本神話の神は半分は原初の神であり特に有名所である天照大御神、月読命、建御雷神、建速須佐之男命の強さは不明なのだ。

「全く……。ウチのリーダーは我儘で困るよ。」

「なら、あなたがやってもいいのよ？まとめきれぬのならね。」

「なら、伝達はよろしくね。」

曹操は肩を竦めるジークフリートを背に部屋を出ていく。

時を同じくしてゼノヴィアは再び日本に降り立った。しかし、状況は最悪としか言えない。

隙間なく退魔師や刀を持つ術者に囲まれているのだ。言わずもがな、日本神話の連中。

「なるほど。天照大御神様の予想は的中したか。」

「教会の犬が、よもやまた我らの国に来ようとは。」

「私はもう、教会に所属してはいない。」

「黙れ!!貴様らに奪われたものを全て返してもらおう!!」

『待て。』

野太く威圧感のある声がこの場にいる全員の視線を独り占めする。当然、ゼノヴィアも目を向けるが啞然とするしかない。

巨人と言われても不思議では無い身長に異常なまでの筋肉の分厚さ。そして、なによりも圧倒的なまでの神のオーラ。

『……てめえか。あのバカの見込んだ剣士つてのは。』

「っ……」

ゼノヴィアは喋れない。彼女は戦士だ。今まで強敵とも言える超常の存在を相手に生き残ってきた。コカビエルの時もそうだ。しかし、何もかもがコカビエルとは別格。強さも威圧も。

『……喋れねえか。まあいい。』

巨人は左手に持っていた大太刀を抜く。大太刀の長さは巨人と同じくらいだ。

『そのまま日ノ本の土となれ!!!』

容赦なく大太刀をゼノヴィアへ振り下ろすも、その攻撃がゼノヴィアに当たるとは無かった。ゼノヴィアを守るように闇が刀を受け止めていたのだ。

『・・・どういうつもりだ。月読命。』

「あなたこそどういうつもりです？『須佐之男』。この方は天照お姉様のお客様です。」

『だからこそだろう。あのバカの目利きは確かだが、だからこそ脅威になる。』

「ええ。しかし、私は仕事をしくじる訳にはいきません。今すぐに退きなさい。」

二人が神のオーラを放ちながら睨み合う中、信者達は圧迫感に耐えきれず倒れていく。やがて睨み合いを辞め、須佐之男と呼ばれた巨人は無言で大太刀を納める。

『貴様と殺り合えば俺もただではすまん。とつとつそのガキを連れて失せろ。』

それだけを言い残し須佐之男は霧の様に消えていく。

「・・・あなた達もいつまで寝ているつもり？早く去りなさい。」

信者達は逃げるように気絶した者達を引きずって去る。ゼノヴィアは恐怖で体が動かなかった。生まれて初めて見る神の衝突。ただ睨み合っていただけだというのに、これ程までの威圧感。

「何を固まっているのです。」

「っ！も、申し訳ありません！た、助けにいただき「助けたわけではありませぬ。」え？」

「言ったはずです、仕事だと。仕事でなければ、私もあなたを抹殺にきたでしょう。さあ、行きますよ。」

月読命がゼノヴィアの肩に触れた瞬間、闇が二人を飲み込んだ。

今作での須佐之男のイメージは、角と傷の無いカイドウです。

それと今作では覇気は出ませんが、流桜は出したいと思っています。す。

31話

「こちらです。」

「ここは・・・兵藤麤路の家？」

ゼノヴィアが連れてこられたのは兵藤麤路の家だった。月読命は先程と変わらない様に見えるものの、ほんの少し嫌そうなオーラを出していた。

「さあ、入りましょう。兵藤麤路には話を通っているはずですよ。」

「え、ええ。」

月読命は躊躇無く玄関のドアを開けリビングへと向かう。ゼノヴィアも急いで月読命の後を追うも月読命はリビングのドアを開けた所で固まっていた。ゼノヴィアも月読命の後ろから覗く。

「ゾロ君！やはり僕は100年なんて待てない！とりあえずこれから婚姻の儀を行おう！そうすれば問題は無い！」

「ちよ！何抜け駆けしようとしてんのよ！ゾロ！今すぐ私と子作りすればそうはならないにや！」

「ちよ、く、黒歌さん!?そ、それは、早すぎるっすよ！」

「うるせえ！誰がするか!!てか、お前らはとつとと離れろ！」

「子作り・・・?!」

「ふふふ。賑やかな事です。・・・おや?月読命殿。お久しゅうございませす。」

「八坂。これは一体・・・」

「天照様がゾロ殿に婚約を迫り、黒歌殿がそれを阻止しようとしているのです。」

八坂の話聞きゼノヴィアは啞然とするしかない。一介の人間に主神が婚約を迫っているのだ。驚かない方がおかしい。

呆気にとられていると、月読命は腕に黒いオーラを流しゾロに殴り掛かっていた。しかし、それを察知していた天照は腕に白黄色のオーラを纏い守るように月読命に殴り掛かる。

しかしお互いの拳は触れず、その代わりにオーラだけがぶつかり合う。しかし余波が壁や柱にヒビを入れる。黒歌はアジアとミツテ

ルトを、八坂は九重を守るように背中を向け、ゼノヴィアは吹き飛ばされないように踏ん張る。

「やめ……ねえか……!!」

「あうっ!」

ゾロは吹き飛ばされないように踏ん張りつつ、天照と月読命に仙術を纏わせた両腕でゲンコツをかます。二人はオーラを纏わせる事も忘れ頭を抑えながら地面に転がる。

「人の家でケンカすんじゃないやねえ!やるなら、地下の鍛錬場へ行け!!」

「うっ……す、すまない、ゾロ君。」

「っ……」

「ったく……。んで?お前が日本に来たって事は追い出されたんだな?」

「っ!あ、ああ……」

「で?お前、これからどうするんだ?」

「……私は天照様の下僕となる。」

「なら、僕も約束を果たすでしょう。それじゃあこれからよろしく頼むよ。」

「はい。この身、天照大御神様へ捧げましょう。」

ゼノヴィアは天照の前で膝を着く。天照もどこか満足気ではあったものの、ゾロに殴られた所は痛むのか少し表情が苦い。

「……姉様。少女を迎えに行った際、信者が囲んでおり須佐之男もいました。」

「だろうね。全く、困った弟だ。」

そう言いつつ、ヘラヘラしている天照を見て月読命は溜息を着くしかなかった。

「それと、会談は一週間後の夜0時。場所は先日コカビエルの侵入した駒王学園です。」

「ああ。分かった。助かるよ、月読命。」

「……では、私はこれにて失礼します。」

月読命は再び闇となり消えていく。黒歌達は安堵の息を吐いた。

大変長らくお待たせしました。投稿が遅れた理由としては、スランプとメンタルの低下によるものです。本当に申し訳ございませんでした。

32話

時間が過ぎるのは早いもの。会談の日時を告げられた一週間、色々な事があった。

食客であるゼノヴィアと八坂と九重、不法侵入者である天照を含めた七名での連日によるドンチャン騒ぎ。

ゾロが酒の味を覚えたこと。天照の酒癖の悪さなど。

そして、会談当日。時間にすれば残り五時間の時、ゾロは地下室に居た。今、開発している技の最終確認の為に。三代鬼徹、村雨、エンマの三本を抜いた時、ゾロはとある事に気付いた。

「刃が欠けてる・・・!!」

そう。村雨が少し欠けているのだ。それだけでは無い。ほんの少し、それでも刀にとっては致命傷である刃にほんの少し、ヒビも入っていた。

昨夜、抜刀した時には全く欠けて居なかったのに今日突然欠けたという事実。それも、他者には一切使っていない。つまり、謎なのだ。

「・・・チツ。」

ゾロは諦めて刀を鞘に収めようとするも村雨やエンマから抗議する様に仙術を吸い取られる。結局、三時間程鍛錬に費やす事となった。

「つたく・・・。」

「おや？ようやく終わりかい？」

「ああ。待たせたな。」

「構わないさ。さて、最終確認だけど、会談に参加するのは僕、ゾロ君、八坂、月読命、黒歌ちゃんの五人。ゼノヴィアには二人とこの家を守ってもらおう。」

「承知しました。天照様。」

「さて、時間まではそれぞれでゆっくりしようか。」

その言葉を皮切りに各々がリラックス出来る形をとる。

ゾロはソファで横になり、黒歌は猫となつてゾロの胸の上で丸くなる。八坂は九重と戯れ、ゼノヴィアはミッテルトとアーシアと仲を

深めるために料理を教わる。天照はと言えば魔法陣から大量の書類を出して、異常とも言えるスピードで目を通して捌いていく。

「あ、天照様！そ、その書類の数は・・・？」

「ん？ああ、これかい？仕事さ。今日中に目を通さなければならぬものでね。」

「こ、これを全部!?主神様はやっぱり凄いのじゃ・・・!」

「八坂の娘っ子。心配しなくとも次期九尾は君になる。見慣れておいて損は無いさ。まあ、今日は大分少ない方だけどね。」

九重と話をしながらも目では書類の内容を把握する。天照に言われた事に九重は「嫌だ」というオーラを包み隠すこと無く垂れ流した。時間はあつという間に過ぎ去り、会談開始の十分前。ゾロと黒歌も準備を済ませ月読命と合流した所で天照が転移する為の術式を展開する。

目の前には神聖に溢れた扉が出現しそこを潜ると学園の会議室に到着した。

会議室には、ルシファアの名を継いだサーゼクスと、レヴィアタンの名を継いだソーナの姉である「セラフォル・レヴィアタン」。

金髪と黒髪という不思議な髪色をしつつもコカビエルと同じ墮天使としてのオーラを放つ総督「アザゼル」、以前ゾロに「白の龍」と伝えた銀髪を持つ女性「ヴァーリ」。

金髪のロングヘアーに柔和な顔をした青年ながらもゼノヴィアの持っていた聖剣と同じオーラを放つ神の代行者「ミカエル」、その後ろには以前ゼノヴィアの相棒だったイリナ。

三大勢力のトップが集合する中、今回の事件を説明する為に呼ばれたシトリー眷属全員。

天照は堂々とした姿勢で椅子に座りゾロ、八坂、黒歌、月読命はその後ろに立つ。

「おお、おお。随分と護衛の多いことで。」

「そりゃあそうさ。僕はまだ死ぬ気は無いからね。それに君だって『白龍皇』を護衛に連れて来るなんて随分と警戒してるじゃないか。アザゼルの坊や。」

そこからは特に会話もなくただ開始時刻を待つ。そして、開始時刻ギリギリとなつてリアス、朱乃、イツセーの三人が堂々とした出で立ちで会議室に入ってきた。

「・・・全員が揃つたようだ。これより四大首脳会談を始める。ここに居る者達は全員、神の不在を認知しているものだとする。」

そこから始まったのはリアスとソーナによるコカビエル襲撃の状況説明、動機、その他政治的な話など。関係の無いゾロは地べたに座りそのまま眠りに入った。

天照も天照で欠伸を何度もしたり、退屈そうに頬杖を着いたりなど。月読命と八坂、黒歌は一応話を聞いていた。

会議からはや1時間。流石に腹の探り合いに飽きたのかアザゼルが一言申し出る。

「これ以上の探り合いは結構だ。俺らで和平を結ぼうぜ？」

アザゼルの一言にソーナ達は衝撃を覚えた。長年憎しみ争い合ってきた関係が一気に覆るのだ。

「っ！貴方からその様な提案が出るとは思つてもみなかった。」

「悪魔側からはその提案は賛成です。これ以上、無駄な争いをしていては絶滅するのは目に見えていますから。」

「我々天界側も同じ気持ちです。日本神話側もそうでしょうか？」

「いや？僕達は結ぶつもりはないけど？」

天照の発言に日本神話側以外の全員が驚いた様な表情を見せるが当然の結果ではある。なんせ、この会議中、三大勢力は一度も謝罪の言葉を口にしていないのだ。それなのに和平を結べると思っていたのなら、それは日本神話を馬鹿にしているとしか思えない。

「てめえ！魔王様方が平和になる様に言ってるのに！」

「そうよ！争いが無くなるのよ!?!」

「ほら。こんな風に躰も出来ない様な勢力が居るんだ。そんな所と結ぶ気は無いよ。」

「・・・リアスとその眷属達。退室しなさい。」

「な!?!お兄様！」

「聞こえなかったのかい？早く退室するんだ。」

リアスは下唇を噛みながらも渋々従う。出て行った所でサーゼクスは天照に謝罪した。

「・・・私の妹の非礼、お詫びします。」

「いゝや、許さない。そもそも、坊や達は順序が全て違う。謝罪をするならコカビエルの件からだろう？教会側はその警備の甘さから聖剣を何本も奪われ、墮天使側は危うく戦争を起こしかける。悪魔側に至っては全てにおいて対応が遅い。力量差も見極めきれない馬鹿に管理者など務まるはずもない。」

天照の発言に誰もが言葉を伏せる。それでも天照の口撃は止まらない。

「そもそも話だ、ミカエル。どうして君達、熾天使が誰一人として派遣されなかった？まさか、歴戦の墮天使に高々十数年生きた程度の子供が勝てると思つたのかい？」

「そ、それは・・・」

「あなた！いくら主神と言えどこれ以上「今、僕が話をしているのが分からないのかい？」ヒツ！」

ミカエルの警護であるイリナが口を挟んだ瞬間、天照の神性で会議室に地震が起こる。それだけでは収まらず、窓ガラスは全て砕け、壁の至る所にヒビが入る。

「さて、話を続けよう。次に墮天使だ。コカビエルが戦争狂である事を知っていたはずなのに何故それを放置した？いずれ、この様な事を引き起こす事は容易に想像出来ただろう？」

「いや、しかし・・・」

「ここに来て言い訳かい？そんなものは望んでいない。さて、最後に悪魔側だが・・・ん？」

この場の誰でもない魔力反応。天照と月読命はいち早く気付くと悪魔式の魔法陣が展開されていた。そこから出てきたのは正しく痴女としか言えない格好をした眼鏡の褐色美女。

「な!?あ、あなたはカテレアちゃん!?な、なんで!」

「久しぶりね。セラフォルーにサーゼクス。そして、さようなら!!」

突然、特大の魔力弾を放ち校舎を破壊する。しかし、日本神話側は

月読命が、三大勢力は三人のトップが協力して防御魔力を作成していた。

「おやおや。三大勢力のトップが揃って防御魔力を展開するなんて、堕ちたものね。」

「あれ？ゾロ君は？」

「兵藤麤路なら蹴り飛ばしました。」

「はあ!?な、何考えてるにや!?!」

「おやおや・・・まあ、ゾロ殿なら大丈夫でしょう。」

校舎は瓦礫の山となり、周りには魔法使いと思わしきローブの者に周りを囲まれてピンチのはずなのに、日本神話側は平常運転。この光景にカテレアと呼ばれた女性は激昂した。

「つ!!貴様ら、状況をドゴオオン!!!な、なんだ!?!」

全員が音のする方を向けば巨大な瓦礫が幾つも宙を舞っているのだ。落下した時に砂煙が立つもムクリと起き上がるシルエツトだけが見える。砂煙が止むと段々と分かってくる。激昂していたのはカテレアだけではない事が。

「誰だ。俺の眠りを妨げんのは・・・」

カテレア達は後々後悔する事になる。攻め時期を間違えた。本物の『修羅』を呼び起こしてしまったと。

33話

「天照。どういう状況だ？」

「恐らくテロリストだろうね。全て斬っていいよ。」

「ああ。」

「討ち取れえ!!!」

魔法使いの誰かがそう叫んで攻撃用魔法陣を展開するも手遅れ。

ゾロは三本の刀に邪気を纏わせ、やがて黒刀へと成る。

三刀流 黒縄大龍巻

ゾロが刀を振るった瞬間、三年前に見せた龍巻よりも大きなものが現れ魔法使い達を斬り刻む。

本来の黒縄大龍巻は覇気を纏わせているが、この世界には覇気など存在しない。その為、ゾロは邪気を纏わせた龍巻が魔法使い達に牙を剥く。

「ギャー!!」

「た、助けてくれえ!!」

黒縄大龍巻に巻き込まれた魔法使いからは絶叫が響き渡る。邪気とは毒そのもの。例えどんな小さな傷であろうとそこから蝕み続ける。

何とか難を逃れた魔法使いもかすり傷を負った為か、その部分の肉が一気に腐り始めた。

「これは・・・とてつもない邪気・・・。たった三年でここまで扱いこなすとは流石ゾロ殿です。」

「冷や汗がヤバいにゃ・・・」

「あははは♪あれは神でもやばいねえ♪」

「何を喜んでいるのですか！やはり、高天原に入れる訳にはいけません！」

戦場はゾロのなんでもない一撃で大混乱となった。それなのに日本神話側はとても軽いノリ。

一応味方である三大勢力も空いた口が塞がらないと言う様子だった。

「くっ……！使えない奴らだ!!しかし、貴様らではコイツには勝てない！」

カテレアが手を上に上げた瞬間、中央の方に巨大な魔法陣が展開される。魔法陣からはゆっくりと人型の岩が姿を見せる。

「な!?!まさか、古代兵器ゴクマゴグか!?!起動は無理なはず！」

「ハッハッハ！アザゼル！貴方程度の研究者に動かせるはずはない！それに、この古代兵器には全ての攻撃を無効化させる魔法を何百重にも掛けている！」

嘘とも捉えられる発言だが、あの自信からするに本当だと思ってしまう。カテレアは腐っても旧時代の魔王の子孫。その力は魔王クラスにまで及ぶ。しかし、唯一人獰猛な笑みを浮かべている者もいる。「おい、天照。手を出すなよ。あの木偶の坊は俺が斬る。」

エンマと村雨を抜きそう言い放つ。黒歌はヤレヤレと言った感じでゾロの隣に立つ。

「天照、八坂。悪いけど、私はあのおばさんをやるにや。月読命って言ったかにや？私も分もよろしくにや。」

「ゾロ君、黒歌ちゃん。好きに暴れなよ。雑魚はこちらでなんとかしよう。」

黒歌とゾロが歩み出した瞬間、古代兵器ゴクマゴグは黒歌に狙いを付けて巨大なパンチを仕掛けるもゾロに難なく防がれる。

「悪いな、デカブツ。てめえの相手は俺だ!!」

ゾロが受け止めている間に黒歌は仙術で空を飛びカテレアに攻撃を仕掛けてくる。

「くっ……！転生悪魔風情が!!」

「おばさんだからって、そうカッコしたらモチないわよ?」

「っ!!貴様ア!!」

カテレアは再度激昂し攻撃を開始するも、悉く避けられる。魔王の家系である自身の攻撃を全て避けられた事により更に怒りで頭に血が上る。

黒歌が全て避けられているのは、ただ単にカテレアの攻撃速度が遅いわけではない。仙術の初歩的な技術である『感覚掌握』というもの。

異形の攻撃は殆どがオーラを纏うもの。しかし、必ずしも空気中に漏れるもの。仙術を扱う者は空気中に漂ったオーラを読み解きどこからどの様な攻撃が来るのかを把握出来る。

仙術使いが一番最初に習う超初歩的な技術ではあるものの、極めれば空気を伝って相手の感情すら読み解けると言われる。

「クソッ！クソッ！クソッ!!何故当たらない!!」

「アンタのオーラは無駄が多いのよ。今度はこっちの番にや!」

黒歌が指を鳴らした瞬間、カテレアの四方八方に現れる無数の魔法陣。魔力、仙術、妖術、その三種類のミックスとありとあらゆる術式。その数、約数百。そして放たれるのは凶悪的な数の暴力。

約三十秒程野フルバーストではあったものの、カテレアはその全てを防ぐ事は出来ずに落下していく。間髪を入れずに魔法陣から鎖を出現させ、絶対に動けないようにグルグル巻きにして動きを完全に封じた。

一方ゾロはゴクマゴグと戦いを続けていた。しかしカテレアの言っていた事は本当の様で、先程から飛ぶ斬撃を入れているにも関わらず全く斬り傷が付かない。

そして何度目かの振り下ろし。ゾロは刀で再度受け止めるも、ゴクマゴグの口が突如として開いた口の中にはガトリング砲と思わしき兵器が三門現れる。

「銃!?!」

ゾロはゴクマゴグの腕を弾き飛ばし、そのまま三門から同時に放たれる銃の対処へ移る。しかし、いくらゾロと言えど全てを弾く事など出来ない。

頭にカスリ、腕を数発貫き、足を撃たれる。一分という常人なら生き残る事の出来ない時間を生き残ったと思えば再び巨大な腕が高速で振り下ろされ砂埃がゾロを隠す。

「ゾロ君!!」

未だ動けないソーナはゾロが押し潰されたと思いきその責任が一気にのしかかってきた。自分が動かなければならないのに動けない。

そのせいでゾロが死んだ。そう思い込むのもつかの間、巨大な建物が落下した様な轟音。煙が晴れるとゴクマゴグの振り下ろした腕は切断されたような断面を見せていた。

「・・・てめえのビックリ箱にはもう飽きた。これで終わりだ。」

ゾロは鬼徹を咥え当然の様に邪気を纏わせる。

「九山八海 一世界 千集まって小千世界 三乗結んで 斬れぬ物なし!三刀流奥義!!」

ゾロは刀を回し、そのまま空中蹴り上がる。ゾロには空中で戦う術は無い。しかし、いざれ出てくると想定し、独学で『六式』の一つである『月歩』を習得した。

ゴクマゴグ胴体部分まで駆け上がるとそのまま一直線に駆け出す。

一大・三千・大千・世界!!

一瞬の静寂。ゴクマゴグは上半身と下半身が離れるも未だに停止する様子は無い。ゾロはまずエンマで下半身を中央から真つ二つにした後、そのまま踏み台にして上半身に迫る。

「村雨流!・蠱毒!!」

村雨を勢い良く振るう。たった一振の斬撃から複数の飛ぶ斬撃を飛ばし空間ごとゴクマゴグの上半身を木っ端微塵に斬り落とした。

戦いは5分を経たずに決着した。

34話

ゾロがゴクマゴグを斬り、黒歌がカテレアを倒した後、テロリスト達はすぐさま殲滅させられた。そもそも、テロリスト達は油断していたのだ。

事前情報で三大勢力と日本神話の会合がある事は知っていた。しかし、護衛に月読命、黒歌、ゾロ、八坂がいたのは予想外。しかし、カテレアという魔王クラスが居れば楽に突破出来ると踏んでいたからだ。

それに、ゾロはそこまで有名では無い。それどころか無名も無名。裏の世界では懸賞金が10億程掛けられて初めて認知される。6000万程度では雑魚としか認知されないのだ。

名も知らぬ剣士に最終手段をいとも容易く潰された。あらゆる耐性を付けたにも関わらずだ。

「司令塔が崩れたらここまで混乱するなんてね。」

「姉様。これ以上の長居は不要です。参りましょう。」

「だね。月読命、八坂、黒歌ちゃん、ゾロ君。今日はドゴオオオオオン!!ん?」

「なんだ・・・?」

ゾロが瓦礫を吹き飛ばして既に数十分は経過している。それなのにとてつもない粉塵が舞っている。即ち、誰かが物凄い勢いで叩き付けられたのだ。

粉塵が収まるとそこには、前回と形の違う籠手を付けたイツセーが血を吐きながら倒れていた。

「あれは赤龍帝ブーステット・ギアの籠手・・・。ようやく覚醒したんだ。」

「おい、小僧!どうした!」

アザゼル達三大勢力のトップはすぐさまイツセーに駆け寄る。しかし、日本神話側は上空を見上げていた。そこには背中から純白の機械的な翼を展開したヴァーリがつまらなさそうに見下ろしている。

「おい、ヴァーリ!どういうつもりだ!」

「どうもこうもないわ、アザゼル。私はリアス・グレモリーとバカ二人

に因縁を付けられたからやり返しただけよ。」

「なんだと・・・?」

「心配しなくてもいいわ。殺してはいない。弱すぎて殺す気も起きないもの。」

次に目を向けたのはゾロだった。まるで何かを期待しているかのような目線。

「兵藤ゾロ。私と一緒に来て。その方があなたの夢の為よ。」

「断る。」

「え?」

「確かにてめえといりゃあ、すぐ叶うかもしれねえがそれじゃつまんねえだろ。」

「・・・そう。まあいいわ。」

ヴァーリは地面に着地したと思った瞬間、高速でゾロに近付きストレートを打つも鬼徹で受け止められる。

「なら、殺し合いましょうか!!」

「それなら大歓迎・・・だ!!」

ゾロはヴァーリを弾き飛ばし、鬼徹のみを構える。その際、黒歌に目配せをして駆け出した。意味を理解した黒歌が天照達を結界で覆う。

「なるほどね。サシでやりたいって事だったのか。」

「ええ。ゾロも案外戦闘狂だからにや〜。」

「はあ・・・付き合っていないらけません。私は帰ります。」

「天照様。私も一足先に帰らせてもらいます。娘が待っていますゆえ。」

「ああ。二人とも、今日はありがとう。」

月読命と八坂は一足先に居なくなるも、ヴァーリとゾロの戦いは少しずつ激しさを増す。まだお互いに本気を出していないとは言え、中級悪魔程度なら既に目で追えない速さだ。

「ああ!流石ね!」

「そっちょこそな!」

互いが攻撃を弾き、距離を取る。ヴァーリは翼から広がった純白の鎧を纏い、ゾロはエンマと村雨を抜く。

ヴァーリは素手で殴ろうとし、ゾロは三本の刀で受け止める。一瞬の静寂。次の瞬間、とてつもない爆風がギャラリーを襲う。

黒歌はすぐさま防御魔法陣を展開し天照を守る。三大勢力もギリギリ間に合ったようだ。

「おいおい・・・！アイツ、本当に人間か!?ヴァーリとやり合うなんて・・・!!」

「あれが今代の白龍皇ですか・・・」

「あつちは随分と真剣にや。」

「それはそうだろうね。人間と異形の戦いなんてほとんどは一方的さ。異形が力で圧倒するか、人間が技術で圧倒するか。しかし、ゾロ君は力で渡り合っている。それも白龍皇相手にだ。それにしても、ゾロのあの顔はとても嬉しそうだ・・・。初めて見た顔だ。」

「それもそうよ。だって、ゾロの周りには同程度の強さを持つ異形なんて居ないもの。」

ヴァーリの方はマスクで顔が隠れている為見えないが、恐らくはゾロと同じように満面の笑顔なのだろう。否、そうとしか思えない。

「フウ・・・一剛力羅！二剛力羅！」

ゾロの腕は異常なまでに筋肉で盛り上がる。そして後ろを向き刀をクロスで構えた。

「さあ、もう一度力勝負と行こうじゃねえか!!」

「フフフ！ええ、乗ってあげる!!」

「三刀流！二剛力斬!!」

二人の力が再度ぶつかり、またしても爆風が吹き荒れる。それだけでなく、学園の外へ影響を出さぬように展開している結界にも大きなヒビが入る。

「(コイツ・・・!)」

「(押し戻される・・・!!)」

お互いに遠くまで吹き飛ばされる。ゾロは校舎の方へ、ヴァーリは結界の方へと。ヴァーリの鎧は至る所にヒビが入り生身が見えている部分さえある。

ゾロも校舎の方から現れると、打撲や切り傷が無数にあり、頭から

は血を流している。制服もボロボロでもはや機能を果たしていない。それでも二人は満面の笑みを絶やさない。

「ああ・・・こんなに楽しい闘いは初めてよ。」

「俺も久しぶりに本気を出せそうだ。」

二人が駆け出そうとした瞬間ゾロには二つ、ヴァーリには一つの魔力弾が飛んでくる。しかし、二人にとっては簡単に見切れるもの。

ヴァーリは裏拳で弾き、ゾロは斬り捨てる。全員が飛んできた方を見ればボロボロのリアスと朱乃、既に瀕死のイツセーが片腕を突き出していた。

「ゾロ、てめえ!! 邪魔すんじゃねえ!!」

「この裏切り者!! 私が消し去ってあげるわ!!」

「いくら白龍皇と言えど、私達が力を合わせれば・・・!!」

サーゼクス達は不味いと冷や汗を垂らし、黒歌と天照は同時に溜息を着いた。なんせ、二人の顔から一切の笑みが消えたのだ。

ヴァーリは正に神速と言える速さでリアスと朱乃の方へ飛び出した。

「フンツ!!!」

「カハツ・・・!」

「アグツ・・・!」

ヴァーリは二人の腹に正拳突きと蹴りを数発入れ、ゾロはエンマに邪気を極限まで吸わせ飛ぶ斬撃でイツセーを斬る。

「・・・邪魔しやがって。」

「・・・本当ね。冷めてしまったわ。」

「なら、私達が温め直してあげましょうか? ヴァーリ。」

二人が顔を向ければ曹操率いる英雄派が悠然と歩いてきた。

35話

「お前は……」

「あら、曹操。なんの用かしら?」

「分かっているくせに。兵藤麤路と一戦交えようと思つて来たのよ。……でも、これじゃあ楽しめそうにないわね。」

曹操は槍を肩でトントンとする仕草を見せ、三大勢力へ目を向ける。全員、曹操の持つ槍を警戒しているのだ。神すら屠れる武器。そんなものを警戒しないはずも無い。

「なら、私と遊んでもらいましょうか。ちやうど苛立つてる所なの。」
「ふふ。それは面白そうね。」

ヴァーリと曹操が戦意を高める中、ゾロは刀を鞘に収め天照と黒歌の元へと歩き出す。それは、「曹操とヴァーリ以外には興味が無い」と言っているようなもの。

「っ!!オイオイ!どこ行くんた、テメエ!!」

「帰るに決まつてるだろ。」

「っ!!テメエ!!」

曹操のチームで一際目立つ巨体の男、『ヘラクレス』はゾロの態度に苛立ち神セイクリッドギア器『巨人の悪戯』を顕現させる。両腕に設置されたミサイルを二発ゾロへ向かって放つ。

ゾロが溜息を着きつつも振り向きエンマを抜くと、不規則に動くミサイルが重なった瞬間を狙い斬撃を放った。

当然、斬れたのはミサイルだけでは無く未だ攻撃の衝撃から立ち直らないヘラクレスにまで飛ぶ予定だったが、巨大な剣を持った青年に弾き飛ばされる。

「っ!!グラムでも断ち斬れない斬撃なんて初めてだよ……!!」

「ほう……。エンマの斬撃を防いだか。やっぱり気が変わった。遊んでやる。」

ニヤリとゾロが笑みを浮かべ、英雄派も全員が構える。黒歌や三大勢力も参加する様で正しく一触即発の空気の中、突如としてとてつも

ない神のオーラが全員を襲う。

「にやにや!? な、なによ、このオーラ!!」

「あちやく・・・。流石にはしやぎ過ぎだったようだね。」

結界が粉々に砕け散り、神々しいオーラとゾロをも超える邪気が駒王学園を支配する。

「くっ・・・! おい、セラフォルの妹とその眷属! 絶対にアレを吸うんじゃねえぞ!!」

「なんて瘴気なの・・・!!」

皆が驚いている中、オーラは次第に人の形を成していく。しかしそれだけでは無い。確かに人の形ではあるが大きさが異常なのだ。はつきりと姿を見せた時、そこにいたのはゼノヴィアを殺そうとした日本神話の神、『須佐之男』だった。

『おい、天照。どういうつもりだ?』

『どうとは?』

『このくだらねえ会談の事だ。まさか、このバカ共と手を組む・・・なんて事はねえよな?』

『当然さ。もし組んだとしても超最低限の友好条約のみ。』

『それを聞いて安心した。・・・で、ソイツがお前の惚れ込んだ剣士か。』
「っ!」

突然の名指しにゾロは思わず構える。今まで色々な敵を斬り伏せて来たゾロでも勝てるイメージが全く浮かばない。浮かぶはずも無い。

「須佐之男。日本神話の主神として命ずる。今日はこのまま高天原に戻れ。」

『なんだと?』

「僕は戦争を吹っかけに来たわけじゃ無い。それは分かるだろう?」

天照は何時もの飄々とした態度はどこに行ったのかと言いたくなるほどの声音。

『だからどうした? 俺は戦いたくてウズウズしてんだよオ!!!』

腰に下げた超大太刀を抜き天照目掛けて振り下ろす。天照もその攻撃を弾こうとした瞬間、ゾロが割り込み須佐之男の攻撃を止める。

『ヌツ!?!』

「「「なる?」「」」」

この光景にはあの天照でさえも目を見開いた。須佐之男の攻撃は明らかに手を抜いていた。だからと言って、そこらの傭兵が止められるはずはない。それどころか、この場にいるアザゼルでさえも重症を負う。それはゾロの足元に出来たクレーターを見れば一瞬で分かること。

「くっ……!!ぬおおおお!!!」

気合いと共に須佐之男の超大太刀を弾き返す。しかし、当然無傷とは行かない。須佐之男の攻撃を真正面から受けた事により腕や足の肉が弾け飛び血を流している。それだけに留まらず内臓もやられたのだらう。立ちながらも吐血が止まらない。

『加減していたとはいえ、俺の攻撃を止めるところか弾き返しただと……!?!』

「ハア……ハア……。あんな攻撃、屁でもねえよ……!!」

『クツクツクツ……クハハハハハ!!おもしれえ!お前、名前は?』

「兵藤……麤路……!!」

『覚えておこう。おい、テロリスト共!!今の俺は機嫌がいいから見逃してやる!!とつとと消え失せろ!!!』

曹操を除いた英雄派へ向けて莫大なまでの神のオーラを纏ったパンチを放つ。その瞬間、ヴァーリと曹操を含めた英雄派の気配が諸々消え失せた。

『天照、今日の所は従ってやる。』

神のオーラが三度漂ったかと思えば須佐之男は姿かたちも消え失せ、充満していた邪気も嘘だったかのように霧散した。

「ゴフツ……」

「っ!ゾロ!」

「ゾロ君!なんて無茶を……!!」

天照と黒歌はすぐさまゾロに駆け寄り転移を発動させる。

本来ならば和平会談とテロリスト襲来で終わるはずだったものが、これ程までの被害を引き起こした。三大勢力はほとんど何も出来無

かったという恥を晒し会談は終結した。

36話

ゆっくりと意識が浮上する。目が覚めれば見慣れた自室の天井だった。

「俺は・・・っ!!」

言葉を発した瞬間、身体全てを激痛が襲う。戦闘時にも感じた事の無い痛み。身体どころか指一本、痛すぎて動かす事の出来ない。それどころか、呼吸すら辛く感じる痛み。

痛みを感じることに感覚もまた意識を取り戻す。大きめのベッドの左隣には黒歌が、右隣にはアーシアがスヤスヤと寝息を立てて眠っており、ゾロの上にはミツテルトが抱き着くように眠っている。ゼノヴィアも部屋には居たが椅子に座り足を組んだまま眠っていた。

「やあ、おはよう。ゾロ君。」

「天・・・照・・・!」

「辛いだろうから動かなくていいよ。さて、まず君が眠っていたのは3日だ。その間のことを色々と話しておこうか。」

それから語られた、ゾロの知らない3日間は世界を確実に進めていた。

一つ目、三大勢力と日本神話の間で和平が結ばれた事。

二つ目、カオス・ブリゲードの団と言うテロリスト集団が全勢力に広まった事。

三つ目、ゾロの存在を全勢力に知られた事。

四つ目、天照が日本神話の主神を降りその位置に月読命が座ったこと。

その他にも色々あったが世界を動かす程の話しではなかった。そして現在の天照のポジションは主神から駒王町の管理者となっている。

「なるほどな・・・。俺が寝ている間に色々動いてた訳だ・・・。ヴァーリと曹操はどうした?」

「あの二人に関してはテロリストで確定だろうね。そしてお互いにチームを持っている。頭目は『無限の龍神オーフィス』さ。聞いた事位はあるだろう?」

「無限の体現者ってやつか……。」

ゾロは黒歌達を起こさないようにゆっくりと立ち上がる。天照から話を聞いている間に痛みにも慣れてきた所だが、まだまだ本調子には程遠い。

「……君の体はどうなっているんだい？」

「知るか。」

ゾロは部屋を出てキッチンへと向かった。その間、思い出すのはヴァーリとの戦いに異常な強さを誇った須佐之男という武神。

「……感謝するぜ、お前たちのお陰で俺はまだまだ強くなれる……

!!」

バコオオオオオン!

戦闘狂らしい笑みを浮かべたと同時に頭にとんでもない衝撃が走り、ゾロは思わず蹲る。後ろを見れば巨大なハリセンを持った黒歌が鬼の形相で立っていた。

「ようやく起きたのかにや？」

「……ああ。迷惑掛けた。」

「迷惑掛けたじゃないや!!このバカゾロ!!!」

黒歌はハリセンでゾロをボコボコにし、黒歌の大声で飛び起きたアーシア達が合流した頃には漫画の様なタンコブを作り地面に這いつくばっているゾロがいた。

37話

「痛っ……。黒歌のやつ、本気で殴りやがって……」

「いやいや、それはゾロさんが悪いっすよ！ウチらだって物凄い心配したんすから！」

「そ、そうです！3日も起きなくてとても……！」

ミッテルトとアーシアの言葉に胸が痛くなる。

アーシアとミッテルトもゾロの夢は当然知っていて理解している。だからと言って怪我をすることを許している訳でもない。それは黒歌も同じ。

「……悪かった。」

「と、とにかく！トレーニングは3日間中止です！」
「分かってる。」

再び開いた傷を治療してもらい制服に袖を通す。学校は今日が修了式で明日からは夏休みなのだ。そして玄関へ立った時に気付く。外で誰かが待っているのだ。それも知っている者が。

「……へえ。生徒会長自らお迎えしてくれるのか。」

「はい。貴方には色々聞きたい事と頼み事があるので。」

「なら、向かいながらいいだろ。」

そうして二人で学校へ向かうもソーナは口を開かない。ゾロの家は学校からかなり近い距離にある為、数分で着いてしまう。しかし、校門の前でソーナが立ち止まりゾロは振り返った。

「……あなたは、いつからはぐれ悪魔である黒歌と行動しているんです？」

「俺がガキの頃だ。帰り道に偶々会ってな。それから今まで続けている。」

「……そうですか。では裏の事を知ったのもその時に？」

「ああ。」

「質問に答えてもらいありがとうございます。」

「で？俺に頼みつてのは？」

ゾロがそう聞いた瞬間、ソーナは頭を下げる。周りの生徒にも少し

動揺が走るがすぐにそれは収まった。何故なら、ゾロが簡易的な結界を張ったからだ。

「私達、シトリー眷属を鍛えてくれませんか？」

「あ？なんでだよ。」

「あなたしか居ないんです。私達と同年代でありながらも私の遙か先を行くあなたしか。」

ソーナは頭を下げ続けた。ゾロが次の言葉を発するまで。

「・・・まあ、基本稽古ならいいか。俺は技術的な事は教えられねえからな。」

「っ!!ありがとうございます!」

「ああ。それじゃあ今日の放課後、家に来い。」

そう言つてゾロは校舎内へと入っていく。ソーナが頭を上げたのを感じし結界も解除した。

そして、その日の放課後。ソーナ達シトリー眷属はゾロの家の前に居た。ソーナは少し震える手でインターホンを押そうとした瞬間、ドアが開き制服姿のゾロがいた。

「よお、会長。それで全員か？」

「はい。そうです。」

ゾロはシトリー眷属を招き入れ地下へ降りる。すると片方では祐斗とゼノヴィアが模擬戦を、黒歌と小猫は座禅を、アーシアとミツテルトが地下に新しく設置された炊事場で食事を作り、天照は一人用のソファアで足を伸ばしながら寛いでいた。

「おや？さつきゾロ君が言っていた客人というのはその小悪魔達かい？」

「ああ。という訳で、お前も手伝え。どうせ、暇してんだろ？」

ヤレヤレと言わんばかりに天照はソファアから腰を上げる。対するソーナ達はガチガチに緊張していた。

そもそも、この空間が異常なのだ。人間、神、悪魔、堕天使、元妖怪、元信者の入り乱れるカオス。和平前なら戦争になっても可笑しくない空間。

「ん？あ、君たちは確か和平会談に居た子達だね。改めて、僕は天照

大神だ。よろしく頼むよ。」

「っ！わ、私はソーナ・シトリーと申します。先日の会談とコカビエルの件は本当に申し訳ありませんでした。」

「頭は下げなくて結構。僕は既に主神では無いし、何より君の様な子供に謝られても困る。それじゃあ早速始めようか。とりあえず、僕は魔力組を鍛えよう。ゾロ君には近接組を見てもらう。」

「はなっからそのつもりだ。」

そうしてゾロと天照の2つのグループに別れた。天照はソーナ、僧侶の草下憐耶、花戒桃の3人で、ゾロは匙元士郎、真羅椿姫、由良翼紗、巡巴柄、仁村留流子の5人。

「結構こっちに寄ったがまあいいか。とりあえず、俺は技術的な事は教えられねえ。だから実戦形式でアドバイスしてやるからそれで慣れる。」

ゾロは近くの木刀を1本手に取り5人の元へ向ける。シトリー眷属の緊張は更に高まる。

「全員で来い。ダメ出ししてやる。」

全員を意を決してゾロに立ち向かったが、結果は当然、何度も返り討ちに合った

38話

ゾロがシトリー眷属の近接組を完膚なきまでにボコボコにし、意識を取り戻す間トレーニングでもして待っていていようと思った瞬間、アジアとミッテルトからジト目を貰う。

「・・・なんだ？」

「ゾロさん？朝、アーシアに何て言われたっすか？」

「いや、だが「絶対安静です！」・・・わーっただよ。」

ゾロはそのまま木刀を地面に置き、そのまま祐斗とゼノヴィアの鍛錬を見る。

結果的に言えば、ゼノヴィアが祐斗に押されておりそのまま剣の刃を首に突き立てられ降参した。

「ほお。中々、上達したじゃねえか。」

「ゾロ君のおかげだよ。」

「まさか、ここまで強いとは思いませんでしたよ。」

「ま、ゼノヴィアに関しては祐斗と同じ様に今後、鍛えてやる。それと祐斗には、俺の奥義を教える。」

「っ!!・・・いいのかい？僕はまだグレモリー眷属だよ？」

「なに。弟子の為に無理するのが師匠つてもんだろ。それで、俺の奥義つてのは・・・」

ゾロが説明し終えた頃にシトリー眷属の近接組は目を覚まし次々と目を覚ましていく。そして、バトンタッチと言わんばかりに魔力組は地面に伏せていた。

「ま、お前の神セイクリッドギア器なら出来るはずだ。夏休み中に完成させろ。」

「分かったよ。何度か意見を貰っても？」

「ああ。さて、十分休んだろ？次行くぞ。」

「も、もうちょっと待ってくれよ、兵藤！」

1番最初に起きた匙元士郎はすぐ様文句を言う。他のシトリー眷属も同意見なのか、口にはしないもののそのオーラは出ていた。

「なら、後はテメエらでやれ。弱音を吐くやつを鍛える程、俺は暇じゃねえ。」

「っ！な、なんでそうなるんだよ!!」

「テメエらは強くなりたかったんじゃないのか？そんなんで、強くなる訳がねえだろ。」

ゾロは木刀を地面に突き刺し天照の元へ行くこうとしたが、その場で大きく跳躍する。その直後、ゾロが立っていた場所に大きなクレターと土煙が発生した。

「ゴホッ、ゴホッ！な、なんだ!？」

今の爆発音に天照以外の全員が警戒する。倒れていたソーナ達も今の爆音ですぐに目を覚ます。

土煙が止んだ頃には、槍が突き刺さって居るがゾロと天照以外が驚愕する。なんせその槍は最強の神滅具、ロンギヌス、トゥルー・ロンギヌス、黄昏の聖槍だったからだ。

「まさか、ここまで来るとはな。曹操。」

「休暇中なのよ。会談ぶりね。兵藤ゾロ。」

槍を手元に戻し、癖なのか肩をトントンとする。そしてこの場にいる者を一通り見た所で天照が前へ出る。

「へえ……。テロリストにも休暇制度があるのかい？」

「ええ。とは言っても、最近はテロを起こしても心が踊らないのだけれど。」

「なるほどね、つまりはサボリと言う訳だ。」

「いや、あんたが言えないにや。」

「ま、理由は分かりきっているわ。あなたよ、兵藤ゾロ。」

「あ？なんで俺が出てくんだよ。」

曹操が槍を消した事で敵対する意思が無いと感じたのか、黒歌と白音、祐斗も構えを解く。しかし、3人共いつでも動ける様に最低限の警戒は怠らない。

「何をしても貴方が心の隅にいるのよ。だからこそ、確認しに来たの。これが恋と言うものなのかどうなのかを。」

「なんでそうなんだよ。……ったく。どうせ、お前も居座るつもりだろ？どれ位いるつもりだ？」

「ゾ、ゾロ君!？な、何を言っているのですか!？」

「おい、兵藤!!あいつ、テロリストなんだぞ!？」

シトリー眷属全員から問い詰められるゾロだが、ゾロの事を知っている者はため息を着くばかり。ゾロは戦闘では容赦無いとは言え、それ以外では甘すぎる。

「他でテロやられるよりはいいだろ。」

「あら。案外、優しいのね。」

「どうせ、帰れって言っても帰らねえんだろ？なら、好きだけ居りやあいい。ただし、俺の仲間に手を出すってんなら斬るぞ。」

ゾロが一瞬で邪気を纏ったことにより、曹操は背中にゾクリと冷たいものが走る。初めての経験ではあるがそれは今まで同レベルの相手が居なかった事を意味する。

確かにヴァーリとの実力も拮抗している。しかし、ヴァーリに無くてゾロにあるものとは仲間への強い愛。しかもゾロの場合はそれが些か強い。

それが分かったことにより、曹操は思わず笑みが零れる。

「ええ。分かったわ。存分に確かめさせて貰うわね。」

「皆さくん！お昼ご飯が出来ましたよ〜！」

「さあ！今日はウチとアジア特性のチキン南蛮っすよ！」

互いの緊張を破るかの様に鍛錬場の真ん中に大きめのテーブルと椅子が現れる。黒歌と白音と天照とゼノヴィアが待っていましたと言わんばかりにすぐに席に着く。祐斗も苦笑いしつつ席に着きゾロと曹操もすんなりと席に着いた。

「あれ？シトリーさん達は食べないんすか？」

「い、いえ……。いただきます。」

シトリー眷属は不服ながらも全員が席に着く。そこから全員でアジアとミツテルトの料理を食べたが、どの店にも負けないレベルの美味しさから皆で舌鼓を打った。

39話

アーシアとミッテルトの食事を食べ終わった頃、ゾロが席を立ちキッチンへ空いた皿を皿を置く。再び木刀を持ち腰に挿す。

「さて、お前たちの課題だが、まずは体力を付けることが先だ。いくら力があっても体力がなきや意味はねえ。そして、さっきの戦い方を見てシトリー眷属は技術を鍛えれば上を目指せる。曹操、お前も手伝え。」

「ええ。」

「いやいやいや！なんでテロリストも一緒に「65回」は？」

「私がここへ来て共に食事をして今に至るまで、ソーナ・シトリー率いるシトリー眷属を全滅させることの出来た回数よ。」

この言葉にシトリー眷属は驚きからか声は出ていない。自分達はまだまだ未熟だと言うことは自覚している。しかし、彼女は同世代でありながらそれだけの力を持っている事を遠回しに伝えられたのだ。だが、この結果に納得出来ない匙は食い下がる。

「そんなはずはねえだろ！確かに弱いかもしれないが人数っ!!」

匙の言葉が止まったのは離れた距離に居たはずの曹操が目の前におり自身の首筋のほんの一部に冷たい感覚があつたからだ。曹操の手に握られているのはキッチンナイフではあつたが充分に殺せる道具でもある。

しかし、曹操の首にも刃は2本当てられていた。それだけでなく背中にも2本の手が置かれてもいる。ゾロと祐斗、黒歌と白音だ。一瞬過ぎる動きにまたしてもシトリー眷属は唾然とするばかり。

「兵藤ゾロと黒歌は反応すると確信していたけど、まさかグレモリー眷属も反応出来るとは思ってもいなかったわ。」

「・・・これでもかなり厳しい鍛錬は受けているので。」

「とは言ってもギリギリだったけどね。」

曹操がナイフを捨てたと同時に匙は腰が抜けたかのように倒れ込み、ゾロと祐斗も剣を納刀する。黒歌と白音もまた手を退ける。

「どう？自分がどれだけ弱いかを理解したかしら？」

「あ、ああ……。」

「あなたは裏の世界を生きる住人よ。甘い考えは捨てなさい。でなければすぐに喰われるわよ。」

「にしても、ありやあやり過ぎだな。」

「凄いな……。私は全く見えなかつたぞ……。」

「わ、私もです……。」

「人間ってあんなに速く動けるんすね……。」

「まあ、君たち3人には夏休み中にあの動きを感知出来るようにはなつてもらおうよ。それで？ 銀髪の悪魔ちゃんは何の用だい？」

天照が扉へ向かつて話し掛けると、扉の横からグレイフィアが現れた。しかし、驚いているのはやはりシトリー眷属のみ。

「グ、グレイフィア様!?!」

「お前は……。」

「四勢力の会談ぶりでございます。私はグレモリー家に務めているメイドのグレイフィア・ルキフグスと申します。勝手な侵入、申し訳ございません。」

グレイフィアは一切無駄のないお辞儀をしつつ謝罪するもゾロは思い出したかのように声を上げる。

「ああ、燃える鳥の時に居た奴か。」

「燃える鳥ではなくフェニックスです。ゾロ先輩。」

「で？ そのメイドが何の用だ？」

「はい。グレモリー当主より伝言を預かつて参りました。『娘、リアスの蛮行を直接謝罪する機会が欲しい』との事です。」

「なら、その当主に伝えておけ。謝罪は要らないと。別に興味も無いしな。」

予想外の言葉だったのか、鉄仮面を被ったような無表情のグレイフィアの瞳がほんの少しだけ揺れる。

「ま、ゾロはいつもこんな感じだから別に気にする必要は無いにや。」
「……承知しました。その様に伝えます。貴重なお時間を割いていただき、ありがとうございます。」

そう言つてグレイフィアは魔法陣で消えて行つた。恐らく曹操の

事も伝えられるかもしれないが、曹操自身は逃げられると踏んで特に気にも止めない。

「あ、あの、ゾロ君？ほ、本当に良かったのですか？」

「ああ。今はやる事があるからな。それより、会長達は明日暇か？」

「い、いえ。明日は一日冥界に戻る予定です。少し外せない用事があり・・・」

「そうか。なら、明後日からは命懸けのトレーニングになるから今日は終わりでいいだろ。場もシラケたしな。」

既にシトリー眷属は言葉も出なかった。しかし、今以上に強くなれると実感出来るものでもあった。

40話

ソーナ達が帰ってから数時間、ゾロは只管に瞑想をしていた。アーシアとミツテルトから筋力トレーニングは禁じられていた為、鍛錬は瞑想しか無かった。それすらもアーシアとミツテルトから渋られた位だ。

2人は現在、天照と鍛錬を行っている。日本神話の元主神とは言え、天照はあらゆる魔法や拳法を修めていた。アーシアは北欧魔術の習得を、ミツテルトは平衡感覚を鍛える為に天照の作成した神々しい柱の上に板を置きその上で座っているが2人ともあまり上手くいつておらず、既に肩で息を整えている。それでも諦めずにくささま挑戦している。

「案外、あの二人は根性があるな。」

「まあ、ゾロの隣にずっといたいからでしょうね。」

瞑想を辞めて胡座をかきながら二人の様子を見てみると黒歌が話し掛けて来た。白音と祐斗を横目に見ると二人も自主トレーニングにはげんでいた。

ちなみにゼノヴィアは今はこの場にはいない。天照曰く、ゼノヴィアには特別講師を付けたらしく、その特別講師の元へ行っているらしい。

「俺の?。」

「ええ。あの二人も強くなるゾロの隣に居たいから、せめて足手まといになりたくないのよ。」

「俺はそんなに薄情に見えるか?。」

「いいえ。それでも恋した男の隣に居たいってのが女の心境にや。ま、ゾロはまだ子供だから分かんないかにや。」

「俺はそこまで馬鹿じゃねえ。お前から好意を向けられてるのも気付いている。」

「にやにや!?な、ななななんの事かさっぱりね〜・・・」

「どつちがガキだよ・・・。」

ゾロはそのまま立ち上がりトレーニングルームを出る。

それこそ恋愛等した事は無いが、黒歌達のアピールは分かっているつもりだ。天照の行動は例外とは言え、天照を含めた黒歌達との関係を飛び越えたいという気持ちもある。しかしやり方が分からないのだ。

ゾロ自身は人間であるが故に残りの寿命も少ない。70〜80年が平均だとしても異形からすればあつという間だ。同じ人間であるアーシアはまだしも黒歌達は長寿であり確実に自分が先に逝くことになる。この問題乗り越えなければ、再び辛い人生を歩ませる事となるだろう。

自室へ入りベッドへ横になる。今までは強くなる事に身を置いてきたが、先の事を考えればそうではなくなる。全員に普通の暮らしを与え、当たり前前の幸せを噛み締めてもらう。今では強さよりもこれを優先している自分に気付き、思わず笑みがこぼれる。

「・・・フツ。俺も大分丸くなっちゃったが、これはこれで悪くねえ。」
ゾロは目を閉じ、眠りに入る。一刻も早く傷を治す為に。

一方、トレーニングルームに残った黒歌は顔を真っ赤にしながらからだ。まさか、ゾロに見破られているとは思ってもみなかったからだ。

「(うう)。恥ずかしいにや／＼／＼一番鈍感なゾロに気付かれていたなんて……。いやでも、それならもつとアプローチをかけるべき……。そうにや！それしかないわ!!」

黒歌もまたゾロへ平穏な暮らしを送って欲しいと思っている。否、黒歌だけでは無い。アーシアやミツテルト、天照に白音に祐斗も同じだ。

しかし、それはそれ、これはこれである。黒歌も生まれて二十数年。妖怪で言えばまだまだ赤子同然。なにより自由な彼女は現在、恋に生きていくのだ。

「(こうなったら、何がなんでも正妻の座は私が貰うにや！ライバルは多いけど、乗り越えてこそその正妻!!)」

「・・・黒歌さんは随分と気合いが入っているね。」

「・・・恐らくゾロ先輩に関する事だと思えます。それよりも、祐斗先輩。明日、お暇なら何処かお出かけに行きませんか？」

「もちろん。でも明日は部長の里帰りだから、恐らく会食もあると思うけどそれでもいいかい？」

「もちろんです。」

「ここでもまた、恋の予感。」

41話

ソーナ達がゾロに鍛えられていた頃、墮天使の総督であるアザゼルは自室で書類と格闘していた。三大勢力と日本神話の会談はあらゆる勢力に通達された。それもあつて書類は今まで以上に膨大となっている。

「ふう……。覚悟はしてたが予想を上回る量だな、こりゃあ……」
アザゼル自身の計画では会談後、息抜きついでに駒王学園の教師でもしようと思っていた。当然、若い悪魔であるリアスやソーナ達を鍛える事を視野に入れていたが、リアスは当然の様に拒否。ソーナの方にも足を運ぼうとしたら矢先、兵藤ゾロに取られてしまったのだ。

駒王学園の教師として活動する為に、サーゼクスからはリアスとソーナ達の強化を条件付けられたが、どちらも手が出せない以上、この話は無しとなったのだ。しかし、目の前の膨大な書類を見ればこれで良かったとも思える。

「……つたく。カオス・ブリゲードやヴァーリもそうだが、この時代は最悪だな。特に、兵藤ゾロとかいう小僧……」

アザゼルは墮天使の総督であると同時に神セイクリッドギアの研究者でもある。ヴァーリの持つ神滅具ロンギヌス、白龍皇の光翼は神ですら負ける可能性のある危険物だ。

しかしそれを兵藤ゾロは剣術のみで互角にやり合った。否、途中から神器を使用した気配があつたので持つてはいるが所詮は身体操作系。神滅具との差は天と地以上の差がある。

そしてなによりも過激に纏った邪気。あそこまで邪気を取り込めば神仏であろうと破滅するはずだが、人間であるゾロはそれを使いこなしていた。

「調べてみたいが、情報は使い物にならん。その上、バックに天照がいるということ、かなり位も高いだろう……。だああああ!! 気になり過ぎて集中出来ねえ!」

アザゼルが葛藤している中、他勢力では揺れていた。当然、ゾロの

事である。

会談については三大勢力より通達されている為周知しているが、白龍皇がテロリストに所属しているという事実とその白龍皇と対等に渡り合った人間がいるという事実。

未熟と言えど、神をも恐れさせた白龍皇と同等の力を持つ人間。当然、どの勢力も戦力として欲しいに決まっている。しかし、身近にいるのは天照だ。主神を降りたと言えど、全力の分からない相手と戦う等、正気の沙汰では無い。

ゾロ自身は日本神話に加入していないが、他の神話体系から見れば、元主神が側に居るとなれば地位の高い者と見なすのも当然だ。

あらゆる勢力が様子見の中、唯一北欧神話が動こうとしていた。

「兵藤ゾロ……ふうむ……」

白く長い髭を摩りながらゾロの写った写真を眺める老人。彼こそ、北欧神話の主神『オーデイン』である。ゾロの写真は三大勢力の撮った写真であり、当然盗撮である。資料と共に送られてきたのだ。

「オーデイン様。この少年が何か？」

「……いや。二ヶ月後に日本神話と和平交渉をする事を他の神々へ通達を。日本神話へのアポも。」

「な!?!し、正気ですか!?!何故あのような小さな島国の神々と和平を!?!」
「ほう、小さい島国。確かに『兵力』では儂らの方が上じやろう。しかし、『戦力』では他の追隨も許さぬのが日本神話じゃ。」

「な、何を言っているのです!?!どちらも同じ!?!同じ意味などではない。は?！」

「『兵力』とは即ち頭数。対して『戦力』とは個人の強さを示すもの。意味合いは同じように聞こえても中身は全くの別物じゃ。」

「し、しかし、ロキ神が許すはずなど!?!」

「そこは儂がなんとかしよう。護衛には『ロスヴァイセ』を連れていく。」

「しよ、承知しました……」

秘書の男神はそのまま執務室を出ていく。これが吉と出るか凶と出るかは誰にも分からない。

42話

夏休みに突入して既に4日。シトリー眷属とグレモリー眷属である祐斗と白音はこの場に居ない。理由としては冥界への里帰りだ。4日間、来ていなかった理由はゾロが関係してたりもする。

ソーナ達は当初、両親への挨拶を終えた後すぐに戻ってくる予定だったが、ゾロより1週間はリフレツシュに当てろと言われソーナもそれを了承した。それ以外にも色々理由はあるが、大きな理由としてはこれが大半を占めている。

そんな提案をしたゾロはと言えば、アジアとミッテルトから言われていた鍛錬禁止の日数が解け、体慣らしも含めて黒歌と軽い手合わせをしていた。

「これならどうかにゃ!!」

黒歌は大量の魔法陣を展開し、その中には幻覚も混ぜ込んでいる。そこに仙術も混ぜ込んでいる為、視覚はもちろん気配探知でもそこらの神クラスでは見分けが付かないだろう。

対するゾロは上半身半裸で背中には刺青も出ており、刀達もまた邪気を纏っている。

「三刀流！蟻地獄!!」

地面を斬り離し浮かび上がった地面を更に細かく斬り刻み、一つ一つに邪気を纏わせて黒歌の魔法陣へ飛ばし相殺する。

本来なら、これほどの物に力を纏わせる事など不可能に近いが、邪気の吸収量も排出量も異常なゾロなら造作もないことだ。

攻撃の相殺で土煙が起るが、いつの間にかゾロは黒歌の上にいた。

「二刀流奥義。木枯らし」

ゾロはそのまま空を蹴り黒歌に三代鬼徹・・・で斬る訳にはいかなので柄の部分で鳩尾部分に軽く当て地面に激突させる。

「あぐっ・・・!」

「俺の勝ちだな。」

ゾロは刀を納め、そのまま黒歌に手を差し伸べる。悔しそうにしな

がらもその手を取り立ち上がった。が、立ち上がる瞬間にゾロを押し倒し、してやったり顔でゾロの上に乗る。

「にやははははは♪二回戦は私の勝ちにや♪」

「テメエ……。」

2人の無意識のイチャイチャを見ていた者達は嫉妬したり、関心したりと反応は様々であった。

「ハアツ!!」

『甘い!!!』

「ゴフツ……。」

ゼノヴィアは木刀を両手に何者かに斬り掛かるも幾度となく振られた剛腕に薙ぎ払われ、クレーターを作りながら柱へ激突しこれまた何度目かも分からない吐血をする。

『一昨日よりは多少、動きは良くなったがまだまだだ。よくその弱さで生き残れたものだ。』

「っ……。」

反論したいにも出来ない。そもそも声すら出ない。自分がどれほど弱いかを改めて痛感させられる。

『今日は終いだ。』

「……貴重なお時間、ありがとうございます。須佐之男様。」

ゼノヴィアは巨漢、須佐之男に頭を下げるが須佐之男が振り向く事は無かった。須佐之男が居なくなった途端、ゼノヴィアはへたりこんだ。少なくとも、一昨日までであったこれまでの自信等は既に折られている。

自分が未熟だと言うことは今迄も分かっていたつもりだ。しかし、自分を遥かに凌駕する圧倒的なまでの上に今までのプライドも何もかもへし折られた。

「何をしているのかしら?」

「っ!ツ、ツクヨミ様!も、申し訳ございません!」

「……その様子からすると、須佐之男に随分と遊ばれていたようですね?あなたは何の為にここに居るのです?」

一切濁すことの無い言葉はゼノヴィアの胸に突き刺さった。

当然強くなるためだ。しかし、今の自分は何をしている？教会から追放され、扱われていた聖剣も取り上げられた。そして天照の配下へと降った。にも関わらず、自分は今何をしているのか。

後退するという選択肢などゼノヴィアには少しも残されていない。それなのに今更剣士としてのプライドをきにするのか？違う！全てを失ったからこそ進むしか無いのだ。立つことを拒否する全身に鞭を入れて立ち上がる。

「ツクヨミ様・・・！ありがとうございます。目が覚めました。」

木刀を手に取り走り出す。目指すは須佐之男の部屋。あらゆる者達とすれ違うが全てを無視して走る。ようやく部屋の扉が見えた事で更に加速しドアを蹴破る。それと同時に須佐之男を一瞬でロックオンし跳躍して木刀を振り下ろす。

「やああああ!!!」

『何のつもりだ!!』

須佐之男はすぐ様反応し、ゼノヴィアを殴り飛ばし、ゼノヴィアはと言えば今まで走ってきた道を逆戻りする形で柱にぶつかる。

「ゴホッ！ゴホッ！」

『今日は終いだと言ったはずだが？』

「私は・・・！信じていたもの全てに裏切られた!!後退の道なんて存在しない！だからこそ、第二の人生を謳歌する為に!!私は強くならなきゃいけないんだ!!」

ゼノヴィアは再び木刀を手に取り斬り掛かろうとするも周りの者たちに取り押さえられる。しかし、取り押さええている者達には目もくれず、ひたすらに須佐之男へ殺気を送り続ける。

須佐之男がオーラを発した瞬間、取り押さえていた者達は苦しみ始めた。間違はなく邪気ではあるが、ゼノヴィアは構わず立ち上がり木刀を振るうも再び殴り飛ばされた。しかしゼノヴィアは見逃さなかつた。須佐之男の顔が凶悪な笑みで溢れていた事に。

『グハハハハハ!!良い殺気を放つ!!殺気を向けられるのなんざいつぶりか!!この短時間で何があったかは知らんが面白い!!!ギアを上げ

てやるから死ぬんじやねえぞ！小娘エ!!!』

瞬間、須佐之男の体は変態していく。顔はまるで龍の様な鱗に覆われたかと思えばその首が伸び、更には七つの首も生える。手足も胴体に取り込まれ倍の大きさになり瘴気までも発生する。正しく八岐大蛇だ。

『来い!!』

「はい!!」

ゼノヴィアはその姿に臆する事無く走り出す。これこそ、後の世で『斬殺姫』、『暴君』と呼ばれる事になるゼノヴィアの始まりである。

43話

「さて……。またせたな、曹操。」

「ふふふ……。ようやくね。」

これまで静観していた曹操は笑みを見せる。

彼女の中で分かったことがある。自身は兵藤ゾロにまだ恋をしていないと言う事。他者を惹き付け道を記すこと。そして、ゾロにはもう一つの夢があるということ。

しかし、曹操にとつて得られる物も多々あった。現状、カオス・ブリゲード内の話で言えば、ゾロを止められる者など自分とヴァーリ、トップであるオーフィス位のものだ。しかし、それはゾロのみを襲撃した話である。

仮に現在、非戦闘員であるアーシアとミッテルトを狙った場合天照大御神からの手痛い反撃を受ける上、兵藤ゾロ一派からの襲撃に会い、組織が半壊する恐れもある。

現状の兵藤ゾロ一派を相手にするには戦力が足りないのだ。それほどまでに強くなりすぎた。

曹操はそんな事を頭の片隅に考えつつも槍を器用に回し構える。ゾロも三本の刀を構え、戦闘態勢を取る。

互いに動きを見つつ静止していたのが突如として視界から消えた。直後、離れていたはずの二人が正面で鏝迫り合っていた。実際、この場において視認出来たのは黒歌と天照の二人だけである。

「ふふふーこの高揚感！堪らないわ!!」

「同感だ!!」

いくら実力が拮抗しているとは言え、女性である曹操は筋力という点に置いてゾロに負けている。ゾロは曹操を押し返しすぐさま技へと移行する。

「三刀流！八咫鳥!!」

三本の刀が縦横無尽に突かれてくる。しかし、曹操もただの女性では無い。異形が跋扈する中、人間という最低限のアドバンテージの中、強さを求め続けた。

自身が非力なのはとうの昔に知っている。ならば、技に頼ればいい。ゾロの刀はまるで猛禽類の鉤爪の様に錯覚するほどの激しい攻撃を見切り避け続けた。

避けて避けて避けて避け続け、ほんの一瞬隙が見えた瞬間攻撃を打ち込む。完璧であり、避ける隙さえ与えない攻撃。そんな攻撃をゾロはいとも容易く回避し後方へ下がる。

「ああ・・・!!堪らないわ!世界にこれ程の強者がいたなんて!!もっと私を楽しませて!!」

曹操の後ろに突如として水晶玉の様な物が七つ現れる。ゾロはそれを見てニヤリと笑みを浮かべた。

「準備運動は終わりか。俺もちょうど温まってきたところだ。来い、曹操!!」

二人の戦いは激化していく一方だった。

その頃、リアスは部屋で荒れていた。理由としては現当主達から説教されあらゆる制限を掛けられたからである。

制限としては冥界への強制帰還、グレモリー城にて再教育、次期当主の権利剥奪という三つ。もっと細かくすれば多岐に渡るが、大きく分ければこの三つである。

一番、リアスに響いたのは次期当主の権利剥奪である。リアスは大大まかとは言えど、未来のプランを立てていた。

リアスが例えグレモリー家当主になったとしても、数十年もすれば甥であるミリキャスも経験を積み次なる当主になる為、譲ろうと考えていた。しかし、その未来のプランが崩れ去った上、リアスの婚約者であるライザー・フェニックスもゾロに一方的に倒されたショックから自室に塞ぎ込んでしまったのだ。

リアス自身は気にも止めていないが、その他はてんやわんやである。元々、リアスの持つ『滅びの魔力』とは『バアル家』の特権であり、バアル家の最初の次期当主候補は滅びの魔力を受け継ぐ事が出来ず、二人目の次期当主候補は受け継いだもののリアスには及ばない魔力量。

この事実にはバル家はグレモリー家へ一方的な恨みを抱き、バル家の力を使いリアスへの婚約の話を途絶したのだ。

グレモリー家は、「バル家の力があるろうとも自力で婚約者を見つけれられる」というものを見せつけたかったが、これが現実である。よ、リアスへの縁談は無くなっていた。

リアスは今までの鬱憤を自室にある物に当り散らした。日本が大好きでお土産として買ったお気に入り熊の置物も壁に放り投げて破壊し、その他にも大事にしていた様々な物に当たり散らかした。全てを壊しても収まらない怒りにリアスは鼻息を荒くしていた。

「っっ!!!これも全て兵藤ゾロのせいよ!!!あいつさえ居なければ私は!!!」

傍から見れば完全な逆恨みであるが、今のリアスに気付くはずもない。今のリアスに近付こうとする眷属も使用人も誰一人としていなかった。

一方、荒れているリアスに対し、婚約者であるライザー・フェニックスは自室の角にて酷く怯えていた。以前の傲慢な態度は鳴りを潜め、代わりに恐怖に彩られた表情で怯え続ける。

ゾロに負けて以降、彼はずっとこの調子だ。立ち向かう気力すら浮かばず、身内にも恐怖する程に怯えていた。そんな時、彼の部屋にノックが響く。

「お、お兄様?・レイヴェルですわ。既に食事を取らない状態で一ヶ月になります。一口でもいいので何か」

「た、頼む・・・!!お、俺に関わらないでくれ・・・!!」

ライザーの心からの叫びに妹は口を閉ざす。そして、ドアの前から居なくなる気配を感じ、ライザーはホッとした。

これ以上、迷惑を掛ける訳には行かないと分かっている。しかし、理解と現実とは別物だ。ライザーは今日もまた自室にて閉じこもる。

44話

曹操とゾロの勝負は結局相打ちで終わった。と言うのも、あまりにも戦闘が激しすぎて訓練場の修復が間に合わなかったのだ。このままでは無の広がる『次元の狭間』に放り出されるという、天照の助言により互いに武器を懐に仕舞った形となった。二人ともかすり傷しか無いものの、消化不良と言った顔だ。

「・・・まあいいわ。これだけでもかなり楽しめたもの。次は死ぬまでやりましょう。」

「ああ。乗った。」

曹操はそう告げて消えていく。一瞬で曹操の気配を探知出来なくなった。つまり、この周辺からは居なくなっただろう。ゾロは立ち上がったかと思えば大きな欠伸をする。

「ありゃ？もう寝るのかにゃ？」

「ああ。何かあつたら起こしてくれ。」

そう言つてゾロはトレーニング室を出て行く。その後ろ姿を見て黒歌は妙案を思い付いたのかニヤリと笑みを浮かべる。しかし、それを見逃す3人では無い。

ゾロは刀を置きベットへ横になり直ぐに眠りに着いた。しばらくすると全身に軽く重みを感じた為、目を開けるとまず飛び込んで来たのはミッテルトとアーシアだ。二人とも、ゾロの胸の上でスヤスヤと寝息を立てている。頭が少しハッキリしてくると両腕も重く感じてくる。

顔を向ければ左腕に黒歌、右腕に天照が枕として使っている。天照に限ってはいつもの幼女とは違い大人の姿だ。

「コイツら・・・まあ、いいか。」

ゾロは再び目を閉じる。四人が一切、服を着ていない事を知らずに。

ゾロ達が仲良く眠っていた中、家のインターホンは何度か鳴っていた。しかし、誰も出てくる事は無い。

「・・・お嬢様。また、日を改めましょう。」

「・・・ええ。そうですね。」

ゾロの家の前に立っていたのは、かつてゾロと戦った『僧侶』のレイヴェル・フェニックスと『女王』のユーベルーナ。理由は単純である。塞ぎ込んだライザーの支援を手伝って欲しかったのだ。しかし、居ないならと肩をガツクリ落として離れようとした。

「む？君たちは何をしているんだ？」

「え？」

二人が振り向くと全身傷だらけのゼノヴィアがいた。

「えつと・・・」

「ゾロの友人か？」

「!?知っていますの!？」

「ああ。一緒に住んでいるからな。呼んでこようか？」

「い、今はいらつしやらないようで・・・」

「いや、居るぞ？気配を感じるからな。」

「け、気配・・・？」

「まあ、外ではなんだ。中に入るといい。」

ゼノヴィアは鍵を開け、二人を中に入れる。リビングで待つておく様に伝えゼノヴィアは2階へ行く。しかし、すぐにゼノヴィアの悲鳴が聞こえ慌てて2階へ行くとゾロが4人の女性と裸で寝ていたのだ。

ゼノヴィアは固まってしまいレイヴェルは顔を手で覆う。そんな中、黒歌がムクリと起き上がり優雅に背伸びをする。

「ん〜！よく寝たにや〜つて、あら。ゼノヴィアおかえり。・・・と、誰にや？」

「はっ！く、黒歌！な、何をやっているんだ！」

「ん〜？そりやあ、裸の男女が同じ部屋にいたらねえ〜」

「は、はわわわ／＼／＼」

「で？あんたらは？」

「申し遅れました。私はフェニックス家の三男、ライザー・フェニックス様の『女王』ユーベルーナと申します。本日は兵藤ゾロ様にお話があつて参りました。」

「ふうくん……。ま、分かったわ。起きるにや！」

黒歌は突然、ゾロの肩を思いつきり殴った。しかし知っていたかの様に攻撃は止められた。

「んっんっ！なんかあったか……。？」

「お客さんよ。」

「客……。？」

ゾロは眠気まなこでレイヴェルとユーベルーナをじっと見つめる。

「あ、あの……。？」

「金髪……。ああ、鳥か。」

「んな!?と、鳥では無くフェニックスですわ！そ、それに、そんなにいっぺんに女性とま、交わるなど不潔ですわ！」

「あ……。？」

そこでゾロはようやく黒歌を見る。

「……。なんでお前は裸なんだ？」

「あら？私だけじゃ無くてもそうにや。」

「……。まあいいか。」

ゾロは天照に抱き枕にされている腕をゆっくりと引き抜き、アーシアとミツテルトをゆっくりとベッドに降ろし起き上がる。黒歌も内容が気になるのか服を着て下に降りる。

「んで？話つてのは？」

「お、お兄様を助けるのを手伝ってください！」

45話

「お前の兄貴？」

「は、はい。あなたに負けて以来、塞ぎ込んでしまつて・・・」

ゾロは考えるように顎に手をやる。レイヴェルはすぐさま頭を下げた。

「頼める立場では無いというのは分かっています・・・！ですが、どうか！どうかお願いします！」

「・・・なあ。」

「っ！は、はい。」

「兄貴の写真あるか？」

「え？え、ええ。ユーベルーナ。」

「こちらですが・・・」

ユーベルーナの置いた写真をゾロはまじまじと見る。レイヴェルは当然ながら、ユーベルーナも少し不安に駆られる。もしや、受けるつもりは無いのかと。

「・・・ああ。思い出した。」

「「え？」」

「なんにや？忘れてたの？」

「ああ。全く思い出せなくてな。まあ、見知った奴だ。手は貸してやる。だが、俺の家だけだ。」

「っ！わ、分かりました・・・。敵同士だったと言うのに受けて下さり、ありがとうございます。それでは、失礼致しますわ。」

レイヴェルとユーベルーナは頭を下げて家を出ていく。

「ゾロ、いいの？」

「会長達と並行しながらだ。始める前にもそれを伝える。」

「ふうん・・・。ゾロも案外面倒見いいのにや。」

「ほつとけ。・・・そうだ、黒歌。久しぶりにどっか行くか？」

「!!へ、へえ・・・。ゾロからデートのお誘いを受けるにやんて。どうしよ「行かないならそれでいいぞ。」ちよ！行く！行くから待つてて!!」

黒歌はそう言うや否やドタバタと音も気にせず自室へ戻る。ゾロも自室へ戻り三人を起こさない様に支度を始める。ちなみにゼノヴィアは自室で休憩中だ。

「へえ。君でも女性をデートに誘うんだねえ。」

「あ？聞いてたのか？」

「異形は人間よりも身体能力が上だからね。特に神である僕は逸脱している。まあ、この家の中ならどんな声も聞こえるのさ。」

天照はベッドに横になりながらゾロを眺めている。それも全裸であり尚且つ大人の姿な為、誘っているようにしか見えない。

しかしゾロは一切見ようとしなかった。否、見れなかった。先程は寝ぼけて居たのもあった為に何とも思わなかったが今は思い出そうとすれば恥ずかしさが募る。

「まあ、楽しんできなよ。僕は彼女達の鍛錬を行っておく。」

「ああ。行ってくる。」

支度を終え下に降りると黒歌が既に待っていた。いつもの着物では無く今どきのファッションを取り入れている。

「ど、どうかにや・・・？」

「ああ。似合ってるぞ。」

「にへへ・・・じ、じゃあ、早速出発にや！」

黒歌はゾロの手を引つ張りながら外へ出る。

「さて、どこにいくかにや？」

「大阪なんてどうだ？」

「ま、また、遠い所ね・・・。ここからだとかかなり時間が掛かるにや。」

「だから、最近覚えた術を使う。目をつぶって俺のオーラに合わせてくれ。」

「？」

黒歌は疑問を浮かべながらもゾロの肩に手を置きオーラを合わせる。その瞬間、体が横に殴りつけられる様な感覚に襲われたと思えば目の前の景色が変わっていた。目の前にはテレビで何度か見た事のある道頓堀の入口だ。

「にやにや!?今のつてもしかして霊脈を通ったの？」

「ああ。入れるようになったからな。」

「やっぱ規格外ね、ゾロは。」

「とつとと行くぞ。」

そうしてゾロと黒歌のデートは始まった。食べ物片手に道頓堀を散策する。霊脈を通りながらの移動の為様々な場所へ向かう。食べつつ見て回っているとあつという間に夜となっていた。

「ん〜！今日は遊んだにゃ〜！」

「ああ。たまには悪くねえ。」

「・・・ねえ、ゾロ？私達の事ってどう思ってるにゃ？」

「なんだよ、急に。」

「いいから。」

「・・・俺にとつちや家族だ。」

「家族・・・」

「ああ。お前が何を言いたいかも分かるが今はまだ答えられねえよ。」
「だとしても、これだけは言わせて。私は何時でもゾロの傍にいますにゃ。」

「・・・ありがとよ。」

黒歌とゾロは互いに手を握り霊脈へと潜っていく。二人の仲は更に深まった。

46話

「むうう！お二人だけでズルいです！」

「そうつすよ！ウチだって行きたかったつす！」

「今度はお前らも一緒だからそう怒るなよ。それより天照。ゼノヴィアは？」

「彼女なら須佐之男の所さ。どうやら殻を破ったらしい。それと先程、悪魔が二人来ていた。なんでも、兄を連れ出せないらしい。それと、シトリの姫君達は既に冥界から戻ってきているらしい。明日にでもトレーニングを再開したいそうさ。」

「そうか。とりあえず、鳥の方は自力でなんとかしてもらおう。明日からのメニューは体力メインだな。」

「白音や祐斗達は？」

「祐斗は俺が見る。白音は頼んだ。」

「了解にや。」

「それじゃあ難しい話が終わった所で夕飯つす！」

「きよ、今日はすき焼きというのを準備しました！」

「にやにや!?! つ、つまり戦争が起こるにや・・・!!」

そんな感じでわちやわちやしているとゾロのスマホが鳴る。表示を見てみれば母親からだった。

「おう。なんだ？」

『ごめんなさい、急に電話なんかして。今、時間は大丈夫？』

「ああ。なんだ、改まって。」

『いえね。今、父さんと二人なんだけどゾロの家に行ってみようって話になったのよ。でも急に行っては迷惑だと思って・・・』

「なるほどな・・・。分かった。今はルームシェアだから確認してから連絡する。」

『分かったわ。ありがとう、ゾロ。』

それを最後に電話は切られた。アジアとミッテルトは食事の準備をしているが、黒歌と天照は嬉しさに満ちているようだった。

「なるほどにや。ねえ、ゾロ。私は構わないにや。なんなら、明日で

もいいわよっ!」

「馬鹿言え。流石に急だろ。」

「何を言っているんだい、ゾロ君。僕も早くご両親殿達に挨拶をした
いんだ。」

「お待たせしました!」

「さあ、食べるつすよ!ちゃんとお酒もあるつす!」

ゾロ達はこうして今日もまた賑やかな1日を終えた。

「なんで!なんで!なんで!!」

その頃、リアスと言えば荒れに荒れていた。理由はこれまでの不始
末だ。今まではなんとか隠し通せていたものの、ライザーとの共闘か
らバレてしまった。

リアスに甘い当主でさえも厳罰を下す他なく、夏休み終了時点で学
園を強制退学、次期当主の権利剥奪、グレモリー家にて再教育、リア
ス自身の財産の没収及び向こう十年の軟禁となった。当然朱乃も幾
つかは同じ処分だが、兵藤一誠と木場祐斗、塔城白音に関してはペナ
ルティは無し。

兵藤一誠に関しては夏休み期間に冥界の歴史等と言った座学を全
て修了するというものがあるものの、これ自体は悪魔の義務である為
ペナルティには課されない。逆に祐斗と白音にもペナルティが無
いのはコカビエル戦での活躍が大きい。

「どうして私が!悪いのは全て兵藤ゾロなのに!!」

大好きだった日本で買ったお土産や高級であろう家財を壁に投げ
つけ、それでも尚留まらない怒りに震えるリアス。

「ぶ、部長……」

「……ねえ、イツセー?どうして私がこんな思いをしなくてはいけな
いの?」

「全部……!全部ゾロのせいですよ!!でも今の俺たちじゃ勝てませ
ん……。だからこそ、この夏休みで強くなるんです!アイツに負け
ないくらい!」

「・・・ええ、そうね。フフフ・・・。兵藤ゾロ・・・!!あなたは私が殺してやる!!」

こうしてリアス達は生まれ変わった。全ては兵藤ゾロへの復讐の為。ゾロと相まみえる日も遠くは無い。

47話

「オラア!!とつとと走れえ!!」

『っ!!』

目を跨ぎシトリー眷属と祐斗と白音は冥界から戻ってきた。そしてシトリー眷属の最初の訓練は大岩を背負っての山道走り込み。

当然単なる岩ではなく異形でさえも重いと感じる岩。そしてその鍛錬を指揮しているのは意外にもゾロでは無く、ゾロの剣術の一時的な師匠であった。しかし、参加しているのはシトリー眷属だけでは無い。

「ゼエ・・・ハア・・・な、何故、貴族である俺様がこんな事を・・・!!」

「それもこれも・・・!引きこもったお兄様のせいですわ・・・!!」
トレーニングにはフェニックス眷属も参加していた。と言うのも、ようやくライザーを部屋から引つ張り出しゾロの元へと向かえば、説明も無く山へ向かわされ突然に岩を背負わされ山を登ることになったのだ。

この鍛錬において当然魔力などと言った異能は全て禁止。使っている痕跡が少しでも見つければペナルティとして追加で十往復させられる。

「の、のう、ゾロ・・・?ほ、本当に良いのか・・・?」

「ああ。一ヶ月そこらで強くなれる程甘くはねえよ。」

「そ、それはそうなのじゃが・・・」

「ゾ、ゾロさん!わ、私達も同じトレーニングをやりますから!」

「そ、そうっす!お、降ろしてくださいっす!」

アジア達が言うようにゾロもソーナやライザー達と似た様なトレーニングを行っていた。しかしゾロだけでなく黒歌や白音、祐斗までも参加していた。それも、ソーナ達よりも何十倍もの重さで。

「にゃ〜!なんで私までっ!!」

「姉様。文句を言っては終わりません。」

「て、手厳しいね、白音ちゃん・・・。」

何十倍とも言える重さの岩を背負いながら軽口を叩き合うゾロ達にシトリーとフェニックス眷属はドン引きだ。・・・一人を除いて。「ああ、ゾロ様・・・！我々の鍛錬に付き合ってくれるなど、なんて心のお優しい方・・・!!)」

ゾロにはいつの間にかファンが出来ていた。名前は『ミラ』。フェニックス眷属の新入りの兵士でありゾロの底知れない強さを知って熱狂的になったファン一号である。彼女もまたゾロに惹かれたのだ。恋愛という意味では無く強さや気高さに。

午前中を掛けて山をなんとか登り切った面々には1時間の休憩が与えられた。しかし、シトリー眷属とフェニックス眷属は既に死に近い。

「おいおい・・・。そんなんでへばってんのか？午後は俺との模擬戦だぞ？」

「な!?ふ、ふざけているのか、貴様!!こんな地獄の後に更に鍛錬だ?!」

「心配しなくともお前ら悪魔の知ってるレーティングゲームとやらに乗っ取ってのチーム戦だ。その方がお前も復帰が早い上に誰よりも経験を詰めるだろ？一石二鳥じゃねえか。」

「レ、レーティングゲーム方式ですか・・・？つまりある程度の枷を付けるか？」

「ああ。休憩が終わった後に特殊な次元に移動する。夕方の5時までぶっ続けだ。当然、俺や黒歌も参加するがかなりの手加減にはなる。」

その言葉はソーナの心に深く刺さる。自分達の弱さが浮き彫りになっている様な感覚に襲われるのだ。ライザーも同じなのか少し難しい顔をする。

「みなさ〜ん！お昼ご飯の準備が出来ましたよ!!」

「さあさあ！お待たせしたつす！これで午後の訓練も気合いを入れるつすよ！おかわりもあるので遠慮は禁物つすよ!!」

そうして準備されたのは50名余りの食事。突然、この短時間でたったの二人で作れるはずも無いので前日に作ったものを軽く温め直したものである。ちなみに、昼飯は牛丼だった。

全員が我先にと急いで腹を満たし、午前中の疲労を消し飛ばそうとするも上手くはいかず、午後はゾロ達に呆気なく惨敗した。終わる頃には全員が地面に寝っ転がっている状態だった。

「んじゃ今日は終わりだ。今日はゆっくり休め。」

そう言うと、黒歌が大型の転移魔法陣を展開し全員で家のトレーニングルームへ戻ってくる。ゾロは奥の方へバーベルを取りに行き。

「あ、あんなにキツイトレーニングの後はまだ……」

「お兄様……。今度は私が引きこもりますわ……。」

ソーナやレイヴェルの言葉を誰しもが聞いていたはずなのに、疲労によって誰も返す事は出来なかった。

48話

連日、巨大な岩を持つての山登りは続いた。ライザー達貴族はもちろん、多少のトレーニングをしているソーナ達も限界の色が見え始めていた。

もうそろそろで脱落者が出るかもしれない時、鍛錬場所を変更するという事をゾロから伝えられた。しかし、場所は冥界。それも、危険な魔物が蠢く湖だと言う。

当然、皆が抗議したが「実戦経験が無いと意味が無い」という言葉で黙る。しかしライザーは尚も食い下がった。

「おい、兵藤ゾロ！俺はやらんぞ！何故貴族の俺がこんな事をしなくてはいけないのだ！」

「なるほど、なるほど。つまり貴族君は怖いわけだ。」

「は？」

「素直になるといいよ。見知った冥界でも怖いものは怖いと。」

「ふ、ふぎけるな!!怖いわけがあるか!!俺はフェニックス家だぞ!魔物如きに遅れを取るか!」

こうしてライザーも陥落した。ちなみにだが、目の前の少女が天照大御神である事をフェニックス眷属は知らない。そもそも、元とは言え主神がこんな場所にいる方がおかしいのだ。

結局、全員で行く事になった。しかしゾロは冥界への行き方等知らない。故にソーナに相談するとシトリ一家で保有する列車を出してくれるらしい。

一度シトリ一家を経由する事にはなるものの、その方が近道なのだと。ゾロは家族にも確認を取ると当然の様に全員行くという。

白音と祐斗も共に行き、ゼノヴィアにも連絡を入れるとそちらも行くという。1番の驚きは天照も行くという事だろう。理由を聞けば、ゾロも離れると「余計な虫が着く」ということらしい。

こうして決まった冥界への修行旅行の準備を全員が行った。アシアとゼノヴィアは、「生きているのに地獄へ行くのは新鮮」という変な思考を持っていたが今更だ。

黒歌も最初は渋っていたものの、白音が行くという事で同意。ゾロはいつもと変わらず、全員が荷造りをしている中、昼寝をしていた。その横に天照が忍び込んでいるのは日常である。

ソーナが列車を手配し、全員が準備を終えるのに1日の時間を要した。既に夏休みは残り1週間と僅かな為、これが最後のトレーニングとなる。夏休み終了間近にはグレモリー眷属VSシトリー眷属でのレーティングゲームが控えている。故に、シトリー眷属の皆は自然と力が入る。

逆にフェニックス眷属はライザーとミラを除いてゾロが怖くなっていた。ライザーは引きこもりも治り前の様に傲慢な態度を取っている様に見えるが、前よりは言い回し等も柔らかくなっている。

しかし、今度はレイヴェルが引きこもりになり掛けていた。最近ではキツすぎる鍛錬に夜が明けるのが怖いと言う。他のメンバーもかなり疲れが見えている。

そんな事もありながら、最後のトレーニング場所へ向かった。

49話

「にやはく♪快適にやく♪」

「確かに冥界も悪くない。しかし、1番は日ノ本だがね。」

「たまにはこうしてゆっくりすんのも悪くねえな。」

「・・・寛ぎ過ぎです。」

「あ、あはは・・・」

現在は冥界。ゾロと黒歌、天照は擬似的な光での日光浴を楽しんでいた。ゾロに至っては酒を嗜んでもいる。

しかしゾロ達の後ろでは悲鳴が上がっていた。理由は単純でシトリー眷属とフェニックス眷属が魔獣やはぐれ悪魔に追いかけて回されているからだ。アーシアとミツテルトはぎこちないながらも組手を行っている。

ゼノヴィアも鬼ごっこに参加しては居るが、鬼ごっこと言うよりは進んで魔獣達に突っ込み斬殺していく。最近では受け流す事を覚え始めていた事もあり格上でも互角にやり合っていた。

結局、午前中は魔獣達と鬼ごっこをさせられ午後には魔獣の蠢く湖での水泳。どれだけ強い精神力を持つ者でも発狂したくなるほどの厳しさ。それ故かミラに悲劇が襲う。

慣れない過酷な修行で疲労が極限にまで達したのだろう。泳いでいる最中に足が痙攣を起こしてしまったのだ。突然の事にパニックになり思いつきり水を飲み込みこんでしまい、水の中へと引きずり込まれる。

「ミラー!!」

いち早く気付いたライザーは水中へと潜りミラを抱いて上へ上がろうとするも目の前には巨大な魚型の魔獣が大きく口を開けていた。

自分は再生出来るがミラにはその能力が無い。ましてやここは水中。炎の魔力は使えない。ライザーは力の限りミラを投げようとした時、目の前にゾロが現れ魔獣を一刀両断した。

ゾロは刀を鞘へ納めライザーの襟元を掴んで水上へ上がっていく。

「ぶはっーミラー!おい、ミラー!」

「ゴホッ、ゴホッ！ラ、ライザー様・・・！」

「会長！一旦、陸に上がってけ！」

ゾロの一声で全員が瞬時に陸に上がる。ライザーもミラを背負いながらも陸になんとか上がった。

「兵藤ゾロ！頼む、眷属達をこの鍛錬から外してくれ！全員がもう限界だ！鍛錬なら俺が全て受ける！」

「心配しなくてもお前らは終わりだ。元々はお前の引きこもりを治す為だからな。その状態ならもう大丈夫だろ。今までよく耐えたな。」

ゾロはそう言い残して踵を返す。フェニックス眷属はミラを除いて唾然としていた。とてつもなく厳しかった鍛錬がこうもあっさり終わったのだ。

シトリー眷属に何らかの話をしているが、新しい内容なのだろう。全員の顔が引きつっている。

レイヴェルがユーベルーナへ指示を出したのだろう。転移魔法陣の準備を始めている。ミラを眷属へ任せてライザーは立ち上がる。

「兵藤ゾロ!!!」

「あ?」

「俺は貴様に二度と負けん!!あの時の雪辱をいつか必ず果たす!!首を洗って待っている!!」

「ああ。何時でも来い。相手をしてやる。」

ゾロは戦闘狂らしい笑みを浮かべ挑戦を受け取る。それを確認したライザーは眷属の方へと振り返った。その背中では以前よりも大きく頼りになるものに成長していた。